二句　清「よはふけぬらし」

萬葉九雜一七〇一「獻弓削皇子歌三首のその一　佐宵中等夜者深去良斯雁音所聞空月渡見」

雅　さよなか　「さ」は美稱の接頭語　眞深と同じく純粹無雜の意から來たものか？　夜中となつて。ふけぬらし　更けたらしい「ふけ」は更け、闌けなども云うて夜の時刻の遲くなること。雁がね　これは雁のなく音である。

雅　雁が音響くあたりに月の亘るのが見える處から推してもう夜も更けて夜中となつたらしい。

評　萬葉の歌の本集に誤り入れられた一つで、萬葉では弓削皇子に獻じた三首の始めにこの歌があるので契沖が「此三首、弓削皇子に奉る歌なればをの〳〵ふくめる心あるべし」と謂つた。雅澄がその後を補つて、

今按ふに、今は其時節に至りたりと覺えて皇子の御葬なたのみにしたる世の人の多くなり登れるが見ゆるに、吾が身ばかりなほしづみ居ていまだなにのさたもなきに、かくては空しく時節過ぎなむを、いかで早く御恩澤を下したまへかしと、身のほどを下の心に訴るならむ。あはれ今年の秋も去めりの意あるなるべし。

と謂つた。弓削皇子は天武天皇の御妃、大江皇女の御腹の皇子で、長皇子と御同腹で、持統天皇七年正月淨廣貳を授けられたとあるだけで文武天皇三年七月に薨去あらせられた。が併しさうした寓意を以て獻詠するのは失禮なことでもあり尠からずこの一首の佳興を殺ぐと思ふ。何もさうした獻詠にしなくとも、平素所詠の一部をお目にかけたと見てもよし、皇子に侍坐して居る折柄の卽興を獻じたと見てもよし、唯この歌の文字通りの景を叙したものと、て解釋するのが正しからう。するとこの歌は如何にも素朴無技巧で、秋夜の靜觀眞に感銘深きものがある。雁陣遠く聲を曳いて萬籟唯一線を引きたゝす爲めかのやうに鳴りを沈め、宵の間東の山の端に見た月も今は移つて中天若くは入方の空に、一痕の銀輪を磨ぎすましたやうに懸つて居る。さてはもう夜も大分更けたであらうと、しんみりと月に眼を注ぎながら雁に耳を澄ますといつた境致で、井上通泰博士が「何の巧もなくてしかもいとめでなき歌なり。天衣無縫とや評すべき」と論ぜられたのは適評であらう。尙萬葉十秋雜歌二二二四にも

このよらはさよふけぬらし雁がねのきこゆる空ゆ月立ちわたる

とあるのは大抵詩形が似て居るから彼此混雜したものと想はれる。

尙此の情趣を旅愁に融合させれば一層哀れ深いものとならう。一頃學生の愛誦した「他鄕の月」の第二節の歌詞が丁度さうしたものだ。

宵の時雨は　　隈なく晴れて
傾く月に　　雁啼きわたる
あはれあの雁も　　亦わがごと
わかれや來つる　　そのふるさと

これさだのみこの家の歌合によめる

一九三　月みればちゞに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど　　大江千里

考　元・筋この一首なし。

六帖一秋の月　同。

雅　ちゞに　今は千々と書くが上の「ち」は「千」で下の「ち」は助數詞一つ二つの同系はたちみそぢのち（箇）で「千箇」と宛てるのが正しい。但し結局のところは略々同じで、色々樣々に、種々雜多などの意がある。

評　月を見ると、我身唯一人の爲めに來た秋ではないけれども、色々樣々の物思ひをして實に悲しさに得堪へぬものがある。

評　千里は漢學の家に生れた人、その作「句題和歌」は全然漢詩の句に着想した和歌ばかりである。で、こゝの歌も白樂天が關盼々に贈つた戀愛詩、

燕子樓中霜月夜　秋來只爲一人長

の後聯を和歌譯したものであらうといふことに衆評は略一致して居る。併し正しく漢詩に即したものならば前掲「句題和歌」に入れさうなものである。あれに入れないところを見ると、作者の詩情はこれ等の詩によつて啓培せられたであらうがこれをつくる時は卽ちこの一句に縋らなかつたものであらう。日は陽、月は陰であるから月に悲觀の想を寄せたなどいふのも今日の詩論からは受けとれない。但「ひとつ」と「ちゞ」を數的にかけ合はせたのは確かに修辭の一技巧である。又下の句は「斷りすぎたり」との評もあるが、かう理らなければ下の句の哀感ははえないのだから、これは批難するものの無理であらう。愚考では「物こそ悲しけれ」といふ「物こそ」がどうかと思ふ「こそ」は强意の指定にもなり衆中擇一の意味すらあるにその上に坐る詞は「もの」といふ實に漠然たる廣義語である。如何にも音律の爲めに、文字の數だけ揃へましたといつた風に見える。何とか實內容のある詞で二句を構成すれば宜い歌にならう。菅家後草に、

秋夜　九月十五日

黃菱瀉色白霜頭　況復千餘里外投　昔被二樂花簪組縛一　今爲二敗謫草萊囚一
月光似レ鏡無レ明罪　風氣如レ刀不レ破レ愁　隨見隨聞皆慘慄　此秋獨作二我身秋一

は菅公の悲慘な閱歷に裏つけられて一層切實味がある。

一九四　久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらん

考　詞書・作者　忠岑集「秋の夜月のいみじう明かりしに」
元「これたかの親王の家歌合に　千里」
三句　古本・忠岑集下「秋くれば」
六帖一秋の月・新撰　同。

講　月の桂　月の中に桂樹があるといふこと早く支那の傳說にある。酉陽雜俎に
月中有レ桂高五百丈。下有二一人一常斫レ之。樹創隨合云々
筆名苑に
月中有レ河。河水上有二桂樹一。高五百丈。
其他詞林采葉抄、和漢三才圖繪といつた風のものに多く散見する。詩では駱賓王の「桂子月中落天香雲外飄」白樂天の「偃蹇月中桂結レ根依二青天一」などあり開元天寶遺事に玄宗皇帝が月宮殿に行つて霓裳羽衣の曲のモデルにした月姫の舞を見るところに、
皓衣乘二白鸞一笑舞於廣庭大桂樹下
とある。さてこの「桂」といふのは地上に在つては肉桂樹といふ香木のことで著者の小年時代清涼飲料材としてこの香木の薰りを加味して「につき水」と稱して賞られて居たのがこの木なのである。月のかつらも」の「も」は倘地上の樹々の如くとなつて、つまり地上は今し紅葉の盛りなりといふことを言外に匂はしたものである。もみぢすればや　紅葉するかして、「もみぢ」を名詞として之にサ變動詞を加へて動詞化したものが「もみぢすれ」である「ば」は已然形につゞく助詞「や」は疑問。てりまさるらん　いつもよりは一等この秋の月がよく照るのであらう。

講　大空の月の桂も猶地上の木立の如く秋になると、紅葉するかして、(その紅葉の燃える色によつて)いつよりもあの

月がひどく照りはえるのであらう。

評 支那の傳説を取材して秋の月のさえわたることに對して詩的解釋を下したのが一首の主想で餘情としては、下界は今秋最中で滿山の木々の葉は黄纈纈の林に非れば紅錦繡の美に燃えて居るといふのがこの歌の特美であらう。萬葉十秋雜歌二二〇二に、

紅葉する時になるらし月人の桂の枝の色づく見れば

とあるのが斯種の着想の早いものであらう。共益唱歌集に、

月

桂の花が咲くといふ　古へ人の語り草
月の世界のあの隈は　今も變らぬ山のかげ
紅葉すればや照りまさる

とあるは、この歌から脱化したものである。

戸をよめる　在原元方

一九五　秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

考 三句　古典本「藏（暗）部の山も」
六帖一秋の月　同。
語 あきの夜の　月は秋が一番よくさえて照るといふので始めにおいたもの、後世よくいふ。
月月に月みる月はおほけれど月みる月はながの月

は月が八つで八月假名が十五字で十五夜、そして一首の意味は「一年の中八月十五夜の月が一番見はやされて居る」と歌つたものである。月の光し云々　「し」は強意だが。光だけについたものでなく「月の光」全體についたもの、山も　の「も」は上に困難なことなおいて「すらも」といつたもの。べらなり　はべくあるなり…　られさうにある。王朝にのみ多く使はれた想像連語的助動詞で四二二その他本集には凡て二十一ヶ處ある。丁度上代から王朝初期に盛行したべみに取つて代つた氣味がある。

評 秋の夜は他の三季のいつよりも月の光がサ明いによつて、（普通の山越は勿論）暗いと名にもつたくらぶの山さへもやすくとこえられさうだ。（「くらぶ山」は三九參照）

評 あかるいとくらい（くらぶ山）とを對照して秋夜の月明を表したものだが、用語が古めかしいので和歌と謂ひ得るかも知れぬが近世期に入つては、この程度のものは地口か洒落位のものである。

すい息子辛いおやぢに甘い母

と云つたやうなものだ。それに現に秋の夜の月に對して居るものが「秋の夜の月」とは歌はない方が現實味が多い。それが他に實感味ある想詞と聯ねられてゐる場合即ち一九一などはさうもないが、かうした遊戯的な技巧の上にまだこのやうな初句をおいては、いよくく遊離感のみが起きて「月こよひあまり光のあかければ」などいふに比べては現實味が乏しい。然るに六帖二山には、

秋の夜の月の光し清ければ箱根の山の内さへぞ照る

とある。作者の業平を信ずるならこれは人のを踏襲して表現を一層明瞭にした點は優つて居る。（光も前のは業平のならば東下りの時の卽興で、實感の歌であらう）

人のもとにまかれりける夜きりぎりすのなきけるをきゝてよめる　藤原たゝふさ

一九六　蛬いたくななきそ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる

考　詞書　元「人のもとにまかれりける時きりぎりすのなきけるか聞きて○○○」

四句　朔「なかきうらみは」

古典本「長き思ひ（此語、朔詠集、恨み）は」

六帖六きりぎりす　同。

釋　藤原忠房　目録に「太宰大貳廣敏孫、平年中播磨　少掾・藏人・左近衛將監等に任じ、延喜年間備前介・左兵衛佐・左近衛權少將兼近江介兼美作介等に任じ信濃播磨の權守や介にも兼任し遣唐判官に任ぜられたこともあり延長年間大和守から山城守に榮進し六年十　月一日に卒した、笛の名人で「胡蝶樂」はこの人の作に係る」。人のもとに　人を戀人と見たものと、親しき人と見たものとあるが戀の部にもないし、一首の落想と餘情から推して後の方が穩やかだと思ふ。但織・蟲斯などの字を宛て非常に異名の多い蟲だが、余の鄕里關西地方では「ぎす」といつたり「ぎつちょん」といつたりして居る。直翅類中きりぐ〳〵す科に屬する小蟲で、形は蝗に似て綠色のものと褐色のものとある。いたくななきそ　ひどくなくなな…　といふのはその時蟇が鳴きしきつてゐたことを表す。さうひどく鳴くなよ。秋の夜のながき思ひは　「秋の夜の」は季節でもあり時刻でもありして之を以て「長き」の有心の序としたもの、では「長き思ひ」とは何か？「思ひ」とは「物思ひ」「心配事」で「ながき」は繼續とか常住不斷とかの意、つまり「絕間もなき物思ひ」の意。そしてこゝの物思ひは風物推移とよりは、人生不如意の歎きととりたい。（若し三四句を皆正味の感詞とすると、秋の夜が長くてわびしいといふその物思ひはとなるのだが、さうしては一首の詩味が薄くなる）。我ぞ　と我を強く指したのは「現に鳴いてゐる汝よりは一層想はせる用意である。

評　蛬よ、さう頻つて鳴くことはするな、この秋の長いといふやうに長くつゞく常住不斷の心配事は現にそのやうに泣く（鳴く）其方よりも寧ろこの我の方がより以上である。（それだのに我はウンと腹を喰ひしばつて、敢て泣いたりなんかはしないではないか？）

評　作者も俳境も失念したが

空蟬の世ぢやものお前きりぐ〳〵す

とふ句は丁度この一首を俳句化したやうな趣がある。そしてその訪問先は魂合へる友だちで、互に臆底もなく世の中の憂い目つらい目愚痴たらぐ〳〵の打明け話しに夜を更かした折からに聽く蟲斯で、「マアく〳〵さうなくなよ、かうした吾吾の心配は何れ程かと思ふ」と虫を憐れみ相互をも慰んだと見るが、その先方の主人が餘りに愚痴つぽく泣言をいふので折ふしの蟲に托して主人を慰めて「あなたなどはまだ不幸の中へは入りません。私こそ本當に難儀ですよ」と相手を慰めるか又は相手を慰めると同時にこんどは自分の身の上を愚痴る冒頭としたか、何にしてもその餘情は、心よい交友の打くつろいだ會話である。詞書から察してどうもさう解せられる。

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣

一九七　秋の夜のあくるもしらずなく虫は我ごと物や悲しかるらん

考　詞書　三「是貞の親王の家の歌合歌（のうた）」三本同

宗于集「これさだのみこの家の歌合に」

作者　元「宗于」

結句　清「わびしかるらん」

六帖二蟲　同。

秋上一九六・一九七・一九八

類　あくるもしらず　秋の夜の明けるのも知らず顔に、夜晝のわいだめもないまでに。なく虫は　の「啼く」が悲しくて「泣く」と見たてたもの。

講　秋の夜があけるのも知らず顔に、晝夜の分ちもなく、ないてゐるあの虫は、丁度わたしのやうに物悲しい思ひがするのであらう。

評　作者の悲しい心境を蟲の聲に反照したもので意は明瞭だが、散文的である。

題しらず　よみびとしらず

一九八　秋はぎも色づきぬれば蚕わがねぬごとやよるはかなしき

考　初句　猿丸集「秋萩の」
四句　猿丸集「わが身のごとや」

考　秋はぎ　萩は秋の主なる花で七草にも計へられる程だから「秋はぎ」といつたものか？　他に類似の云ひ方餘りない（夏菊、春椿など一二あるだけ）。色づき　枯れて葉が黄ばんで來ると、（花が色づくでは合はない）。わがねぬごとや　自分が夜寢さめ勝ちに悲しんでゐるやうに、よるはかなしき　晝は左程にはなくて夜になるとは悲しくなるのか？　晝は鳴りをひそめてゐて夜になるとあの樣　なきしきるよといふ程の氣持。

講　秋萩の葉も枯れ方になつて下葉が色づきかけると、蚕は自分と同じやうに夜は悲しくて寢られないので、泣きあかすのであらう。

評　前のと同一型である。萩は配してないが朗詠集卷上秋、蟲に白氏文集十四の、
切々暗窓下。　暖々深窓裏。　秋天思婦思。　雨夜幽人耳。

とある。この咏やこの前の咏と相似た傷心の詩境である。秋夜長くして容易にあけず、愁思綿々として輾轉反側のわびしさを歌つたもの。

一九九　秋の夜は露こそことにさむからし草むらごとに虫のわぶれば

考　初句　元・筋・六帖六蟲「あさの夜の」
三句　行「わびしけれ」

考　露こそことにさむからし　秋の夜は風も寒いし、月光も冷たいしするが、就中露が取りわけ寒くあるらしい。さて「らし」と推測する根據を下の句に歌つたもの、草むら毎に云々　草むらといふ草むらこと〴〵くの意だが、その草むらは今作者の見渡す限りの廣野ではなく、あちらに一むらこちらに一むらとあつてどの草むらにも虫がないてゐるからにはといふのである。「草むら」とは草の群れ即ち叢で蟲のよすがと思ひ定めてのいひ方である。

講　秋の夜は一體に寒いが取別け露が寒いらしい。それほどの草むらにも蟲がわびて泣いてゐるから……どうもさう想はれる。

評　秋の夜佇みながら四方の蟲聲に耳を貸すといつた歌境で着想は面白いが、蟲のなく音をわびて泣くものとし、虫のよすがを草むらとし、露のよすがも草むらとし、秋の夜長を人のわびるものとし、多くの當時の習慣的聯想を咏み込んだものであるから後人が見ては少し煩はしい感じがする。

二〇〇　きみ忍ぶ草にやつるゝ故郷はまつ虫の音ぞかなしかりける

考　六帖六まつむし　同。

注 忍ぶ草にやつるゝ云々　「忍ぶ」は思ふ、心に深くなつかしみ思ふといふ意の「忍ぶ」を「忍ぶ草」にかけたもので、忍草は荒れた軒などの寄せによく咏まれる雑草だ、が恥がしながらまだ實物は知らない。書いたものによると、瓦葦・事無草など謂つて羊齒類中水龍骨科に屬し、匍匐して、根のやうな莖は頑強靭で全面に稍荒い褐色の毛茸を密生させ、別に本當の根も處々から分出し葉は細長くて約三四寸許あつて根莖の上に並び、質厚く葉裏で一個の主脈のやうなものの兩側に黄褐色の子囊群が、丁度八目鰻の鰓孔に似てゐるので、一名を「やつめらん」とも謂ふ。通常古い屋瓦や樹皮・岩面などに生へる。で、今日釣葱など謂つてよく軒邊にさげて觀賞するものとは別である、枕草子に、

しのぶ草いとあはれなり。屋のつま、さし出でたる物のつまなどに、あながちに生ひ出でたるさまいとをかし。

とある。やつるゝ　弊・襤褸など宛てたこともあるが、寥るゝが普　であらう。もとは人にいつたもので痞せ襞へて姿容の醜くなること、里や住宅ならば荒廢頽破といつた趣、彼の「漁父之辭」に顦色憔悴形容枯槁とあるか、あの時の屈源は實にこの「やつるゝ」の好標本であつたらう。併しこの語は轉じて色々の意味に用ひられてゐる。貴人の微行などに「やつして出で給ふ」といふのは事そぎたる輕裝といふ　で、「山伏姿に身をやつし」は變裝の意で「戀にうき身をやつして」はそれに思を焦す意である。まつ虫　リンリンと鳴く、今云ふ鈴蟲のことを古は松蟲といひ、反對に今、松蟲と謂つて居るものを昔は鈴蟲と謂つた。そこで古文を讀む時に甚だ紛はしい。古文な本位にして、松蟲リン〳〵鈴蟲チンヤロリンと記憶するが宜い。松蟲は昆蟲類中直翅類の一種で、頭部は小さく後部は大きく、色は黑褐で、リン〳〵の音は雄の右前翅に發音鏡といふ特種の構造のものがあつてそれを左前翅と摩擦する處から起きるのだといふ。鈴蟲も直翅類の昆蟲で、體は黄褐色で腹部は黄色で大きく頭部は小さく觸手が長く秋聲でよくなく。「まつ虫の音ぞ」の「ぞ」は故郷の荒廢中特にこのまつ虫の音を取り出したいひ方で此迄度々あつた「ぞ」である、卽ち月の影、風の音、夕日の薄照り、夜霧のしげき物皆哀なる中にもこのまつ虫の音が一等悲しいとの意。そしてこれに「君待つ松蟲」と「待つ」と「松」とを秀句にした。

注 御身を忍ぶといふ名の忍草に荒れ果てたこの故郷では(秋となつて物皆哀れな中にも)御身の歸りを待つといふに因んだ松蟲の音がとりわけ悲しく思はれますよ。

評 故郷を後に住み棄てて、幾年をあらぬ他郷に暮らしてゐる舊友に對し、在郷舊知の親友が事の序に歸省を勸めた郷信と見られる。九七一・九七二の贈答などにも似た情趣がある。語の聯接自然にして而かも巧緻。

二〇一　秋の野に道もまどひぬ松虫のこゑするかたにやどやからまし

考 新撰　同。

注 秋の野に　後の詞により千草八千草、面白く咲き亂れて居る秋の野であることがわかり、作者の位置の背景が知れる。道もまどひぬ　道もふみまようたといふは、秋の野遊に心ひかれてつひ歸る氣になれないといふ氣持を誇張したもの。事實路ふみたがへてどう行つて宜いかわからないといふのなら詩的な餘裕はなくなる。「も」は松虫の宿をかることに助勢したもので、松蟲も鳴いてゐるし幸（といふ譯でもないが丁度　道も迷つてゐるし旁々あすこに宿をかりようといつたものである。松蟲の　人を待つなる松蟲のと秀句にしたもの。一體この集の松蟲は皆「待つ」にかけてある。

評 秋の野遊につひ道もふみ迷うたし人を待つといふに因みのある、あの松虫の音のひゞく方にたづねていつて今宵の宿をかりよう。

松虫の秀句は陳套だが、飽くまで秋興にひたつて終日翫賞尙且つ飽かず、夜を以て晝につがんとする逸興愛すべしである。歌の多くは春にかうした情を寄せて赤人も「野をなつかしみ」て一夜をあかし、實方も櫻狩に降られて「ぬるとも花の影に宿らむ」といつたし、忠度も「行きくれて」の咏をのこし、家隆も「花の宿かせ」と咏んだが、秋の野に行き暮れて松虫を一夜のあるじとしようといふ曠達な着想はこの咏などが早いものであらう。修辭の側に於て、松虫の「音」とする處を「聲」としたのは人めかしくあるじめかしくいひ做したもので、作歌にはかうした彫心の工夫も必

要なのである。

二〇二　あきの野に人まつ虫のこゑすなりわれかとゆきていざとぶらはん

考　三句　行「音すなり」音をこゑとよんだものであらう）
　　家持集　同。

評　あきの野に　前と同樣、草花咲き匂ふ風趣をめでに漫歩の杖を曳いた有樣、人まつ蟲の云々　人を待つと名に負ふ松蟲のなく音が聞えるわい。「なり」は咏歎助動詞、われかと云々　「いざわれかとゆきてとぶらはん」で、さあ松蟲よお前が待つのは私かと一つ往つて訪うて見よう。

語　秋の野に人を待つといふあの松虫のなく聲がきこえるぞ。サアこれから往つて「松虫よお前が待つ〳〵といつてゐるのは俺のことか」と一つ聞いて見ようか。

評　これも秋郊漫遊の輕快な戯れを歌つたもので、唯「人待ち顔に虫が鳴いて居る」とか「虫が鳴いて居る」とかいふ位の常識語で片附く景趣に歌の尾鰭をつけて、秀句を擬人によつて調子も輕く流暢に調べ得た點が宜しい。

二〇三　紅葉ばの散とつもれる我宿に誰を松虫こゝらなくらむ

考　二句　清「ちりてつもれる」
　　結句　爲「こゝになく覽」

語　紅葉ば　もみぢた葉といふ義でこの方が正しいのを後には「もみぢ」を體言にして紅葉とあてた。で、もみぢばといふに紅葉葉としたり、紅葉々としたりするのは正しくない。紅葉を「もみぢば」と訓むのである。散りて積れる　散つて積つて居ることだ。が、散り積るといふよりは「て」を抑めただけ散ることと、積ることとは同時でなく、秋の初め頃から朝となく夕となく一葉ちり二葉ちりつゝいつのまにか、それが推く積つたといふので、隨てその紅葉は今いふ楓と限らない、櫻でも楓でもさては柿栗櫨といつた風の淵葉が黄となり紅となつてだん〳〵に散つたものと推測される。宿　我家の軒とか庭前とかを指したもの、宿は「屋外」屋の外の義とも「屋門」家の前卽ち入口の義ともいふ。誰を松蟲　誰を待つといふので松蟲が……松蟲は例の秀句である。「誰を」と疑問代名詞にしたのは、あるじの我には、わざ〳〵この家を尋れて來てくれさうな心あたりもないがその意も籠つて居る。こゝら　許多と書いて澤山の意。らむ　は鳴くにはつかない「誰を待たうといふのだらう」の「だらう」に當る。

語　紅葉が一葉二葉と、段々に散つて積つた我宿に、誰を待たうとて松蟲はあのやうにしきりに鳴いてゐるのであらう。（荒れた我庵に訪ふ人とては誰もないのに）

評　秋日孤獨の哀感を主想にしたものである。「落葉滿レ階紅不レ掃」といふそれは玄宗皇帝が楊貴妃を亡つての悲戀と自弔であるが、作者も亦零丁孤苦、失意蟄居の人、何の張合もなく軒の紅葉は散るがまゝ、床の塵埃も積るがまゝといつた生活をして、折節庭前の松蟲に這般の孤寂を托したものであらう。本集中斯の想脈に觸れる咏が他にもある。思ふに何時の時代にもさうだが、あの悠容とした王朝にも一部日蔭者の苦に傷心してゐた人々があつて、その内生活を美しくも哀れに悲歎したものが斯種の咏となつたものであらう。後撰五秋上二六〇に「題しらず　讀人しらず」として、

　秋の野にきやどる人もおもほえず誰かまつむしこゝら鳴くらん

を景樹はこの方を可としたけれども野としては處がら無理もないと想はれて佗しさは少しうすらぐ氣味がある。

二〇四　ひぐらしの鳴つるなべに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける

考　詞書　猿丸集「物へいきけるに道に蜩のなきけるをきゝて」

作者　卅六「猿丸大夫」
四句　元・筋「と見れば山の」顯・六帖六ひぐらし・朗「見えしは山の」相「おもへば山の」古典本「思ふ（此語、六帖・朗詠集見えし）は山の」
結句　清「かけにそありける」
新撰・卅六　同。

考 ひぐらし　蜩・茅蜩・寒蟬など書き、俗にその啼き聲によつて「かな〳〵蟬」とも「かな〳〵」ともいふ。體は六分許翅は鳶色で緣の筋がある。朝にも鳴くと古書にはあるが、多くは黄昏に鳴くので「日ぐらし」と名づけたものであらう。（顯註には廣く蟬のことをいふとある。晋の蟬を楚には蜩といひ、衞には蟾といつた云々、併しこれは前述の通で宜しい）。なべに　につれて、「なへ」は古格の制限助詞で、萬葉に

おしてるみやにきこしめすなへ　（二〇）
いや珍らしも名のりなくなへ　（一八）
けさの朝け雁寒くきゝしなへ　（一八）
雁が聞きつるなへに　（一）
雁の聲きくなへに　（一〇）

など澤山用例がある。日はくれぬと思ふは　日は暮れたなと、あたりが暗くもあり、日のくれを名に負ふ蜩がまるで日は暮れたぞと實告顔になくのでそれにつれて日はくれたと思ふ。かげにぞ有ける　それは山のかげであつた。「かげにざりける」は「ぞあ」を約したもので意味にはさして變りはないが、「何のこつた。日が暮れたと思つたら、山蔭のせいであつたわい」の感を強める爲めには矢張字餘にしたい。

評 蜩が鳴くにつれて日が暮れたと思つたのは（さうではなくて）山の蔭であつたわい。

評 山の蔭といつても山そのものの陰影ではなく、麓の木立一むら繁くして而かも東寄の處とて早く日がかげつて畫猶蓊鬱の蔭をこもらせるあたりと見るべきで、そこの生活になれない都人がたま〳〵この里に來て「オヤ早や日の暮かいくら秋の日足が短いといつても此はひどい――」といつた心地で外面に見入つた刹那の感じで、蜩は折柄の實景でもあつたらうが、蜩にはかられたと樣にしたのは作者が秀句の小手をきかしたものであらう。後撰五秋上二五四貫之の題しらず、

ひぐらしの聲きく山の近けれや啼つるなへに入日さすらむ

はこの亞流で少し分別に落ちて劣り樣である。だが併し本集のこの歌としても松平定信の次の一首に比べると、着想やや輕浮の嫌がある。

蜩　こゑの内よりくれそめて寂靜なりたそがれのやま

二〇五　日ぐらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし

考 三句　小町集「問ふ人ぞ無き」
古典本「問ふ人も無し（三字小町集ぞ無き）」

類 なし

評 蜩のなく山里の夕方は誰一人訪ふものもなく（たま〳〵音づれるものとては）そよ吹く風があるだけで、（これをのけては）誰もない。（その寂しいことといつたらない。）

評 當代咏歌に「訪ふ人なし」と歌つたものに何れ寂しからぬはなく、この歌も亦孤寂に獨往する作家の聲ではなく、「あはれ寂しも」と餘情を曳くものである。而かも二八七のやうな疊句もなく、ありのまゝをすら〳〵と叙して、歩一歩

咀嚼すると、一蜩、二山里、三夕暮、四風と寂しい題材を伏せて最後に、五訪ふ人もなし、と最大級の寂しさを提げて「成程これは寂しからう」と想はせる不用意の用意はなか〳〵に老練な口つきである。これの類咏としては、後撰五秋上一九四題しらず、讀人しらずの

八重むぐらしげき宿にはなつむしの聲より外にとふ人もなし

壬二集（家隆の家集）下の有心樣、秋

虫の音も涙つゆけき夕暮をとふ物とては荻のうは風

はつかりをよめる

二〇六　待人にあらぬ物からはつ鴈のけさなくこゑのめづらしきかな　　在原元方

考　二句　一本「あらぬ物ゆゑ」

六帖六かり　同。

評　まつ人にあらぬ物から　初雁は我にとつては待人でも何でもないけれども、「物から」は物ながら、物なれども、物ゆゑと同意、ないとはいふもののといふ程の意。初雁　初秋の雁、月令に「仲秋之月鴻雁來」とあつて略八月の候鳥となつて居る。けさなく聲の　三句に初雁とあるからその聲はやがて初聲とも謂ふべき新しい聲で、まだ啼きふるしたものでない。又「けさなく聲」は實は作者がゆくりなくもけさふと聽き得た聲といふので、そこに輕い調子が出て居る。そしてその調子の中には不用意に得た雅致の愉悅が含まつてゐる。

講　雁は待人ではないとはいふもののけさふと初雁の聲をきくと流石に珍しく雅致あるものだなあ。

評　不用意の好景といふ點に於ては一四二と似て居る。待人はそれが性の同異を問はず珍らしく好ましく、その聲はいつも初音の鶯とも響かう、それをとつて、今雁が音を響へたので非常に溫密な感じがある。而かもそれが季節違へず訪うて來る雁であるから待人との對はその點から面白い。が併し四句は「けさ訪ふ聲の」「けさ呼ぶ聲の」など「なく」といふ語を拔きにすべきではなからうか。でないと待つ人の泣くのではなく雁のなくのだが、とその泣くことまでが對照感に混入するのみならず次のやうに作意にそれた解釋が何の矛盾もなく成立する。

自分は雁の訪づれを心待ちにするやうな風流人ではないけれども、併しけさふと啼いた初聲を聽いてはさすがに珍らしいと思うた。況んや我ならぬ風雅好事の人々にしてあの聲を聽き得たらんにはどれ程珍らしみもてはやすことであらう。

是貞のみこの家の歌合のうた　　とものり

二〇七　秋風に初雁がねぞきこゆなるたが玉章をかけてきつらむ

考　詞書・作者　元「是貞。親家の歌合に。。。　友則」

二句　新萬上「なくかりかねそ」

三句　古典本「聞ゆ（此語、六帖、響く）なる」（刊本六帖六かりには此歌なし）

清頭「此歌寛平后宮歌合也如何　別紙本文也」

廿六　同。

評　秋風に　雁の背景を示したもので、秋風の吹くに連れて。初雁がね　初秋の雁のなく音。きこゆなる　の「なる」は咏歎で、雁の音なば感慨深く聽いてゐる日吻。玉章　は人の手紙に對する美稱で後には尊稱となつた。その語源については定說が無い。

一、「つ」は體言助辭で、玉は美稱で「さ」は「章」　音を略したものだ。眞淵。

二、玉は美稱で「つさ」は「あづさ―梓」の約。梓は古へ弓を造つた木で弓は矢を遣るものだから、玉梓は始めは「使を遣る」

ことを意味し後にはその使に托する手紙のことをいふやうになつた。契沖・谷川士清。

三、梓に玉をつけて使の印とした所から來たもの後世の「錦木」の類。宣長。

四、陸奥の桃生郡に遺つて居る。懸想文をさしたものが後に一般の手紙にもいふやうになつた。その文の結び方は五十幾つと殘つて居る。村田春海。

五、艶書の一種で紙を一定の形に折つて中に色々の物を入れ、それによつて情信をなすもの、使へば菖蒲と松葉とを入れると「今夜待つ」となり蓬蒿を入れると「よし」と承諾したことになり端絹は「出來ぬ」絲は「來る」といつた風で、まるで戀の、判じ物か辻占と樣のもの、甲斐の都留郡にその遺風が見られる。日本古代文字考下四。

これ等の諸説について批判の資料はないが、唯何となく第五のものがよくはないかと思ふ。鳴門中將物語にも小宰相局(家隆の女)が「此暮に必」とある返しに「を」と返して來たのを判じて、小式部内侍對敎通の例を引いて應諾の意を男は「よ」女は「を」といふからこれは「承知いたしました今晩參ります」との意であらうと判じたことが出て居る。何にしても單に「おとづれ」とか「たより を」「せうそこを」などいふよりは、一種の懷しい期待をこめて手紙のことをいつたものと見れば宜しからう。かけてきつらむ　翼にかけて來たことであらう。雁が消息の鳥であることについては色々の說があるが、普通には前漢の蘇武から來たといふ。漢の武帝中郎將蘇武を匈奴にやつて檀廷の間に折衝せしめた處、匈奴の王は武の勇をめでて、降つて我に仕へたならば重く用ひようといふ。武は之に從はず毅然として漢節を持した王は彼を岩窟の中に幽閉して食を與へずに苦しめた而かも武の志操は凜乎として烈日の如く飢えては氈毛を雪に和し、月一月、年一年、氣力毫も衰へない。衆以て神とした。一夜月澄み風涼しく旅雁渡ること類りなり、彼即ち一書を認め、旨をふくめて雁に托し以て故郷の母に自分の從在を傳へしめた。その雁は飛んで漢廷の御料林（上林苑）に下り廷臣の獲るところとなつて臣下の取次によつて帝王の目にとまり吹いで老母に下された。帝王といふのは武帝の次の昭帝である。乃ち急使を派して匈奴と和を講じ、武を率て還らしめた。武匈奴に往いてより十有九年、始め紅顏綠髮を以て往き、今還るに及んで鬢髮悉く白くなつてゐた。それよりして雁は書信の鳥といふやうになつたといふ。この事漢書蘇武傳に傳ふるところ聊か異同があつて「武が大澤の中に幽せられて居ることは雁のたよりで知つて居るぞ」と匈奴をだまして實を吐かせて、つれて歸つたとある。（尙、李太白がこれを吟じた詠史の一篇があつて故事成語大辭典にも出て居るし、坪内逍遙博士作の詩「蘇武」も可なりひろまつて居る。今一つは雁の列を爲して渡る形が手紙の文字の樣に見える處から來たものだともいふ。契沖あぐるところの句に、

雁飛ニ碧落一書ニ青紙一　青苔色紙數行書。　水底模レ書雁度時。

などある。俳諧檀林派の首唱者西山宗因の句にも、

和闐の文字か横たふ天つ雁

とある。とにかく「雁の信」とか「雁のゆきかひ」などは用語にもあるし消息文の書名にもなつて居る。隨て我が短歌史上雁を消息鳥として着想したものは澤山ある。

三 初秋風が吹くにつれてアレ雁が音が聞えるわい。（雁はたよりを齎す鳥ときいたが）さては誰の音づれぶみを翼にかけて來たことであらう。

四 初秋山里草庵獨居の人の行雁に懷を遣つたものとして哀れ深い佳咏である。吾々は雪の弘前に蟄居して、學校往復の都度偶々くさ繩しで紐にかゝつた小包の車に出あふことすら一種の懷しみを覺える。それは「あの一つ〳〵が配達せられて、自分が包みを解く時と同じ樣の胸のときめきを覺える人の數を示したこの車」といつた懷しさである。或國事犯で入獄した人は、人つけ一人ない牢屋で、相手ほしさの餘り、とう〳〵鼠と友達になつたといふ。人間といふものは、常は互に暗鬪顯鬪の數々を演じながらも一日だつて他の人間に接せずには暮らされないやうに出來て居る。（だからアリストテレスも人は社會的動物なりといつた）かうした人間性に即してこの歌を見ると、その人たゝの離群索居の人としても哀れ深いものがある、まして秋風吹き旅雁至り、故舊杳として音信通ぜざることこゝ數句といつた作者ならば、これは決して虛誇の感傷ではなく、心からなる絶叫とも解せられる。

題しらず　よみびとしらず

二〇八　わが門にいなおほせ鳥の鳴なべにけさ吹風にかりはきにけり

考　清頭「猿丸集別紙」（刊本猿丸集にはなし）

講　いなおほせ鳥　古今三鳥（百千鳥、呼子鳥――）の一として鎌倉室町德川初期にかけて秘傳扱されたもの、その說も亦區々で餘りにくだ〳〵しいから、要點のみをあげる。

一、鶴鷸（庭たゝき・石たゝき・交接鳥）をいふ。名義は「稻課せ鳥」でこの鳥の來なく頃、稻刈る業が始まるからいふとも、「奈何詔鳥」の轉で、「諸冊二尊が問答せられた折柄に顯れた鳥」との義ともいふ。

逢ことをいなおほせ鳥のおしへずば人をこひぢにまどはましやは　和泉式部

顯註・餘案抄・打聽・神代日訣・山彦冊子雜語考・能宣・順・公實・仲正等の作歌。

二、山鳥。顯註・餘材抄等に傍引せるもの。

三、馬。馬は稻を負はせるものだからか？（それなら稻負馬の「馬」が「鳥」と誤つたものとも謂ひ得よう）

四、雀。玉かつまには「にふない雀」をいふとある。兼盛集の次の歌なども、「雀」と解したものか。

九月田かるところにおきなあり
からくしていそぎかりつる山田かないなおほせ鳥のうしろめたさに

五、つき（鵲）

六、總じて我國の稱呼の大まかなことは八重葎・忍草・百千鳥などに徵してもわかる。この稻おほせ鳥の如きも、秋頃稻田近くへやつて來る鳥の總名位にとれば可い。嚶々鉾語。先覺が此程考へてわからぬ鳥を、今妄斷することは出來ないが定家の餘案抄と千蔭の山彦冊子とには單なる臆測でなく、實際の經驗談が事細かに述べられてあるし、例歌も澤山あるから先づは鶺鴒と採るがよくはなからうか、これは「みそさゞい」とも謂つて候鳥ではなく、四季を通じて居る。燕雀類に屬して、形體は雀に似て、それよりも小さく、全身灰色に黑褐の斑點があり、鼠狀にして一端に小孔ある巢を山　や材木小屋の軒などに構へるが、その巢が巧妙だといふので一名を巧鳥　たくみ鳥）ともいふ。

なべに「なべ」は「おしなべて」のなべ（並べ）と同じで、それと同時に、それにつけてなどの意。けさ吹く風に「に」は添加、風が吹くにつれてといふ。すると上の「に」と同じやうだが、上のは稍同時存在の意がある。（卽ち一方には云々）ことがあるとそれに對して一方には云々。甲では稻おほせ鳥の鳴くと、乙では風が吹いてそれと共に雁がやつて來る）。來にけり　の「に」は現在完了「ぬ」の二活で、次の「けり」と連なつて所謂大過去となつたものだが、こゝは時法の意味は薄くて寧ろ咏歎の意を含ませてある。雁が來てからもう大分になるといふよりは雁も來たなあとしみ〴〵眺めた心持である。

評　我門近く稻おほせ鳥が鳴いて居る……と一方大空では風が吹き、その叉風につれて雁がやつて來たなあ。

稻おほせ鳥の正體がわからない以上何とも評し兼ねるが、假に鶺鴒と定めて所感を述べる。この主題の不明な上に「に」を三つも疊用して形式が晦澁な爲めにこの歌は從來あまり褒められてはゐない。尤も「に」を重ねたものとして一一三の小町の歌もあるが、あの方は少しの難もなく運用されてあつたのが、この方では徒に主想を混亂させて、お負けに稻おほせ鳥を歌つたのか、雁を歌つたのか上句と下句に別々の鳥が使つてあるので愈々以て不得要領に終つて居る。けれどもこの歌を以て假に左の如くに解くとすれば、亦是れ初秋佳什の一としてよろしからう。

處は山里で農家が三々伍々點在するあたり、門は直ぐ稻田に續く、その稻田の稻も最早充分に黃熟して、今に山里入の鎌を入れようとする頃、早耜に茶漬でも喰つて居ると鶺鴒の聲がする。パパア奴さん復ゃつて來たなと思つて、やがて支度もそこ〳〵外に出て見ると、風サラ〳〵と吹いて空には雁が飛んで居る。そこで自分も每秋味はへて來た秋氣分になつた……。

と、若くは作者は田づくりでなく、きる山里に閑居してゐる人で、鳥の影は一つも見ないで、唯その啼く音に耳を傾けて居るとしても面白い、とにかく近景の鶺鴒と遠景の雁とを地上と天上と對照し、その中雁に重點をおいて折柄の秋

風に御して訪づれ來たかのやうに歌つたもので、鳥の重複は別に厭ふべきではなく、着想に於ては初秋の詩味が横溢して居ると思ふ。「和歌極秘傳抄」の「三鳥の口授」といふ一項の左の記事は、この意味に於て要を得て居る。

歌の心は稻おほせ鳥といふ事、秋の稻を刈り侍る時分、雁來りて鳴き侍れば、時節の相當に自然と付たる名なり。（この雁即稻おほせ鳥としたのは肯はれない）門田の稻の漸く色ばわたる、朝のものすごき折に、空とぶ雁の音信たる、景氣哀なる物かなといへる歌のすがたなり。此外おそろしき別の口傳なし。

二〇九　いとはやもなきぬるかりか白露の色どる木々も紅葉あへなくに

考　二句　相・六帖六かり「なきつる鴈か」清「なきぬるかりか」

三句　六帖六「白露に」

三四五句　行・爲「秋ハギノシタバモイマダモミヂアヘナクニ」

結句　六帖六「紅ぢ敢へぬを」古典本「紅ぢ敢へなくに（三字、六帖、ぬを）」

左註・三「又は秋はきのしたはもいまたもみちあへなくに」（三本共無）

清「又はあきはきのしたはもいまたもみちあへなくに」

六帖二もり「最早も鳴ぬる雁かこがの森木に這ふ葛も紅葉敢なくに」

釋　いと　大さう、（いたくの語系か？）十朝文にはこの語盛に使用せられて、必ずしも最上級の意なくとも「一寸」「隨分」「可なり」などの程度の「最」もある。がこゝは矢張大層、大變の意。はやも　早くも、マア早いことだなあ、三句はなきつる雁かの方が宜い。「つる」は現在、その物に當面した語で「ぬる」は「往ぬる」で、その物去つた後の語である。今なく雁を見るか聽くかして驚いてゐるといふには「つる」の方が適切である。「雁か」の「か」は咏歎かな。白露の色どる木々も　秋は露しげくおき續き、やがて紅葉するところから紅葉を以て白露のわざと看做すこと、この頃作歌上普通の趣向となつて居つた。（二五七など）「色どる」は彩どるとか繪どるとかいふに當る。紅葉あへなくに　まだ紅葉して居もしないのに、「あへなく」は八二と同じ。

譯　大層早く雁が啼いたものだなあ（いつもあの雁の啼く時分には、白露紅葉の美が見られるのだが、その）白露の彩色する方々の木立もまだ色どりが出來ないで紅葉もしてゐないのに。

評　床の間も飾らない中に招待客が來たといふ格である。つまり作者は白露と紅葉とを大地の座敷とし、雁がねを遠來の賓客として、あるじ振つた心持に浸る時を以て最も恰好の秋興を催して來た人なので、その一を缺きその二を缺いて、その三のあわたゞしい來訪に驚いたといふのがこの一首の主情である。類咏には續後拾遺四、秋上三〇七題しらず中納言家持、

雲の上に雁ぞ鳴くなる我宿の淺茅もいまだ紅葉あへなくに

六帖二、もり、

最早も鳴ぬる雁かこがの森木に這ふ葛も紅葉敢なくに

又反對に雁の遲いことを咏つたものは同じ六帖の六、かり人丸三首の中、

怪しくも來鳴ぬ雁か白露のおきにし秋は久しき物を

二一〇　春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴なる秋霧の上に

考　作者　六帖六かり「人まろ」袋草子「躬恒か子の小童」古今著聞集「友則」

三句　元・顯「かりがねの」清「かりかねの」

新撰　同。

釋　春霞　下に「に」を補ふ。かすみていにし　姿をかすませて、北の國へ往に去つた。かりがね　唯「雁」といふこと。今ぞ鳴

なる秋となつた今しも啼いてゐるよ。秋霧の上に　霧たちわたる秋の空に。

語釈　春霞に影をかすませて、北の國へ去つた雁は今や秋霧の上に聲をほにあげて、復こゝに來て鳴いて居るよ。（春霞と秋霧と。かすむことと聲を立てること。北の國と南の國去ると來ると皆對照的に按排せられてある）

評　修辭では前述對照法の外に四五句の釣合のうまい點が目立つ、「今ぞ」の「ぞ」が強い上に「なる」が咏歎であるために四句は非常に強烈な表現となつてゐる爲め、五句を普通の「秋霧の上」などしては、龍頭蛇尾の憾があるのを「に」を足して字餘りにしたので強さが相拮抗して龍頭龍尾のどつしりしたものに仕立てられてをる。純粹の享樂感情とよりは、回顧的な情趣を歌つたものである。今年、春、霞の中に姿を消した雁と、今秋となつて霧の中から姿を露す雁と、その趣が甚だ相似て居るが、又甚だ相異なつたものもある。去つた時は春陽和煦の麗日、而も「もう此國で啼くつとめは終へた」といふ解放の氣持で見られ、人自身も暢達の氣に浸つて居たものが、今は秋冷凜として雁は「これからが我世」と緊張の感で觀られ、人も秋冬の二季荒涼の關を越えようとする序幕である。異中同あり、同中異ありと觀たものでこの回顧的な對照感の上に、春暮れて夏來り、その又夏も過ぎて今や秋と三季の推移に想到する感じもしんみりしたものであるが、作意としては寧ろ着想を幅廣にして出發と歸着とに大きな距離をおいて、春霞に始まつて秋霧に終らせながら不自然な飛躍もなく、歩一歩主題に推し進めて行く、その巧緻な措辭の意匠に興をおいたものではあるまいか。

そこでこの歌境については、顯註や抄に「古書に云ふ」としてあげたものに、

延喜の御時、躬恒の子の小童を召された折柄雁が音が聞えたので「あれを題で一首咏め」と仰せられるとその小童はやがて「春霞」と咏み出したら、侍坐の人々が、これは飛んだ季節外れだといふので哄と笑つた。獨、その父躬恒はヤアこれは面白いぞ！といつたが、果せるかなこのやうに立派に咏み了へたので主上を始め皆々感歎せられた。

處で此に似た歌境として古今著聞集五に、

寛平歌合に雁の題で左方の友則が「春霞」といふと右方のものが、くす〳〵笑つたが、二句三句と進むにつれて嘲りは消んでヤン成程、ヤアこれは面白い、ナーンとうまいなあとなつてな有共に嗟賞したといふ。

とあつてその直ぐ前に花園左大臣家で今參りの侍が、「はたおり」の題で咏めといはれて「青柳の」といひ出すと女房が皆笑つたが、

青柳の緑の絲を繰りおきて夏へて秋ははたおりそなく

と咏み了へると大臣感に堪へて萩を織つた直垂をかづけられた。

ともある。寛平御歌合といふのも怪しいし、寛平御時后宮の歌合にはこの歌は無いからこの說は信ぜられない。一體著聞集の作者は「藪にも功の者」と謂つたやうに人の意表に出た初心の徒や卑賤の徒の秀咏に興味を以て書いたものやうに想ふ。處がこの歌は斯うしたことで一層もてはやされて居たものと見えて、次の定家の歌は確かにこれに暗示を得て居る。

霜まよふ空にしをれし雁のかへるつばさに春雨そ降る

霜まよふ空と春雨そぼふる空と相似た情趣の中に彼女の一來一去の景を咏んで同中の異、異中の同を見せ、こゝの歌が春夏秋と三季を含んでゐるのに、定家は秋冬春とその後を歌ひ、「何でもこの歌の向ふを張つてもつと巧く咏まう」といふ意圖があつたものと察せられる。

又右とよく似た俳話は芭蕉が諸國行脚の途次、攝津の國鳥飼村まで來ると、丁度明月の夜でさる處に俳諧の運座を催して居る。一見乞食僧のやうな翁を憐んで月見の御馳走など與へて、やがて作句が始まつて「お前もよばれ切りはひどい。一句よめ」と强ひる。「ではいひますから何卒御書きとり下さい」で始めに「三日月の」といつたら、座中大笑ひ

して「十五夜の月をよむに三日月とは何のことか？」と嘲る。翁はかまはず「頃より待ちし」と二の句をつぎ「今宵かな」と三の句を咏み下す。

三日月の頃より待ちし今宵かな

これに一座は驚き起つて俄に翁を上座に据ゑ「どうかお名前をおきかせ下さい」といふ。「イヤ俺は芭蕉といふものぢやが……」「エツあの芭蕉翁――」「道理でこんな御秀吟を　…」「御迷惑でも當分こゝに御滯在になつて御指導を願ひたうございます」そこでとう〳〵彼は此地に滯留して、風雅の教を説いたといふ　これの典據的な記錄は何にあるのかは知らぬが可なり有名な話で、アストン氏の文學史にも英譯されてある。尙、この歌の作者六帖に人丸として雁の歌三首並べてその中にある。人丸でないまでも作の時代は奈良朝末王朝始位の調ではなからうか。

○二一　夜をさむみ衣かりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり

このうたはある人のいはくかきのもとの人丸が也と

考　作者　六帖六「秋萩　人麿」
二句　古典本「衣雁（借）がね」
結句　元・筋・行「いろづきにけり」
新萬上「夜緒寒美衣借金鳴苗丹芽之下葉裳移徒丹藝里」
新撰　同。

釋　夜をさむみ　夜の寒さになあ「み」は例の緣由を示すと共に咏歎を込めた古格の接尾語。處でこの句は二句に係つて夜が寒いから衣を借り着しよう

夜が寒いから雁が啼く
としたものと思ふ。この一句に重きをおくと
夜が寒いので雁がないて
萩が色づいた
と下句までも支配するやうにもとれるが恐らくさうではあるまい。衣かりがね　衣を借りようといふかりがねが秀句。衣かせ山などもいつて昔は衣の貸借は今日より以上多くしたものらしい。（無論職業的の貸衣裳屋ではない）又雁は借りの外に「わさだ雁がね」など「苅り」と秀句にもした。すると上句とのつゞき柄は「夜を寒み衣」までが「雁がね」の序詞として情趣の句を持つたものである。萩の下葉　萩の葉は花と共に觀賞され咏歌されて居るがその凋むのに下葉先づ黃ばみ次第に上葉に及ぶ。

釋　夜が寒いので衣を借りようといふ音に因みのあるあの雁が鳴くにつれて萩の下葉も色づいて來たわい。

評　金子氏の解に
「夜を寒み」といふまでを序詞と解した說もあるが、さうでない。「夜を寒み」は雁の來るにも、萩の下葉の移ろふにも打ち合つた主要の句だから、序詞の如き輕い意のものではない。
とある。此もよく考へられた解と思ふから暫らく併せあげて、取捨は諸君に任せることとしよう。唯併し、雁の泣く音がもとで草木の葉が移ろふと樣に觀るのが上代、中古を通じての着想に多く見られることは本集二五八を見てもわかるが、尙萬葉八秋雜歌右大臣橘家宴歌七首の中二首までも同樣で、
一五七五　雲の上になきつる雁の寒きなへ萩の下葉も紅葉つるかも
一五七八　今朝なきて行きし雁がね寒みかも此野の淺茅色づきにける
などある。殊に前のものはこゝのに酷似して上の句に後世振の秀句的技巧を加へただけの相違であるから、恐らくは雁

の啼くを泣くととつてその故で下葉が色づいたといふのが作意であらうとは想ふ。左註は誤といはれ、この作も寧ろ扮本の萬葉の方が優つた感がある。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

二二二　秋風に聲をほにあげてくる舟はあまのとわたる雁にぞ有ける

藤原菅根朝臣

考　詞書・作者　元「寛平御時、后宮の歌合。　。菅根。」

初句　清「あきかせは」

三句　元「ゆく船は」

五句　六帖六雁・新萬上・寛午御　后宮歌合左一七「雁にざりける」

新萬「秋風丹音緒帆丹　手來船者天之外亘雁丹佐里藝留」

釋　藤原菅根　一五一五――一五六八齊衡二――延喜八、七、七、五十四歳、春繼の孫で、父を良尚といふ文章生出身で才學あり詩歌文章を能くし、官は參議に至り、位は從三位を贈られた。與つて延喜格をも撰んだ。三代實錄に父のことを書いたつゞきに「長子菅根篤學經史百家華該」とある。唯一つ遺憾なことには菅公左遷の時、彼は時平方について、宇多上皇にその事を奏聞しなかつたので不都合とあつて延喜元年正月廿五日太宰小貳に貶せられた。けれども間なく赦されたのである。秋風に「に」は原因を示し秋風によつてとなる。秋風を船の追風（順風）に見たてたもの。ほにあげて　あらはに聲をたてる「ほ」と船の「帆」とを秀句にした。「ほ」は「秀」と宛てて、何に隠らず顯著に露はれることをいふのだが、之を同音の帆にかけたり、又「穂」にかけて五四七のやうにもいひ、又「火」にかけて、

見渡せばあかしのうらにたつる火のほにこそ出め妹に戀しも　（萬葉）

などもいふ。くる舟は　雁を舟に暗喩したもの、そして上の帆い緣語にもなつて居る。此を「往く舟は」としては興が薄い。春さきの歸雁のやうになる。あまのと　天之門「門」はもとは「戸」の意で水の流れの出入口の家で瀬戸、川戸、水戸などいふ。（水戸を水止として河流の止まるところと解するのは後世のことであらう）。雁にぞありける　雁であつたわい。「ざり」としたのは「ぞあり」を約したものでつまりは同じである。

譯　吹く秋風によつて聲をあらはにたて帆にあげてやつて來る船は（何のことはないそれは）大空の川とを渡る雁であつたわい　これは面白い）

評　始めに「聲をほにあげて」を得て次々に譬喩を想ひついたとも想はれ、始めに大空の飛雁を見て「まるで船のやうだ」と思つたので次々に出來た意匠とも想はれるが、要するに、

大空と大海原　雲と波　船と雁　帆と聲

と四對までも類似の聯想をたくんで而かも、渾然たる流麗の口調にこなし得て居る。空を海に譬へることは早く萬葉七雜歌一〇六八に人麿の、

天の海に雲の波たち月の船星の林にこぎかくる見ゆ

といふが見えても居るし、今日吾人の實感から謂つてもふさはしい着想だ　又、雁を舟楫に譬へるとも恐らくこの前後頃からあつたものであらう。自分は早く花月雙紙を見て卷末「花月の遊び」に、

いかにこの花をみすててかへるは、かりがねにつらきやならへる、櫓の音ばかりまなべよかし

とあるのを解くに苦しんで「雁のなく音は昔から櫓の音に譬へるものだ」との説明を見て面白い句だと思つたが、今更二た昔の思出となつた。本朝文粹卷十一に重陽の後朝應製の序文を作つて居る。

菅贈大相國

重陽後朝。同賦二秋鴈聲來一應レ製

重陽之後。翌日之夕。秋鴈者。月令之賓也。風窗之聽也。觸レ物以感。非レ來二鏡湖之波一。馳レ心以思。只望銀漢之岸。「于」時涼風

鷹動。夜漏類移。云々

とある。その他漢詩には可なり多いところを觀ると、この說方は支那からの傳來であらう。

かりのなきけるをきゝてよめる

二一三　うきことを思ひつらねて雁がねの鳴こそわたれ秋のよなゝ　みつね

考　詞書　元「きゝて」の三字なし。

二句　元「思ひつられ。」

六帖六かり　同。

釋　思ひつられて　つぎゝ思ひつゞけて、「つられて」は雁の列つて飛ぶことにかけたもの。鳴こそわたれ　雁が啼き渡ること と自分が泣き暮らすこと（泣いて世を渡ること）とをかけたもの。よなゝ　夜毎々々、毎夜毎夜。

釋　雁は憂きことを思ひつらねて秋の夜なゝを啼き渡つて居るし、自分も世の憂きことを思ひつゞけて毎夜々々泣き暮らして居る。（あゝあの雁と此の我と何ぞその境遇の相似たる。）

評　「かりかねの」は「泣きこそわたれ」といふ序詞に措いたといふ解はとらない。そんな主想にもならない「雁」をわざゝ詞書にあげることもないし、六帖はしどけないものと謂つても之を「かり」の部に入れて居るし、この集の撰者も之を述懷とするなら雜に入れただらうが、矢張「雁」を主に見て秋の部に收めたものである。そしてその撰者の一人はとりも直さず作者なのである。即ちこの歌は一首凡て秀句仕立で完全に情景を融合した珍しい歌態である。秋夜更闌けて人生の不如意につくゞ想ひ到る折柄、行雁の一列高く遠く空の一角を掠めて去る。その聲哀婉悲愴にして、詩人斷腸の想愈々高潮する。この樣なことが幾夜かあれば、正にこの歌通りの實感を閲歷する譯で、全句言掛にして尙且つ輕浮ならず、作者即興の秀咏中殊に老練の致を觀るに足るべきものであらう。

是貞のみこの家の歌合のうた

二一四　山里は秋こそことにわびしけれしかの鳴音にめをさましつゝ　たゞみね

考　詞書　忠岑集「秋」

元「是貞のみこの家の歌合に」

忠岑集「悲し（わびしィ）けれ」

三句　六帖二山里「悲しけれ」（刊本は（侘しけれ））

清頭「彼歌合にはれさめ〳〵にしかはなきつゝ」

釋　山里は　山邊近き里は（都とはちがひて）。秋こそ云々　「こそ」は多くの中から特に一つを取出して強調したもので、山里の春夏秋冬いつも淋しいが殊にこの秋が一等淋しく物憂いと思はれるよ。しかの鳴音に云々　夜更けてとろ〳〵と寢についたかと思ふと鹿が悲しい音になつてパツと眼がさめて（さてまんじりともせられないので、しみ〴〵そんな心地がする）

釋　小夜ふけてやつと夢路を辿つて居ると鹿のなく音で眼がさめて（それが耳についてどうにもおち〳〵眠られず）あゝ山里は秋が一番淋しく雜儀だなとしみ〴〵思はれることよ。

評　これも「山里の寂寥は秋を最とす。例へば半夜の鹿に夢圓かならざるもその一つなり」と樣にもとれるが、それは山里生活の寂しさを講義する人の構想で歌の感味がうすい。已に秋の山里が有つ畫のさびしさも宵の淋しさも月明のものとしてきて一日淋しく暮らしてマア夜だけなりと一睡の安きにありつかうとした折柄、鹿のなく音に夢は破れ寢られぬ儘の感じとして上句のやうな表れとなつたと見たい。鹿の啼く音はどんなものか自分にははつきりした印象がな

い。一年の秋奈良の舊知を尋ねて一泊し、「今夜は春日樣の鹿が聽かれる」と期待したが、つひ寢込んでしまつて不得要領であつた。（があすこには幾多の神鹿が公園一面に群れて遊んで居るから斯うした便宜はあらう）漢詩では呦々と形容し、尺八の曲には「鹿の遠音」といふ美しいものがあるが、あれは餘程美化されて居らう。歌では此に悲哀愴涼といつた感じをよせたものが多い。萬葉十秋雜歌詠鹿鳴二一四六に

山近く家や居るべきさをしかの聲を聞きつゝいねがてぬかも

とあるのはその早い例である。

二一五　おく山にもみぢふみ分なく鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき　よみ人しらず

考　詞書　元・筋「題シラズ」

作者　卅六「猿丸大夫」

初句　卅六「おく山の」

猿丸集（群二三八、九、五八七——五八九）新萬上・百ノ五　同。

清頭「此歌有寛平中宮歌合猿丸集但五文字あき山の又詞云しかのなくをきゝて」

清脚「御本ニハ題不知之字ナシ然者惟貞歌合歌歟」

釋　おく山　口山に對する奥山と嚴密にとらず、唯山里住まひする人が山の方を大まかにおく山といつたものととる。でないとむづかしい穿鑿が始まつて花は口から奥へ段々と咲いて行くが、紅葉は奥から先へ散つて口の方があとに散るから暮秋の紅葉鳴鹿は寧ろ口山の題材であるなどいふ愚論となる。もみぢふみ分　ふみ分とあるからには無論紅葉の落葉である。その落葉は一時にドサリと散つたものでなく次第に凋落して自然堆積したその上を踏み分けつゝである。但これは作者が實地肉眼で見たのではなく多分紅葉をふみ分つゝ啼いてゐることであらうといふことを強く現實の形にして表したものである。聲きく時ぞ云々　聲を聞く時がサ、秋を一番悲しいものだと思はれるわい。

語　（秋は凡ての景色が悲しいが殊に）奥山の紅葉をふみ分けつゝ啼く鹿の音を聽く頃の悲しさつたらない。（あれをきくとしみ〴〵秋の悲しさといふものが胸にこみあげてくる

評　これも餘材抄にあげた一說などは「吾れ奥山に紅葉をふみ分けて遊ぶ折柄、鹿の啼く音をきく時云々」として、「なる程新撰萬葉の左詩の轉句は寧ろその意に適合して居る」とある。所謂左詩とは、

秋山寂々葉零々。　麋鹿鳴音數所聆。　勝地尋來遊宴處。　无レ朋无レ酒意獨冷。

といふのでこの第三句は明らかに人が尋ねて行つたことになつて居るが、併し「勝地」などと謂つてはこゝの哀れは響かない。唯一個無名の奥山としてこそ寂しさが強く出てゐる。山里住まひの作者が、偶々發見した暮秋哀愁の一つの姿を歌つたものとして趣深いものがある。

作者を猿丸大夫とするのは誤であらうが、從來の諸註「この歌猿丸大夫集になし」とあるにも拘らず考にもあげた通り刊本の群書類從の猿丸大夫集には明らかに入れてあるのはどうした譯であらう？　加之猿丸大夫集は固より僞作であらうがその僞作すら今日刊本の續國歌大觀四一五——四一六と前述群書類從とは詞書に異同があり、歌數に不同がある。（續國の方は三十七首群本の方は四十九首）

がとにかくこれは小倉百人一首などによつて流布した爲めに猿丸大夫作と信じて居る人が多いやうである。（蜀山人が鹿の首の繪の贊歌など）

題しらず

二一六　秋萩にうらびれをれば足曳の山したとよみ鹿の鳴らん

考　初句　奥儀抄「秋風に」六帖三鹿「妹にわが」
二句　顕「うらぶれをれば」六帖二「うらこひをれば」
清「うらびれをれば」
五句　六帖二「鹿ぞ鳴くらん」
古典本には一々これ等の同異を書き分けて次のやうにある。
秋萩（奥儀抄・風）にうらびれ（以上六帖・妹に我がうら戀ひ）居ればあしびきの山下響動み鹿の（六帖、ぞ）鳴くらん。

評　秋萩に　秋は口調上そへたもの、萩をながめて。うらびれ　うらぶれの轉、心觸と宛てて心悲しく思ふこと。をれば　居ると譯して可いが、歌意、をることだけでも悲しいものを…　といつた氣持で下に「など」を補つてなぜにマアとして下の句につゞく。とよみ　搖きひゞくこと動・響など宛てる。文法的にいふなら山下をとよもして鹿がなくとあるべきところ。鳴らん　の「らん」は此迄のにもあつて直ぐ上の鳴くを想像したものでなく啼くわけを訝り責めたもの。

評　秋萩を打眺めながら淋しく悲しく思つて居ると、（もうそれだけで我が秋思は轉傷心に堪へないものを、なぜにまあ）あの鹿は、山の麓のとよむまでも啼くことであらう。（此ではいよ〳〵我思ひは悲しくなるばかりで、慰めんよすがもない）

評　この歌は以上のやうに解くより外ないと思ふが、さうするとこれは鹿の歌とよりは秋思とでもして、雜に入るべきものである。秋萩にうらびれるといふこと上代、王朝の歌人の情としても、ちと感傷的に過ぎはしないか、無論その秋は花も葉も散つて痛ましい狀になつた萩だとしても、今日から觀ては少し偏情の嫌がある。これの扮本とも謂ふべきは、萬葉十秋雜歌詠鹿鳴二一四三の

君に戀ひうらぶれ居ればさをしかのこゑを聞きつゝ寢ねがてぬかも

で、これなら待つ戀の切なさといふ特別の内容があるから、うらぶれの語が肯づかれるが、無條件に「秋風に」うらぶれるといふが少しどうかと思ふ。で、これはむしろ六帖の方が優れて居るし又戀の部に入るべきものだとも思ふ。

二一七　秋はぎをしがらみふせてなく鹿のめには見えずておとのさやけさ

考　結句　三「音のさやけさ」（き抄イ）

評　しがらみ　筍とも柵とも書く。元は柴絡みの略と思ふが、繁からみ、末からみなど訛いたのもある。川に杭を打ち此を心にして小柴を絡ませ、流下物を止めたり、更に土俵をおいて堰關をついたり、岸に蛇籠のやうに積んで堤防にしたりする。が併しこゝは尙もとの動詞で「しがらみふせて」と連語動詞句を形成してゐる。鹿が萩を踩みにじつてまるでしがらみのやうにしがらませ伏させてといふのである。但し、その實景が作者に見えたわけではない。二一五と同樣想像でいふのである。萩と鹿　とは季節が一致して居るので萬葉時代から一つの定まつた配合のやうによまれ萩を以て鹿の花妻などもいふ。目には云々　下句は目と耳と姿と音とを對照したもので、眼には姿が見えないが、耳にはその音がさやかに聞えて來る。音といふは後世では非情の聲音をいふのだが、この頃はまだ有情を聲、非情を音とは嚴別されてなかつた。

評　秋萩を折り伏せてしがらみ靡かせて（その花床の上に）啼いて居る（であらう所の）鹿は、眼には見えないが、マアあの音の澄んで冴えてゐること。（全體どこにないて居るのであらう）

評　秋興の一體といふ外、別にとりたてゝ推賞する程でもない。

これさだのみこの家の歌合によめる

二一八　秋萩の花ささにけり高砂のをのへの鹿はいまや鳴らむ　　五九二　藤原としゆきの朝臣

考　詞書・作者　元「是貞の親王の家。歌合に。。。。。敏行。。。」
三「藤原（他無）としゆきの朝臣」
下句　元・相・新萬上「をのへに今や鹿のなくらん」
四句　敏行集「尾上の鹿も」
六帖六秋萩　同。

評　高砂　序文に解いたが尙補つておく。高砂は「たかいさご」か「たかすなご」の約と想ふ。海岸に波と風とに打ち寄せられ、吹き寄せられして、自然にもり上つた丘阜をいふ普通名詞であつたものが後に播磨加古郡の南端今高砂町といつて居る所の海岸一帯をさしていふ固有名詞となつてこゝも正しくその播磨の方である。この高砂は萬葉時代にはまだ歌枕とはなつてゐないがこの古今集時代から盛に歌はれるやうになつたのは、京畿と西南海とに交通が頻繁となるにつれて往來寓目の人が多くなつた故であらう。顯註には多くの歌例をあげてこゝの高砂をよんだものと普通名詞の高砂を讀んだものとをわけて居るが大抵は播磨の高砂ととつてよささうである。散文では蜻蛉日記の始めの所や古今著聞集五經盛・實國の贈答にこゝが詠まれてある。（但この方は治承年間の事）この高砂は今も播磨名所に數へられ加古川口を隔てて相生村に相對し共に松の名所といはれてゐるが昔時の千株蒼鬱の美はなく、まして名物の鹿などは影も見られない。をのへ　尾上、山の上

評　萩秋の花が咲いたなあ。（さては）高砂の山の上の鹿は今鳴いてゐることであらう。

評　何の技巧もなく、同時の聯接と、萩の異名を鹿鳴草といふことなどに思ひよつて咏んだもので、茶漬に香子といつた風のさらりとした叙景歌であるが、四句「鹿は」は「鹿も」とあるべきではなからうか、さすれば想が一層よくまとまる。併したとひ之を「も」としても作者の萩や鹿に對する趣味も執着もない。たゞ自分の感じを率直に歌つたといふだけなのが物足りない。一三五の時鳥と甚だよく似て居るが、あれには作者が熱心にその鳥の來鳴くのを下待つ熱意がこもつて居る。けれども躬恒集の

わがやどの秋萩の花咲く時ぞなきへの鹿も聲たてゝなく

に比べると同趣好にして遙に優つて居る。尙又平兼盛の次の一首は此を本にして目さきをかへたものか？

月影に鹿の音きこゆ高砂の尾上の萩の花やちるらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にてあひてものがたりしけるついでによめる

二一九　秋萩のふるえにさける花みればもとの心はわすれざりけり　　みつね

考　詞書　元「よめる」の三字なし。
三句　三「花なれば」
五句　六帖六秋萩「かはらざりけり」古典本「忘れ（此語、六帖、繼ち）ざりけり」

評　ふるえ　古枝。これは草本の萩ではなく、木萩である。（又山萩ともいふ）。もとの心　元の心、人に於ては舊知の情とか昔の戀、木にとつては幹の心。わすれざりけり　秋になつたら花を咲かせようといふ心、秋を忘れず咲いたなあ。矢張會へば昔同樣に親しく話すことが出來るよなあ。

評　この歌については二樣の解釋があつて、自分にはよくはわからないから、兩方とも併せあげておく。

一、昔知り合ひであつた人と秋郊散策の先で落合つて話した時によんだもの、

秋萩が去年までの古枝ながらもかうして咲いてゐるのを見ると矢張木來の性を違へず、秋が來れば咲くべき時とよく

覺えてゐたものだなあ。それと同じで今日はからずも馴染の貴公に邂逅して話して見ると、矢張舊知といふものは宜いものだと思はれまするわい。

二、嘗て戀仲であつた女と秋の野にあつて話をして（がその女はそつけなくほんの切口上で通り一遍の應答をするだけであつた。そこでわたしはこの木萩の花にかこつけてその女に諷刺的に）咏んだのがこの歌である。

花でさへも元の心を忘れずかうして美しく咲いてゐるものを、御身は何としてそのやうにすげなくなされるか？

評　詞書の中「あひて物がたりしける」といふ詞は、何となく互に心ゆくばかり打解け語つたものととりたい。若し相手がすげない態度に出たのなら、もつとわかるやうにその旨を斷りさうなものだと思ふ。けれども「人」といふ語は當時よく異性に用ひられたから、その點から見ると、相手は婦人かとも想ふ。又以前夫婦や戀愛關係であつた男女といふものは、今日の常識から見ては相互に途中で一寸出あふのすら氣まずい感じのするものだのに、まして言葉をかけて話しあふなどは沙汰の限りとでも謂ひたいが、王朝時代はさうではなく、離合常なくして、昨日まで親しかつたものが今日は別れ、今日別れたかと思ふとそのわかれの歌のあはれに引かされて又撚りが戻り、久しぶりにふとあつて、再び元の愛が復活するといつた類がまゝあるのだから後の方の解とても強ち、強ひ言とも思はれない。

で要するにこの歌は諷喩の愛すべきものがあるに拘らず、詞書の表現が不充分な爲めに晦澁に陷つてをる。

又何れの場合にせよ、これは雜の部に入るべきもので秋の部に入れてはふさはしくない。

題しらず　　よみ人しらず

二二〇　秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

語　四句　清「ひとりぬる人の」

新撰　同。

語　下葉色づく　花も散り葉もそろ〳〵枯れかけて先づ下の方から色づきはじめる。「色づく」は終止形ととりたい。こゝで句を切つて「サアこれから段々中葉末葉も散つて來よう。寂しさを慰めるよすがもなく、夜はだん〳〵長くも寒くもなつて寥安からぬがちであらう……サアかうなると……」と樣にそれに伴ふ作者の氣分が髣髴するところが宜しい。それなら連體形として下の今を修飾するとしては感味は索然として淺い。今よりや　の「や」は咏歎をこめた疑問とも謂ふべき助辭で倒置されたもの、最後につければ解る。ひとりある人　男女共に謂ひ得るし已婚未婚共に云ひ得るが、普通は已に世心を知つた男子即ちやもめ（鰥）のことをいふとしてある。又さうとればよくわかる歌である。餘材抄に鰥の字の説明がしてあるが、面白いことを謂つたものだと思ふ。

ひとりある人はやむをなり。女のひとりあるをやもめといふを、男女通じてやもめといふ也。釋名云無レ妻曰レ鰥心鰥々然不レ寢如二魚目一不閑者。

いねがてにする　寢ねにくさうにする。（こゝへ「や」の意を加へて）だらうよ。

語　秋萩の下葉が色づいてをる——あゝ今からは定めし獨り住みの人が寢にくがることであらうぞ。

評　秋風飄零、寓目の萩も花ちり葉黄ばんでそゞろに物悲しい趣——、あゝそれでも晝はまだしも可いとしてサアかうなると、さらぬだに寢ざめ勝ちなる獨居の我・ましてこの夜長にして、この夜寒をマアどんなにわびしれることだらうと想到しては今からその寂しさわびしさが見えるやうである。が、それをあらはに「ひとりある我」とせずして「人」と置換して汎く世間大方の同一境遇の所感とおぼめかした處表現は婉曲となつたが、刺戟は乏しくなつてをる。戀を生命とする王朝男子のにやけた感傷といはばそれまでだが歌態は一通り整つてをる。

二二一　鳴わたる雁の涙やおちつらむ物おもふ宿の萩の上の露

語　三句　嘉「おちぬらん」

新撰　同。

類　鳴わたる　大空を啼いて渡る　泣いてにかけて）物おもふ宿　我が物思ひに沈んで居るこの宿。

註　我が物思ひに沈んで居る家の處前（ヤド）の萩にしげく置く露は、我と同様悲しき思ひに泣いて大空を渡る萩の涙が落ちてかゝつたのであらう。（道理でさながら我袖の涙のやうにしげくあるよ）

評　主觀の悲哀を大空の雁に投げてその反射を雁の白露に投げた投影畫であり、萩の露に對する詩的感傷的解釋を主想にした秀咏である。萩の上の露はどうしておいたか、理窟でいふなら、「露は水蒸氣が上昇して冷氣に遇つて、凝結液化して地上に下りたものでそれが、偶々萩の葉などにおくと、一際目だつて美しく見えるのだ」といへば、それでおしまひである。それにロマンチツクの想像を寄せて「これは空行く雁の涙であらう」といふ。けれども唯さう云ふだけでは「何だ妙なことを云ふ」位にしかとれない。そこで、この想像を妥當と感ぜしめる用意として「こゝは物思ふ宿だから」としたもので、技巧に於ても申分はない。若しこの下の句を「なべての宿の萩の上の露」とか「我宿近き萩の上の露」などとしたらどうか、雁の「泣く」といふ一語だけが、係つて居るだけだから作者は讀者に獨りよがりの感情を強ひることにもならう。定家は此を秀咏十首の中にかぞへて後鳥羽院に御推薦申したといふが、それ程でないにしても確かに秀咏であり、又その體言どめな處も來るべき新古今時代の新調に先驅するものと謂つてよからう。だが併しかうした叙情は現代の人々殊に若い學生には受容され難いものであらう。或人は「何だ寢言の餘りのやうなことをいつて―」とも謂はう。けれども吾々の感情には膨脹性なるものがあつて「怒つた時の八つ當り」とも「坊主が憎ければ袈裟まで憎し」とか「可愛いと思へばあばたも笑くぼ」などいふ諺もある。即ち、諸君が「追憶」の作文に入學試驗合格後の感想を述べて「凡てが素的だ、凡てが愉快だ。上野の森の鳥も面白い。錢湯の盤臺に居る婆さんにも口がきゝたくなる」と書いたのも同様であり、悲しい時には空に飛ぶ鳥、庭に咲く花を見るにつけ聞くにつけても泣きたくなる。で、この歌はさうした感情の膨脹性に根ざした着想で決して浮いたものではない。後撰七秋下三六〇題しらず、讀人しらず

あき風にさそはれわたる雁がねは物思ふ人の宿をよかなも

とあるのはこの歌の萩の露を抜いて作意を變へたものである。

二二二　萩の露玉にぬかんととればけぬよし見む人は技ながら見よ

ある人のいはくこの歌はならのみかどの御歌也と

考　作者　元「家持」六帖六秋萩「奈良の帝」

二句　行「玉にぬかなむ」

三句　相「なればけぬ」

四句　六帖六「みん人は猶」

結句　六帖六「よそながら見よ」古典木「枝（六帖、外「ながら見よ」）

左註　清「この歌ある人ならのみかどの御うたとなむまうす」清脚「聖武天皇也有二首」

相「……おほみうた也と」

古典木「……（平城天皇）の御歌なりと」

類　玉にぬかむと　露を玉としてそれを緒（絲）に貫いてつながうと思つて、この句二七にもあつた。けぬ　消えぬの約で消えてしまつた。といつて餘韻に後は小さい悔いを響かせてゐる。よし「まゝよ」「いゝわ」といふのが從來の譯だが、それでは一首の意味が曖妙になる、「まゝよ」の「よし」は「さもあらばあれ（遮莫）」の意だが今一つ好理（メリ）我骨一瘠江邊

ゝ樣に、好（よし）矣とかよしきたといふ俗語も同じく「それなら宜いことがある」といふ氣持である。みむ人は　この後萩の露を見ようと

思ふ人は　枝ながら見よ　枝においたまゝに見めでよ。（でなくては這般の妙趣は破されさうだから）

萩におく露（があまり美しいので）玉として緒に貫かうと思つて手にとると脆くも消えてしまつた（ヤ、こりやしまつた――がまてよ、それなら）宜いことがある。今後この萩の露を見ようと思ふ人は枝のまゝでこの美景の破れない處を見はやせ。

主想は萩の上におく露のたわゝにあえかな貌を歌はうといふにある。實に小楕圓なす萩の葉の一つ〳〵に凝つて居る白露は千箱の玉を撒いて千顆萬顆の白爛々たる美景何人も指を染めずには居れまい、可憐優美の極とも謂ふべきであらう。そこで戯れに指を一寸觸れてみる。脆い處はハラ〳〵と散つて大地に吸はれてしまふ　ハツと手を引いて又見入つて「どうも綺羅だなあ」と歎賞する。この心持が即ちこの歌境である。でなくて誰が字面通りに玉に貫かうなどと眞面目に手にとるやうな痴を演じよう？「玉に貫かん云々」は本當に玉のやうだから、さう謂つたものなので「よし見ん人は云々」といつたのは作者先づ枝ながら見て己の欲する處を人に施すだけの雅量を示したもので、この雅量も亦詩想の一つになつて居る。

著者は茲にこの歌について聯想する凡てを云ふことを許して戴きたい。一年の夏余が一代用教員として地方の小學校に奉職してゐる頃、新に哲學館を卒業した福知山某寺の住職森覺明氏が佛教演説の爲めに任地へ來られて、滔々數千萬言の名演説に滿座を醉はしめられたその中に佛教の妙味有難味は「南無――」と唱へるこの一言一句の間にこもつて居る。それを兎やかうと詮議することは抑々打破しである。

年毎に咲くや吉野の櫻花打破りて見よ花のありかは

吉野の櫻に「これは〳〵とばかり」人を驚かす美があると云つても、その人を恍惚境に誘ふ所以を分解して、櫻の那邊にその魅惑が潜んでゐるか？　と花を摘んで引き割いて見た處が、到底その疑問は解決されない。吉野櫻花の美は吉野櫻花の美として、吉野の山に咲いてゐるそのまゝに對してこそ味得せられる。それを現代の植物學者がするやうに、花の一朶を摘んで雄蕊が何本雌蕊がいくら、花苞は蕊は花瓣はと詮議してはもう吉野櫻花の美ではない」といつて佛教教義の有難さも正にその通りで、當世風の科學哲學で「何が？　如何に？　何故にと詮議だてしたとて到底わかるものでない――」と様に説かれたが、これは移してあらゆる藝術論、文學論に適用することが出來る。即ち「萩の上の露」の美は「萩の上の露」としてそのまゝを見なければならない。露は露、萩は萩として別々に離してはもう元の固有の美觀は模索することすら出來ない。そこで自分も嘗てさうした着想で

我庭の秋語らばや萩の花その枝ながらその露ながら

と腰折つたことがある。かういふ見地から見てもこの歌はよく藝術の眞髓を體得した着想である。

今一つ、藝術的眞實と常識的眞實とは一致しないといふことを思ふ。芭蕉が奥羽長途の行脚に於て得た名吟の一つに

庭掃いて出づるや寺に散る柳

といふのがある。常識的に謂ふなら彼の加賀の金昌寺で一夜の宿を惠まれた翁は、禪宗寺の作法通り、その報謝として庭を掃いてから、暇を告げて出かける矢先に柳の葉が散つたといふのが眞實だが、藝術的には唯さうまで思ふ翁の温い心持と若い雲水が箒目正しく掃き清めた後に散つた柳の落葉の二つ三つが、清い寺の庭に汚穢の清淨ともいふべき美を點して居る光景とを結帶したといふだけが眞實で、翁は庭などは決して掃きはしない。更に金澤から見送つた北枝と松岡天龍寺の橋の茶屋で別れる時記念に與へた一句に

物書いて扇引きさく名殘かな

とある。もし常識的にいはうなら、文字通り扇に物を書いて、やがてそれを引き裂いて……さて北枝と別れて歸途についたといふのが眞實だが、藝術的にいふと、今や我が愛弟子の北枝と名殘をしき袂を別つに方り、何か記念の一句を與

へようとして扇に書くは書いたが、まだ充分に我意を盡くさない駄句で、直ぐにも引き裂いてしまひたいと思ふ程拙いのだが、マアそれでも當坐の心意氣を汲んで貰はうといふので敢て之を彼れの記念として贈るのである。そもこの扇たるや彼の名取川を渡つて仙臺に入つた頃から松島の風勝象潟の晴雨、或は一つ家に遊女を寢させ、或は早稲の香を別け入る右に有磯海を眺めする都度、之を煽いで、涼風一陣の快を貪つたそれながら、今は季節も早や秋となつて當分我身に不用の品で汗と手垢によごれた古扇はさうでなくとも破り棄てゝ遺憾なきものだ。と、愛弟子への名殘と、秋扇の名殘とを融合させた。

といふのが藝術的眞實である。だから詩歌を解くもの若し常識の眼を以て觀るなら、腑に落ち兼ねる點が多々あることと思ふ。そこでこゝの歌としても「玉にぬかんととれば消ぬ」は、詩的眞實即ち藝術的眞實として認めるべきで、常識的に觀ては無論虛僞である。繪畫に所謂「繪そらごと」といふのもこれと同じである。

最後に今一つ、我が私淑する先輩落合萩廼舍先生は、別けてもこの萩の愛好者であつた。（全は國文學教師としては國文學の全分野に亘つて偏なく黨なく趣味深く研究をして、或度までは何種の國文學でも後進を指導し得るだけの造詣があつて、更にその中の最も得意とする一面に向つて學界未墾の曠野に、權威ある一道標を築けば能事終ると考へ、この點に於てこの大家を崇拜する一人である）この大家が、萩廼舍の家號と共に萩寺の萩をめでて、こゝを永眠の地にせられた左の一首は萩と露との好配合の上に更にこの敬慕すべき一先輩の貴き閱歷と渾一して、そゞろに懷かしい感じがする。

萩寺の萩面白し露の身のおくつきどころこゝと定めん

最後にこの歌の作者家持といふのも平城天皇といふのも信ぜられない。趣味好尙の上から見て、どうも王朝初期の終から延喜期に至る間の口吻だと想ふ。

二二三　折りて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露

考　四句　清・行・六帖一霧「枝もとをゝに」古典本「枝も撓に（三字、六帖、とをゝ）に、」
　　三「枝もたわゝに」（とをゝ三句共イ）
　　家持集　同。

語　おちぞしぬべき　落ちてしまひさうだ　たわゝに　たわゝに・しなやかな貌、弱々しくしなへて居る貌、と同時に白露のしげく置いて居る形容。

評　秋萩の枝がたわゝになるまでもしげくおいた露の（あまりの美しさに折つても見たいのだがさて）折つて見たならば、ホロ〳〵と脆く散つてしまひさうだわい（それ故マア惜しくても折ることはよして、このまゝ愛でませう）

評　「折りて見ば」といふその人、如何にも折りたくてたまらない心持をよく表して居る。丁度、里孺子の切地を見るやうに、ふくよかな嬰兒の頰を見るやうに、唯眼で見るだけでは飽き足りないで、一寸手で撫でて見たり、頰摺りをして見たくなる、その感じを以て今萩の露を見てゐることをよく示して居る。次に又「枝もたわゝに」といふこの一句程露おく萩が枝を形容して適切なものは恐らくあるまい。しんなりと女性的な優しみある曲線を以て、しなうて居る萩の姿態見るやうである。前と同じ歌境で、評することも略同じだが、局部の美點をいへば以上の二ケ處だと思ふ。源氏物語帚木雨夜の品定めには左馬頭が若く美しく殉情的な女性を此に譬へた句もある。

二二四　萩が花ちるらんをのゝ露しもにぬれてをゆかむさ夜はふくとも

考　詞書　猿丸集
　　三句　清一つゆしもに（シゲミ）」

秋　上　二二三・二二四

崇德院御本・顯「露しげみ」

四句　古典本「濡れてぞ行かむ」清「ふれておゆかん」

五句　元・筋・家持集「夜は更けぬとも」

考　萩が花　一萩の花」とする處を「萩が花」と樣にすることは「松が枝・梅が枝・離が島」など澤山あつて顯註に多くの實例があがつてゐる。ちるらんをの　散りつゝあることであらう。その野「をの」の「を」は接頭語で、こゝでは野に可憐味を帶ばせてゐる。露しも　むづかしい穿鑿があるが、唯「露」といふところを晩秋深夜の寒冷にかけて「わるくすると霜もおりよう」など思ふ心持で霜とつけたものであらう。雨と雪との中間が霙といふやうに露と霜との中間が露霜といふなどとらないやうに……ぬれてをゆかん濡れてさ行かうよ「を」は古い感歎詞、萩の花ちる夜露にぬれて行かうといふのは、花によせる名殘も匂はせて　その濡れることも好ましい心地である　さ夜ふくとも　「さ」は接頭語たとひ夜遲くなつても。

評　（今晩はきつと參ります）たとひ遲くなつても參ります。それはあなたをおたづねすることが嬉しいばかりでなく、中途野路の萩の花も最早散方になつて、夜更けてしげくおく露にぬれて花の名殘も惜しみ旁々參りたいと思つてゐますから、

これを夜更けの消息ととるはよくない。一首凡て想像と未來時で歌つてある點から觀て、これは宵の口に消息して今夜の逢瀨を契るものと觀て略々當つて居らう。それなら「さ夜はふくとも、行かむ」が正味で、あとの大部分は附けたりであるが、その附けたりの景氣が萩の名殘を惜しむ愛情で、かうした背景をよみ込んだのが殊にこの歌の面白い點であるとして撰者は之を秋の部に採錄したものと想ふ。歌や俳句を見る時、何とはなしにその主想から派生した副想にいひ知れぬ妙味があつて、それが一首の聲價を高めてゐるものがある。例へば九八一の歌や曾良の句

行き〳〵てたふれふすとも萩の原

などで、その點に於てこゝのも同類の秀咏である。猿丸大夫集にあつても彼の作ととるは誤だが、歌境は「女の許に」とあるのが近からう。格調は古めかしくて家持若くはその前後の萬葉歌人の作であらうといふ。萬葉十秋相聞二二五二

寄露

秋萩の咲ちる野邊の夕露にぬれつゝきませ夜はふけぬ共

とある。これは待つ側からの「呼出し」の歌だが、此趣向を逆にするとこゝの歌になる。すると五句は「ふけぬとも」が原形であつたかしれない。

是貞のみこの家の歌合によめる

文屋あさやす

二二五　秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ

考　詞書・作者・元「惟貞親王・家・歌合に○○○○○朝康」

初句　抄「秋のたに」

二句　新萬下・六帖二秋の野「こりたる露は」

三句　新萬下「玉なるや」

四句　六帖二「つらぬきとむる」

五句　元永本「つゆのいとすぢ」

新撰　同。

評　文屋あさやす　朝康？　康秀の子で、延喜朝廷に仕へて、六位・大舍人大允・大膳少進等を歷任しその歌は本集と後撰集とにとられた。玉なれや　「や」「な」疑問にして「玉にあればにや」とする解は採らず。「や」は詠歎で、「玉なるよ」「玉なる哉や」といふも同じで、「こりや驚いたまるで玉だわい」といふ程の氣味　つらぬきかくる　貫き懸くる。露を貫いて木の枝花の枝などにかけて

居る　くものいとすぢ　蜘蛛の絲筋、くもの巣といふべきを玉の緒語で絲としたもの而かもその絲は、あっちこっちへ引かけ〳〵してゐるところから筋とつけたもののやうに想はれる。

語釈　秋の野におく白露は　こりや全く)玉だなあ、(玉だとすると差詰め)あれを貫きかけて居る蜘蛛の巣が、その玉を通す緒といひたい。

評　露の玉は已に萬葉にことわつて居るが蜘蛛の絲筋は新しい造句である。二個は好對の暗喩で秋郊露しげき朝の光景管にさこそと肯かれる。これは恐らく作者新創の着想で他に扮本があるわけではなからう。彼は又延喜の御時歌を召されて

白露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける

といつた。此も宜しい。とかく彼は露に歌興を見出した人なのであらう。

題しらず

(二二六)なにめでゝ折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭

考　詞書　本集序「さが野にて馬よりおちてよめる」　遍昭集「さうぐしう侍りしかば馬にのりて物にまかりし道に女郎花の見えしをよびて折りしほどに馬よりおちてふしながら」

作者　清・元「僧正遍照」

三「名にめでゝなれるはかりそ」

一二句　清「かほなよみうちみはかりそ」「かほなよみうちみる許ぞ」顯「かほなよみうちみはかりの一四句　行「われはおちぬと」

六帖六女郎花　同。

語釈　名にめでて　女郎花といふ名がやさしいのを愛して、折れるばかりぞ　折つたまでのことであるぞよ、その外別に他意なきものぞ)女郎花秋の七草の一つ説明するまでもなからう。われおちにきと　俺は墮落して女に因みある汝を手折つたなどと。

語釈　これ女郎花よ。お前の名が優しいのに惹きつけられて(つひちよつと)手折つたまでのことで(外に仔細はないぞ。それだからお前も)この遍昭は墮落して邪淫の戒を破つたなんか人にふれまはしたりはしてくれなよ。

評　遍昭が輕快洒脫の作風を遺憾なく表はした歌で比興の點寧ろ俳諧歌に入るべきものであらう。家集に落馬したやうに書かれてあるところから本集序のやうに、嵯峨野で落馬した時の負け惜しみを風雅に歌つたものとの説一般に流布し、遍昭落馬圖は日本畫の書題ともなつてゐる位だが、幾ら洒脫な遍昭でも、馬から落ちたのなら、呻りもしよう、足腰も痛からうし歌どころの騒ぎではあるまい。これは恐らく好事の徒の想像から來た詞書であらう。隨つて「をれるはかり」「おれるばかり」などあるのは「馬が落ちたのではなくおりたのだ」などと譯するのは誤である。

言靈の幸はふ國は悅ばしいが、この女郎花の如きは言葉に惹きつけられて花そのものの美を謳はれないで直ぐと女性によそへ歌はれるのはどうも面白くない。殊に遍昭の如きは、殆ど一個解語の花に口がためするやうな言ひ振で、それがこの歌では一つのをかしみとなつてゐるから可いもののこれ等を踏襲したものには一つも佳咏がない。

全體女郎花の美は靜かに寂しいもので、桔梗のやうな濃厚な色彩、薄のやうな姿態に配合せられると引き立つて來るが、それ自體だけでは古來歌人のいひはやす程の魅惑はないと思ふがどうだらうか？

後世この歌から出たものの中優れたものは蜀山人の狂歌

女郎花口のさか野にたつた今僧正さんがおちなさんした

又之を月に移した長流の歌

女郎花色なる花の露の上にわれおちにきとやどる月かげ

などであらう。

「昔都に小野頼風なるもの契りかはした女に別れ男山に來つて住む中、女は遙々尋ね下り、夫が、或事情によつて暫しの逢瀬を長曳かせた處、女心の淺ましくも、我に愛想盡かしての仕打と放生川に身投して、あへなき骸となつた。そこへかけつけた夫頼風は悲歎やる方なく最寄に奥津城を築いて鄭重にその愛妻を葬つた處が、不思議にもその塚に一本の女郎花が生ひ出て頼風を怨み顔である。それが死の誘惑となつて頼風も同じ流れに入水する。里人が之を憐んで女塚と並べて男塚を築いて葬つた――」此が謡曲「女郎花」の梗概で、この一篇の中にこれ以下本傳にある女郎花の歌が大分引かれてあつてこゝの遍昭のも

ワキ「左樣に古き歌を引かば、何とて僧正遍昭は、名にめでて折れるばかりぞ女郎花とはよみ給ひけるぞ」シテ「いやさればこそ我落ちにきと人に語るなと深く忍ぶの摺衣の、女郎と契る草の枕を、ならべしまでは疑ひなければ其御たとへを引き給はゞ出家の身にては御誤り。

とあるし、花を形容しては

花の色は霜をまとへる菊の如し

とある。簡單だが、一寸うまくこの花の形態色彩を生動させて居る。許六が風俗文選には今少し精しく品隲して居る。

「女郎花はいにしへより女にたとへ、我おちにきと法師の破戒によめるは、女郎花の二字になづめるならんか。初秋の風によろめきたてるも、菊にさきをかけられたらむは、手柄やすくなからんと、おもへる物すきこそやさしけれ。此女郎花といへるものを花にしてはちと請取がたし、たとへば聲の美しきを撰みて、小歌を習はせ、髪をおろして是を比丘尼といふ也。大率は女色にしてかざりなければ、大象をつなぐべき執心のきづなもなし。さればとて、男色のかたづまりたるたぐひにもあらで、男女の中にたてる風俗也。此花百花に類する姿なし。古人藤葉の如しといへるは、草實のたぐひに比すべきか。葉も花も等しく黄にして下葉すくなによろめきたるは彼の比丘尼のたぐひとや見ん。

以下十二首の女郎花には大した秀咏はないやうだが此迄の例にならつて一通り說いておく。

僧正遍昭がもとにならへまかりける時にをとこ山にてをみなへしを見てよめる

二三七　女郎花うしと見つゝぞゆきすぐるをとこ山にしたてりとおもへば　ふるのいまみち

考　詞書　元「遍昭がもとにならにまりて、男山にて女郎花をみて」

相「僧正遍昭がともに云々」

結句　相「たてると思へば」

六帖六女郎花　同。

集　僧正遍昭がもとに云々　遍昭が石上寺に居つた時か若くはこの二四八に見える實家に居つた時のことであらう。ふるのいまみち　布留今道　大和布留の出身であらう。貞觀・元慶・仁和・寛平の朝に歷仕して内藏小屬・小允・大允・從五位下・造酒正・下野介・三河介などを閲歷した人。うしと見つゝぞ云々　本意なきことだと思ひ〳〵お前の咲いて居るのを見て越えて行つた。をとこ山　山城國綴喜郡男山即ち石清水の八幡宮を祭つた神山。南は生駒山に連り北は淀河に臨み淀河向ひは天王山、京都にとつては關門に當る。

講　奈良の僧正遍昭を訪ねようとて、出かけて行つた時に男山で女郎花を見てよんだものだ。女郎花よお前はつれない花だと思ひ〳〵今こゝを通り過ぎて行くぞ、（それはこの我に親しみもしないで、ちやんと愛人を別につくつて）男山といふ愛人のところに立つてるとサ思ふと（どうも物憂い仕打だと思ふぞ）

評　女名前の女郎花が男名前の男山に咲いて居るとはこりやおやすくない――といつた興を以て仕立てたもの、旅の

即興として輕い秀句をうまく驅使したのが特徴。

是貞のみこの家の歌合のうた　としゆきの朝臣

二二八　秋の野にやどりはすべし女郎花なをむつまじみたびならなくに

考　詞書・作者　元「惟貞親王の家の歌合に　致行朝臣」
爲「あつゆきの朝臣」
宗于朝臣集（群二四八、九、五八三―五八四）此に同じ
敏行朝臣集（群二四八、九、五八二――）その前に「寛平の御時后宮の歌合に」詠んだものを出して次に「又」としてこの歌が出て居る。
續國歌大觀四三六―四三七宗于集にはこの歌はなくその他凡て十一首群本の歌がない。同四三五――四三六の敏行集には同じおほん時の歌合に
「秋の野に寢はすべし女郎花猶睦まじみ旅ならなくに」とある「猶」は誤であらう。

集　秋の野にやどりはすべし　宿をとるなら秋の野にとるがよろしいとの解は採らず。「此分ならば、果てはこの秋の野に泊り込んでしまひさうであるよ」の解が宜しい。むつまじみ　懷かしさに、親しみを覺えるので。たびならなくに　「こゝに泊れば妻は居なくても女郎花と寢るのだから旅でも旅の心地がしないから」などいふ解は可けない。「旅でもないのにそれにこの花の名に惑かれて」と解く。

講　女郎花といふ名が懷しいので、（此分ではどうやらこの）秋の野に泊り込んでしまひさうだわい。何も旅かけて來だ譯でもないのにサ。

評　これも女郎花の名に因んだ類型である。だが併し、女郎花が美しいので家路を忘れるといふならまだしも「名を睦じみ」といふのだから實感味は伴つてゐない。

題しらず　をのゝよしき

二二九　女郎花おほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなん

考　作者　元「小野美材」
二句　新萬上「旬へる野邊に」
五句　元・筋「名をやたつべき」新萬上「名をやたてなん」
新撰「流さん」（刊本は「立なん」）
二句五句　古典木「多かる（此語、新撰萬葉　旬へる）野べに、名をや立ちな（三字、新撰和歌、流さ）ん」

集　なののよしき　小野美材　目錄によると祖父は篁、父は後生官歷は
元慶四、　給料
仁和二、　秀才
同　三、二、一七　越中權掾
寬平四、五、二八　策
同　五　正　一一　伊勢少掾
同　六、正、一五　少内記
同　九、七、二三　大内記（同十三日從五位下）
昌泰二、二、一一　兼伊豫權介
同　三、二、二〇　兼信濃權介
秋　上　二二九・二三〇

延喜二、　卒

文學の家に生れ、廿餘年の公生活を經て働き盛りに亡くなつた人だと想はれる。おほかる野べ　多くある野邊　やどり　「宿とり」の約か？　あやなく　條理無く、わけもなく、詰らなくなどの意　あだの名　戀のうき名、「あだ」は空しいとか、輕薄とかの心に用ひられる　たちなん　「なん」は「なむ」の轉音便、未來完了時、「たちは後世ならば「たて」とすべき他動詞で「立てるやうなことにもならう」

評　この女郎花の澤山ある野邊に寢泊りでもしようものなら（花が花だから）つまらぬ戀のうき名を立てるやうなことにもならう。

評　「だからマアくこゝに泊ることは止して歸らうよ」といつた餘情とも採られるが、撰者の趣向では、前に「宿りはすべし」と敍行のをあげて、それに續けて「いやそんなことをいつて泊らうものなら云々の破目に陷らう」と歌つたこの美材のを配して二首關聯させたものであらう。　これを比興の體にとつて女の惡留に遇つて逃げ口上に歌つたとれば歌意は適合するが、それは戯歌になつてしまふから、矢張これは「女郎花」といふ名にちなんだ即興と解したい。

朱雀院のをみなへし合に讀て奉りける　　左のおほいまうちぎみ

二三〇　女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

考　詞書・作者　元「……たてまつれる　左大臣」　六帖六女郎花　同。

評　朱雀院こゝは宇多上皇のこと、もとこれは御殿の名で、三條の南、四條の北、西坊城の東、朱雀の西にあつて方四町の敷地取りで歴代上皇の御所と定められてゐあつた。宇多上皇の此御殿に御住まひの間の御稱呼　をみなへし合　女郎花を洲濱やその他體よくしつらつて活けたものを左右方人を別けて出品し、それにつれて和歌を味みその和歌の優劣を爭ふ遊戯。花にも意匠をこめることは勿論だが、歌の方は殊に論難辯駁がやかましく、かうした遊戯の間から後の歌學が體系づけられたのである　同じ樣なものには菊合・菖蒲合・前栽合・根合などもある。そしてこの種の詠歌はその出品の花をより具上に引き立てさせる用意が必要であるから、謂はば畫贊を作ると同じ心用意が入る譯である。但しこゝのは歌も花も競はれたものか群書類從二二六、八、一二一四——一二一五朱雀院女郎花合は屋代弘賢本によつて校定したとあるが、皆で十一番始めに「亭子院の御門、おりゐさせ給ふて、またのとし、きさきとみかどの、せさせ給ふをみなへし合なり」とあつて終に「花は右をとり歌は左かちけり」とある。左のおほいまうちぎみ　左大臣藤原時平のこと　傳記はいふまでもなく明瞭だが、和歌の才にも秀でて居つた、かの

高殿にのぼりて見れば天の下ょもにけぶりて今ぞ富みぬる

は、日本紀竟宴の席上彼が仁德天皇の題に當つて咏んだものなのが、段々轉化して

高きやにのぼりて見れば煙たつ民の竈はにぎはひにけり

となり仁德天皇御製として傳へられるやうになつたものだといふ。うちなびき　風のまにくあちらに靡きこちらに靡きすること、一方に偏よつて靡くとはとらない。心ひとつを　身一つとか心一つといふのは一つの讀癖であつて唯一無二純粹の眞心をなどと頑なに語句に拘らぬが宜い　よす「よせる」の約、心を寄せるといへば愛をささげるといふも同じこと、

評　この女郎花は秋の野風の吹くまゝにあつちに靡きこつちに靡きしてゐるが（とどのつまりは）彼女の心一つを誰にまかせようといふのであらう。

評　さても多情なる花よ、さても周圍をして氣を揉ませる花の君よとでも嘲くもの。想ふにこの歌も亦女郎花の名から想像した空想の作で、身親しく秋野に靡く女郎花を見ての感じではなからう。目下余は青森市女兩師範の專攻科の教授を囑託せられて週に一回當地から通つてゐるものだが、九十月の候、列車が大釋迦のトンネルを通過すると左右の丘阜には到る處この女郎花が咲いてゐる。而かも關西地方で見るやうな二尺三尺の矮小なものではなく、四尺五尺と丈も

のび花も黄萬朶とも謂ふべき盛觀で、實をいふとあれを見て以來なるほど女郎花も秋の草花の一珍だと思ふやうになつたものだが、彼女が風に靡く姿といふものは決して見よいものではない。隨つてこの時平の歌詞は寧ろ「花薄」にでもあてはめれば恰好のものだと想ふ。

又斯うした歌に該當する出品はどんな風に意匠されてあつたらう。女郎花が野分にでも逢つた處といつた心持であつちこつちに仆れ伏した型でも出さなくては合はない譯だが、それでは一向出し榮えがしない。のみならずこれ以下二三六までは皆同じ場合の歌とあるが右類從本によると

本集　朱雀院女郎花合
二三〇　二番の右
二三四　七番の右
二三五　六番の右

の三首だけで他は載せてない。而かもこの三首は前の判によると負けた右の方ばかりが採られてある。で、その對手の左と比べて見ると決して劣つてゐない。かう思ふとこの殘つてをる「朱雀院女郎花合」はどうも打傾かれる節が多い。それに以上の三首のどれを見ても實物の花合とは想はれない。此を二七二から數首ある菊合の歌と比べて見ると、著しく相違がある。そこで愚考では、こゝの女郎花合といふのは唯女郎花を咏んだ歌ばかりについて優劣を爭つたものではあるまいかと思ふのである。

二三一　秋ならであふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬゆゑ　藤原定方朝臣

考　作者六帖六女郎花「三條右大臣」
結句　古典本「生ひぬものゆゑ(此句[イ]立たぬものから)」
新撰　同。

釋　藤原定方　高藤の二男で寛平・昌泰・延喜・延長の御代に仕へ、陸奥掾・從五位下・尾張權守・右近少將・相模權介・次侍從・兼備前守・從五位上・左近少將・兼近江介・從四位下・權中將・備前守・參議・兼近江權守從三位・中納言・兼左衞門督・兼按察使・兼右近中將・大納言・正三位・右大臣・左近大將・に任じ承平二年八月四日に薨去六十三歳從一位を贈られた。世に三條右大臣といふ。(目錄による)「秋ならで」「秋にあらずして」の約、秋でなくて　あふことかたき云々　女郎花に逢ふことはむづかしい。あまのかはらに　棚機つ女の宿ある銀河　おひぬ物ゆへ　生へないものだから、この言ひ方は結局は、生へてゐるといふ譯でもないのに、生へてゐもしないのにとなる。くはしくいへば「おひぬ物ゆへ、逢ふことが出來さうなものであるにも拘はらず」といふのである。一七七の四句に近い。

講　女郎花は秋でなくては逢ふことの出來ぬ(とはさて〳〵殘念なことかな)何も(年に一度の逢瀨しかない棚機つ女の居る)天のかはらに生へ出たといふ譯でもあるまいものを。

評　女郎花が秋咲きの花であり棚機つ女が秋の女神でありするところから、ふと得た比興であらう。「秋ならで逢ふことかたき女――」とよんで人間のやうにいひかけて以下に花のことにして而かも突飛な織女を持つて結局「一年一度の逢瀨」といふ契合點で收めたもので、讀みあげた處ではさうした面白さで引立つたことと想ふが、歌としてはさほど秀咏ではない。況や躬恒集の左の咏の如きに至つては最早座興の可笑といふに止まる。

たなばたにたる物かな女郎花秋より外にあふことかたし

二三二　たが秋にあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ　つらゆき

考　二句六帖・六女郎花「有らぬものから」古典本「有らぬものゆゑ（二字六帖から）」
「四句　清「なといろにいて丶」
講　たが秋にあらぬ物ゆゑ　「誰の秋でもない彼女（女郎花）自身の秋だのに」と「誰も飽きもしないでいつまでも汝を愛しようといふのに」とをかけたもの。なぞ　「なにぞ」の略。轉じては「なぜ」ともいふ何故にの意　色に出て　「色美しく咲いて」ととらず「心がはりをほに出でて」、即ち「移らふことを色に見せて」まだき　未しきこと、時尚早きこと。
講　これ女郎花よ誰もそなたを飽いてもゐないし又秋はとりも直さず御身の秋であるものを、なぜにまあ、その秋がまだ暮れもしないのに早くも凋落の氣を色に見せて移ろうて行くことぞ。
評　男の愛が冷えもしないのに背いて行く女に思ひよそへたもの、織巧の歌態である。

二三三　妻こふる鹿ぞ鳴なる女郎花をのがすむ野の花としらずや　　みつね

考　結句　躬恒集下「花には非ずや」古典本「花と知（二字、躬恒集、に有）らずや」
六帖六女郎花　同。
講　妻こふる鹿ぞ鳴なる　妻戀ひをする鹿が鳴いてゐることよ、さなしかの聲は實際戀の本能から妻をよぶこともあるが、繼じてその啼聲をば妻を戀うてなくものとして歌によむのが常である。
講　アレ妻戀の鹿が啼いて居るなあ、コリヤ鹿よ、お前の住んでゐる野には花妻の女郎花があるのにそれを自分のものとは知らぬか。（さても迂濶なる牡鹿なるかな）
評　元來花を主にしたものでなく鹿と花との配合を主想にしたものと想ふが、一首の餘韻は、鹿の音に諦聽してゐる作者の姿態を髣髴せしめてゐるから、これを女郎花の歌として歌合に出すことは宜しくないと思ふ。

二三四　をみなへし吹過てくる秋風はめにはみえねどかこそしるけれ　　たゞみね

考　二句　爲「吹きすぎてゆく」
新萬下「ゆき過てくる」
三句　新萬下「秋風の」
四句　清「めにもみえねと」六帖六女郎花「めにはみえずて」古典本「目には見えねど（二字、六帖ずて）」
ふき過ぎてくる　花を吹いてこちらを訪うて來る　つまり女郎花のあたりを吹いて來た　めにはみえねど　眼にはそれと定かに見分けがつかぬけれども五句と對照して目と鼻、色と香とを對照して一體一顯のうたひわけをしたものだが、四一のやうに手際が鮮やかではない。
講　女郎花を吹き過ぎた秋風は眼に見ては、特別目立ちはせぬが、花の香は際だつてゐて直ぐそれと肯づかれる。
評　數ある女郎花の歌の中で、珍しく香を咏んだのも宜しいし　當時の風俗で男女共に着物に薫物するところから、女子の追風で艶かしい香の匂ふ趣によそへたのも面白い　人事に移せば女に逢つて來た後朝の男子を揶揄した一場の戲談とも謂ふべき處で、さうした興味も暗々の裡作者の頭に萌してゐたことと想ふ。

二三五　人のみることやくるしき女郎花秋霧にのみ立かくるらむ　　たゞみね

考　初二句　新萬下「君に見えん事や忌忌しき」
四句　元・筋・六帖六女郎花・新萬下「霧の離に」
五句　筋「たちかくれつゝ」

補 ことやくるしき　「や」は疑問……ことが心苦しいのか　秋霧にのみ云々　「のみ」は「かくる」にかゝる、「立」は接頭語、秋霧に立隠れてばかり居る。「らむ」は隠るにはつかないで、二句の「や」と呼應大かた見られるのが苦しいから「だらう」といふのである。

講 女郎花は人の見るのが心苦しいので折節立ちわたる秋霧に隠れてばかり居るのであらう。

評 秋霧郊野を罩め黄葩を包んで點綴糊と化す此を女性的の羞恥に思ひ寄つたもの、

驚や隣まで來て手間の入る

ととつた句の姿にも似て居る。「霧の籬」はこまかくいひ廻したものだが、さうたとへるのなら籬ではまだ野花が庭花になつただけで深窓の花(女性)になり切らない、霧のとばりとか御簾几帳とかに譬へたのは作者の作意であらう。但五句は筋切のやうに「たちかくれつゝ」とした方が現にその花に面して居る趣となつて宜しい。王朝の男女は互に直接に逢ふことを避けた。親しい身内を除いて御簾几帳のへだてなしに相對することはなかつたものである。これは女性の羞かみからも來、男女嚴別の趣旨からも來てはをるが又時には、女性の誇からも來て居る。彼の一條后定子が生昌の邸へ御成りの所に御供の清女始め他の女官たちは寢殿まで牛車横附のあてがくるつて、北の門で下りて簀道をふんで歩いて母屋まで行かねばならぬ。その時多くの殿上人共が顯證に見たといふので非常に悔やしがつてをるのなどがそれだ。けれどもこゝのはどう見ても女性のはにかみ性で臆病な可憐さをこの花の姿態によそへたもので、叙上類咏の中稍優れてをる。

二三六　ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿にうゑてみましを

考 作者・元・行「ヨミビトシラズ」筋　そせい

講 四句　元「我すむのべに」

補 ひとりのみながむるよりは云々　唯一人物思ひして暮らさうよりは、この句女郎花にかけたものと、作者にかけたものと二様の解がある。評にいはう。うゑてみましを　植ゑて見ようものを、

講 解一、こりや女郎花よ、そんな淋しい野に獨くよ〳〵物思ひして居ようよりも我が手植の花として宿に移してめでようものを(そなたは何と思ふ)

解二「思ふ女には振られて唯一人くよ〳〵ながめ暮らさうよりは、女と名のつく女郎花なりとも我すむ宿に植ゑてこの思ひを遣つた方がよからうのに、

評 一は契沖一派の解で二は古くは清輔の奥様抄から近世では季吟の抄、最近では金子氏の評釋などの解である。暫らく有のまゝを掲げて斷案を避けておく。

但一の様に解くと如何にも秋郊婀娜の花に對した光景となつて宜しいが、上句と下句と自他が混同して不明瞭に陥るし、二の様に解くと文法的には妥當だが、今女郎花に向つて居る歌ではなく獨居の寂しさに堪へかねて捻出した排悶の手段となつて來て面白くない。で、選者の考は寧ろ一の方にとつてこゝに收めたものと想ふ。さすれば鰥夫寡婦に言寄ると限局せずとも、何かしら一人住みしてゐる婦人に向つて懸想の消息をする趣によそへたものとなつて來る。

尚元永本にはこの次に左の一首が入れてある。

をみなへしなき名や立てし白露のぬれ衣をのみ著てわたるらむ

格別秀咏ではないが、他の類咏と比べれば略等しなみには出來て居ると思ふ。

二三七　女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたる宿にひとりたてれば

物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりけるをみてよめる　兼覽王

考　詞書　元「ものに　まかりける　みちなる　人の家に女郎花植ゑたゝるを見て○○○」
　　相「物へまかりける○人の家に……」
　　六帖六女郎花　同。

考　物へまかりけるに　或日標を極めて行つた時のいひ方、或處へ行つたのに　雄覽王　惟高親王の御子で當時上流の中では歌養趣味共に備はつてゐた方であつたことは別離の歌の贈答で察せられる。御經歴は

仁和二、正、七、　從四位下
寛平二、二、　河内權守
同　四、　侍從
同　六、八、　中務大輔
同　九、五、　民部大輔
同　九、七、一七、　山城守
延喜六、正、七、　從四位上（給國）
同　九、　大舍人頭
同一一、二、　神祇伯
同一八、二、　彈正大弼
同二一、正、　兼大和守
延長二、正、七、　正四位下
同　三、六、　宮内卿
承平二、　薨去（目錄による）

うしろめたく　後目痛くの略で、後髪引かれる思ひで顧みせらるゝこと、即ち不安に思はれること、氣づかはしく思はれること、たてれば「たちたれば」の古い句形、立つてゐるから。

考　（道すがらふとみると）女郎花が咲いてゐるがどうも氣遣はれてならない。それはこんな荒れ果てた宿にひとり（しよんぼりと）立つてゐるから。

評　うつぼ物語に父後蔭逝いて後その女が後見もなくわびしれてゐる有樣が如何にも物哀れに描かれてあるが、これを草花にすると丁度こゝの女郎花のやうなものだ。思ふに作者の目についた家といふのも、恐らくは不遇に沈淪した女あるじ一人の佗住居でもあつたらう。荒れたる宿の女郎花は言寄るとよりは寧ろみじめな極であらう。隨てこの一首は餘韻としては艶情薄くして哀愁勝ると謂ひたい。

寛平御時藏人所のをのこどもきさがのに花みんとて○○まかりたりける時かへるとてみな歌よみけるついでによめる

二三八　花にあかでなにかへるらん女郎花おほかるのべにねなましものを

平　さだぶん

考　詞書・作者　元「寛平御時に藏人所の男ども嵯峨野に花みへ○○○まかり○○○○○てかへるとて、みな歌よみけるついでに○○○　平定文」
　　六帖六女郎花　同。

考　藏人所　藏人の奉仕する役所、位置は大内裡校書殿内にあつてその母屋の文殿（納殿）即ち皇室累代の御書物藏を管掌する役所。始めて藏人の官制を定めさせられたのは、嵯峨天皇弘仁元年三月十日で、職員は別當一人、頭（四位）二人、五位藏人三人、六位藏人四人、非藏人・雜色・所衆・滝口などで職掌は始めは天皇の御秘書役のやうなもので機密の文書や訴訟を掌つたが後には、御衣・御

膳・傳宣・進奏・除目諸節會の儀式・殿上の糾彈・召籠・侍臣名謁・瀧口問藉等宮内一切の事に與り、別當は兼官だが、次の頭といふのがき
け役で、上達部への登龍門として一般榮進希望の徒の食指を動かしたものだ。をのこども　藏人やそれ以下の屬僚たち　さがの、嵯
峨野・今の大井河近邊嵯峨附近で當時所謂西の京といつた地點（京の西北に當る今山陰線が通つて居る）平さだぶん　貞文とも定文
とも書く。？――一五八三　？――延長元、茂世王の孫、好風の子、地位は從五位下左衛門佐に至り多少低くかつたが、丁度業平と
同じやうに名門の出で、風采が立派で好色のうき名を流して、歌にも巧であつた。中古三十六歌仙の一人にかぞへられ、本集始め代
代の勅撰集や後六々撰にも採られて居る。（彼の艶話は色々のものに散見する。時の人平仲と字したことや、硯の水を眼から落して戀
女の前に涙と見せかけ、黑い涙とすつぱぬかれたことなどは有名な話柄である）花にあかで　花に飽かずして、花に飽いたといふの
でもないに　なにかへるらん　何故に諸君は歸るのだらう。女郎花おほかるのべに云々　女を名に負ふこの花の多くある嵯峨野に彼
女を一夜の花妻として、旅寢をすれば宜いものを、

評 花見の興もまだ盡きぬに、なぜに諸君は歸らうといふのだらう。名もなつかしい女郎花の多く咲いてゐるこの野に旅寢をすれば宜いものを（さて〳〵野暮な諸君ではあるわい）

評 花の女の女護の島で一夜をあかさうといふ處、流石は艶福の貴公子振を發揮したものである。こゝの餘情に「さて〳〵奉公の身は窮屈なものである」といふのがある。成程「ましものを」は實現不可能のことを希望するいひ方だが何もこゝで文字通り泊らうといふのではなく、各自が座興を助けて秋興に氣炎をあげた誇張と解すべきで、こんな餘情を想像しては艶消しにならう。

これさだのみこの家の歌合によめる

二三九　なに人がきてぬぎかけしふぢばかまくる秋ごとにのべをにほはす　としゆきの朝臣

考 詞書・作者　元「おなじ御時中宮の歌合の歌　業平朝臣」
爲「あつゆきの朝臣」
初句　新萬上「何人ぞ」
四句　新萬上「秋くる毎に」
新萬上　何人庶來手脱係芝藤袴毎秋來野邊緒句婆須
六帖六ちに　同。

釋 なに人か　「か」の字澄んで讀めといふ（尤「が」と濁つて上に「なに」といふ疑問代名詞があるから解釋の上に狂ひはない）きてぬぎかけし　「着て脱ぎかけし」が普通の解で、此に「來て」を秀句にしたともいひ、秀句と見ては穿鑿に過ぎるともいふが愚考來てだけでよくはないかと思ふ。袴は通常「穿く」といふ。着るといふ例もあるはあつても穿くといふ方が多い。それに處は秋の野といふではないか、一體誰がやつて來てこんな野に袴をぬいで懸けたか」、いふのが順當でないかと思ふ。少くとも「來て」の意だけは取除けてはならない。新撰萬葉は漢詩より和歌の方が信賴するに足ると思ふが前擧げた通り、「來手」としてある。　ふぢばかま　藤袴菊科に屬し秋の七草の一つとして衆人のよく知つてゐるもの花は薄紅紫色の筒狀小花で、花としてさほど見所もないが葉に芳烈な香があつて又いつまもで匂ふ。その姿態とても他の草花に配して流石に愛すべきものがある。さてこゝは藤袴といふ名から、人の穿く袴にかけたもの。

評 藤袴は來る秋も〳〵野邊を匂はせて居るが、一體どういふ人が來て脱ぎ懸けた袴であらう。定めてこの世おしなべての人ではなからうとサ想はれるよ。

評 女郎花といふと直ぐ女に持つて行くし藤袴といふと又直ぐ袴に言ひ掛ける王朝の歌人にも困つたものだ。それが爲めに次のもその次のも一向藤袴の眞髓が掴まれてゐない。尤當時の風俗として上流の男女は皆香を嗜み、源氏などの通つたあとは多くの女が胸ときめかしてその香に醉つたとあるから、現代人が香に寄せる想に比べては刺戟的であつた

らうと思ふから、こゝもさうした貴人の移り香を聯想して「かういつ〳〵までも廣い野を匂はす袴はたゞの人ではなく殆ど神仙の來遊かと想はれる」と誇張し、それによつてこの花の薫香馥郁を強調したものと想はれるから前の女郎花よりは稍優り樣であらう。新撰萬葉の左詩に「借問遊仙何處在」といふのがこの歌の餘情と思ふ。

ふぢばかまをよみて人につかはしける　つらゆき

二四〇　やどりせし人のかたみか藤ばかま忘られかたきかにほひつゝ

考　詞書　元「藤袴を」
行「……人のもとに　…」
筋「ふぢばかまをさしたりけるをみてかへりてのちによみて○○○○○○○」
結句　元「香ばにほひけり」
六帖六ちに　同。

評　やどりせし　我家に泊られた。（筋切の詞書は疑はしい　今この歌を遣ちうとする先方の人が作者の家に來泊したととる。人戀人とも親しきどちともとられて居る。併し戀人ならば作者がかゝる贈答をする程の親しき人と見るが宜い。三條内侍などが貫之の宅に方違に來たこともあるのだからこゝも方違の中宿りと看られるし、又事の序に來泊したとも看られるさてこゝは「君がかたみか」といふも同じ處。忘られかたきか　いつまでも忘れられない芳香、といふのは實はその人の名殘を惜しんだ外交辭令をこの草の薫りに繫けたもの。

講　この藤袴は夜前お泊りなされたあなたの記念でありませうか、どうもいつまでたつても忘れられさうも無い芳香を放つて居ります。

評　これも亦袴と草花の名とをもじつた消息歌といふまでで、想は平凡加ふるにカ行ガ行の音が六つもあつて調は佶倔あまりよくはない。

ふぢばかまをよめる　そせい

二四一　ぬししらぬかこそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤ばかまぞも

考　二句　清「かこそにほへれ」　朔「香ばにほひつゝ」
素性集・六帖六ちに　同。

語　ぬししらぬ　主の知られぬの約で、これは直ぐ下の「花」にかゝつては居るが一首の趣ではその袴の持主の誰ともわからない、隠てその香の主もわからぬといふ程の心持である。たがぬぎかけし　誰が脱いでかけた。藤袴ぞも　藤袴であるぞマアで、「ぞ」は強意の指定「も」は味歎

講　秋の野に（來て見ると）誰とも分かぬ香が匂うてゐる……と思ふと（藤袴の故であつたあゝ）この藤袴は（一體）誰が脱いで懸けたものぞ。

評　その人をゆかしみ、その香をめづるといふ歌であるが又しても藤袴と袴の秀句、藤袴の芳香をのけては何の特徴もない。陳々相寄り腐々鼻につくと謂ひたい。思ふに當時は藝術意識が今のやうに鋭尖でないのと、遊戯氣分が汪溢してゐたのとで、どんな名家でも已に相場のきまつた草花は、わざと同一落想に咏み――否寧ろ別の詞で同じ處へ言ひ落すことを以て得意とするといつた風があつたのではなからうか。貫之は勿論素性にしても他の歌に比して、著しく劣り樣なのは作者の罪とよりは當時の歌風の祟りであらう。

題しらず　平貞文

二四二　今よりは植ゑてだにみじ花薄ほに出る秋は佗しかりけり

考　詞書・作者　元「題不知　定文」
三「平三本同さたふん」
二句――九品下中「うへてたにみじ」
結句　元・筋「くるしかりけり」
六帖六　すゝき　同。

釋　今よりは　今(世の穂を淋しく眺めてゐる心持)から以後は　植ゑてだに見じ　「だに」の意義がはつきりしない。後世の用例からいふと、「だに」は擧重推輕から一轉しては擧輕推重にも用ひるから、「わざ〳〵郊外へ出かけて見ることは勿論我宿の庭に植ゑて見ることすらも爲まい」と解いたのは誤ではないが、又見樣によつては我が手を下して植ゑることは勿論天然に生へてゐる野原の薄さへも見まい」といふ方が理がよく聞える。又「だに」は音調上の都合でおいたもので解釋としてはないものと見よ(契沖)ともあるが、これは無理である。他の歌文では隨分よく活いてゐる「だに」を殺して平氣ですましてゐるといふ亂暴な解釋はないものだ。「だに」が若し單なる强調の用例があるのならこゝは一番よく適合する處だが萬葉十四に「かくだにも國の遠かば」の外管見の範圍ではこの種の用例は無い。暫らく斷案を避けておく。花薄薄の穂の出たもの、ほに出る秋は　「花薄の穂を出すこと」と、「あらはに淋しいけはひを催す秋は」とをかけたもの。

講　此から後はわざ〳〵郊外へ出かけて見ることは勿論、植ゑて見ることすらすまい。あの花薄が穂を出して(風になびいて見るから淋しい氣分を誘ふ)秋はまことに淋しく悲しくてやりきれぬわい。

評　野生の草花を庭に移植することは當時一般の趣味で二四八には庭を秋の野に仕立てたとあり、八五三には藤原利基が植ゑた一むら薄の哀歌があり、大鏡には野生ならぬ紀内侍の庭の紅梅まで掘り越さうとして「勅なればいともかしこし」の歌が出て居る。これはこの頃の園藝趣味として面白いことなので或はその作も「皆人の樂しみにする野花移植をすら我はすまい」と謂つたものかとも想はれる。とにかく初二句の形式が不明瞭なのが庇で、三句以下は想形共に立派な作で前さへ改めれば秀詠とならうに惜しいものだ。

處で薄といふと「穂にいでて」がおきまり文句になつて後には稍陳套に墮するやうにもなつた。柿本集下には

人は皆萩を秋とは云なれど尾花が末を秋とはいはむ

とある。これは「穂にいでて」ともいはないし、尾花薄のこと)を面白いものとさへして居るが、

花薄穂に出で易き草なればみにならむとは賴まれなゝに　後撰三五四)

今はしもほにいでぬらむ東路の岩田のをのゝしのゝを薄(金葉二五二藤原伊家)、(千載二七〇にも)

花薄我こそしたに思ひしか穂にいでて人に結ぼれにけり(大鏡藤原仲平)

いつしかとおもひし秋のはつを花ほにいでてほしの枕にやかる(小澤芦庵)

などは穂に出でて稍見るべきものであらう。又薄は風にゆられて人を招くやうな姿態となるところから「招く尾花」と咏みつゞけたものもある。今日吾々の感觸からいふと桔梗といひ女郎花といひ、萩といひ何れも秋の郊野をして秋の裝せしめるものではあるが、尙それ等は局部の趣に止まるが、この薄が全郊全堤に群れて穂並を見せてゐるのを見ると、「秋色郊野に滿つ」とでも謂ふべき情趣を覺えるその點春の櫻と相似た位置にあるから前揭人麿のやうな着想の歌がもつとあつてよさそうに思ふ。

二四三　秋の野の草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖と見ゆらん

考　詞書・作者　元（寛平御時に○○○歌合○歌　在原棟梁」

四句・古典本「穂（頻）に出でて招く」

新萬上　秋之野々草之袂歟花薄穂丹出手招袖砥見湯濫

六帖六すゝき・寛平歌合秋三左　同。

釋　秋の野の草云々　秋野の草全體を人に擬してその袂に當るものがこの花薄であらうか、（秋草を一着の着物と見てその袂が薄と見ては面白くない）「たもと」は「手元」の意で、手を通すあたりを衣手卽ち袖といひ袖に手を入れてあげれば下にさがる部分を袂といふとあるが、大體袖も袂も同じと見てよろしからう。（尤も今日でも筒袖のやうなものは袖といつて袂とは謂はないが、振の袂よりは振袖の方が普通である）穂にいでて　穂を出してあらはに　まねく袖　薄がさきから穂を出して風にゆら〳〵すると丁度人が袖から手を出して手招きをするのによく似てゐるのから思ひ寄つたもの。

講　秋の野の草の袂であらうかあの花薄は？　さてあの樣に穂を出してあらはに人を手招く衣手のやうに見えるのであらう。

評　初二句晦渋である。但し歌境は秋の野べの人寄せの心あつて風吹く毎に「來よ〳〵」と招くと見たもので、恰も士女の遠くの人を招く姿態に似てゐるといふ秋興が、一首の基調になつてゐる。この歌は袖と袂と同意語が重なつてゐて後世歌學の上では同字病として忌むが、三代集隨一の本集に採られたので後鳥羽院が、定家に向つて「一首の中に袖と袂と重なつても差支ないか」との御下問に對し、定家はこの歌を證に差支ありませんと卽答し奉り斯道の名譽になつたといふが、今日から見ると一首中の同字は差支なからうがこの歌に於ては、袖と袂がある爲めに歌意がひら〳〵して正體が不明瞭だと思ふ。

二四四　われのみや哀と思はん蕃なくゆふかげのやまとなでしこ　素性法し

考　初句　新萬上「われのみか」

二句　顯「あはれとは思ふ」新萬上「あはれとおもふ」

三句　筋「ひぐらしの」

四句　續・元・顯「鳴く夕ぐれの」　三「鳴ゆふくれの」（本同）

素性集・寛平歌合二左　同。

釋　われのみや　「や」は咏歎と解く。これを疑辭にしたもの（金子氏）と、反語としたもの（季吟・契沖）とあつて理り一應は聞えるが、一首の情味と吻合しない。あはれと思はむ　いとしいと思はう……これに前の「や」が來て「思はうぞよ」となる。憐れんでいつたとし打興じて可怜と思ふとしたのもあるが、愚考撫子の花の姿を可憐としそをいとほしむあはれと思ふ。蕃黄昏のことだから「きりぐす」としても差支ない。香芭蕉は單なる幻想美として

むざんやな甲の下のきりぐす

とも咏んだ。けれどもこゝは實景に即した歌と想ふから、それなら同じくは蕃よりは筋切の「ひぐらしの」とある方が優樣だと思ふ。鳴くゆふかげの云々　「ゆふかげ」は夕日影ではなく夕陰で、夕方　薄明の「日が蔭つてきた頃」をいふ。それが「やまとなでしこ」につゞいて夕蔭の山と樣に純秀句ではないが、何となく片山蔭に楚々たる小花に面影を匂はせて居る。やまとなでしこ　二六七でいつた顯註が本で抄や餘材抄にも左の記事がある。

家經朝臣和歌序に　鍾愛抽二衆草一故曰二撫子一。艷色契二萬年一故曰二常夏一

は潤結な美句で、撫子・常夏の名義を解いたものである。（近頃或小學校で校旗を作つてその圖案に大和撫子を採つた處が、或人が「これでは女學校の校旗のやうだ」と評したとのことであるが、語義とし　は「愛すべき庭の敎へ見」と解くことも無理ではないと思

ふ。

大和撫子樣々に　おのが向き〳〵咲きぬとも
おほしたてゝし父母の　庭の訓へを忘るなよ

と明治初期文部省印行の唱歌集にもある。）

語釋　（他に汝を愛でいつくしむ者もないから）唯我獨りそなたをいとしく思はうぞよ、蛬の（淋しく）鳴いてゐる。（秋たそがれの片山）かげに咲いてゐる汝大和撫子よ。

評釋　景樹はいふ。

夕日たえ〳〵にさしなびきて蛬さへ鳴出める山陰などの庭わたりに、大和撫子の二本三本殘りたらん長月頃のさま我のみならん、や、誰かは哀と思はざらんの餘情今だに只ならぬ心地ぞすめる。

これも初句のやを反語に解したものである。又尾崎雅嘉はいふ。

なればつかりがかわいそふなと思ふので有ふきり〴〵すがなく夕かげに美しう咲いて有アノなでしこをひとりごのやうに思ふて

此は初句の「や」を疑問に解したのである。

處でこれはたゞさへ人の愛憐を惹く撫子がまして日蔭の小花として作者獨居の庭前か、若くは庵近い片山里に咲いて居て、節は秋なり時は暮れなり處は片山蔭なり鳴くものは蛬なりといつた寂莫銷魂の天地今や相對するものは、孤獨の我と孤弱の汝あるのみとやうに、一面自己を惑みつゝそれだけ強く撫子を惑んだ述懷として趣があると思ふから初句の「や」は咏歎ととりたい。又源氏帚木の卷に夕顏が頭中將との間に出來た女兒（玉鬘）の哀を乞うて

山がつのかきほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露

といつた「あはれ」も矢張この「あはれ」と近いものでいとほしいと思つて、情をかけてやつて下さいといつたものである。

この一首は又作者が趣味の細かさを語るものとして面白い。嘗て一生徒の自由作文を見ると

「私は毎日箕面有馬電鐵で通つて居るものです。で日曜と祭日と休暇をのけたら日に二回この電車線路を通過しない日はめつたとありません。隨つて中途の町や村や家や川は勿論路傍の一草一木までも目では云へませんが、目をつぶるとあり〳〵と浮んで來ます。中で私の一等好きな家は○○○○○で樹では十三堤の往きの此方側の左手の○木目云々。

と發端して綴つたもので、文も巧いがその着眼が作者の趣味の鋭尖なことを示して居ると思つた。世間普通の人が平氣で看過する一草一木一小花に詩眼を投げてこの樣に咏み出でてこそ優れた作品は產まれるものだ。（尙勝手なことをいふやうだが、この一首で聯想されるのは英の湖畔詩人ウォーヅウォースの作品である。）

題しらず　　よみびとしらず

二四五　みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

詞書・作者　元「題不知　讀人も」

語釋　みどりなる　綠色にてある、綠の　ひとつ草　一つ色の草、上から續けでは唯綠といふ一つの色に見えた草　春は見し　此歌「春は」を始めにして次初　句次「見し」をつゞけて

春は綠なるひとつ草とぞ見し

とすべきを倒置した。三句の次ぎ「さるに」「にも拘らず」と補ふ。色々の花　一つ草に對し紅黃紫白の目もあやなる樣を轉義し上の「一つに」對照して「いろ〳〵」といふ。

評釋　春ほ唯綠の一つ色の草と見てゐた。にも拘らず秋になつて見ると此は意外（紅錦繡の美觀を呈して）いろ〳〵の花と咲き出たわい。

評 上句と下の句に左の對照がある。

上句　緑　ひとつ　草　春

下句　（紅黄紫白）　（百花千花）いろ〳〵　花　秋

この對照を設けて終りに秋郊滿地の千草八千草に驚歎した餘情がある。佳咏の一つと謂つてもよろしからう。唯三四句の聯接「春は見し秋は」とつゞく爲めに、春秋の對照だけがひどく耳だつて肝腎の他の三對の對照が弱められた氣味がある。此とても詞形は充分ではないが假に上句を改めて

春見てし一つ緑の草なれど秋はいろ〳〵の花にぞありける

と樣にして朗誦して前のと比べると後の方にはさうした遺憾はないと思ふ。

さて後拾遺六冬三九七　霜がれの草をよめる　少輔

霜枯はひとつ草とぞなりにける千ぐさに見えし野べにはあらずや

は形式は拙いがこれの踏襲で前から續けると

春　秋　冬

一つ色（緑）　いろ〳〵　一つ色（霜枯）

とまた單一の色に收めてしまつたものである。又後年六百番歌合に定家が

かぞくとくおのがさまゝ〳〵咲く花の一つ二葉の春の若草

も之を扮本としたものであるといふ。

二四六　もゝ草の花のひもとく秋の野におもひたはれん人なとがめそ

考 四句　六帖二野邊「思ひ亂れん」　小町集　同。

語 もゝ草　百草、いろ〳〵の草　花のひもとく　花の下紐を解く、何に限らず結び目の紐を解くことを「紐とく」といふが、この頃の慣ほしとしては女が下紐を解く事にかけたいひ方である。おもひたはれん　「おもひ」は愛することである。「思はず」は愛さないこと、…　なめでて遊ばうといふのである。「遊ばう」を「戯れん」とは「紐とく」といふに對合をとつて、幾分にやけたいひ方をしたものと想ふ。人なとがめそ　諸君よ咎めてはくれなよ、「とがめる」といつたのも上の句からかけてわざとをかしみを以て誇張したもの。

講 百草が花の下紐を解いて居るこの秋の野をめでて戯れよう（と思ふが）諸君はそれを咎めだてしないで大目に見てゐて下され。

評 「咎めそ」は「怪しむ勿れ」ともとられるが上句との聯接から見て如上の解が正しいと思ふ。が併し實感でないのだから歌態何となく浮いて覺える。宛ら二三八の貞文の口吻でもあり、何となく誹諧歌めいて居る。

二四七　月草に衣はすらんあさ露にぬれての後はうつろひぬとも

考 此一首元永本にはない。

四句　清・六帖・顯・筋・相「ぬれての色は」

萬葉七・譬喩歌寄草一三五一・人丸集・拾遺八雜上四七四人丸　同

注 月草　花の色は何にでも染みつき易いので着き草といひ宛字で月草といふ。（月見草とは別）露草・鴨跡草・鴨頭草・蛍草・思ひ草など異名はまだ〳〵ある。この草余が郷里關西地方では「朝子花」といひ高さは五六寸稍斜にしなうて生ひるから或は一尺近くもあらうか、箒のやうな形をした柔かい葉の葉柄が鞘のやうに莖を包み夏から秋へかけて美しい瑠璃色の小花、一見菫に似たのが、開くが朝は開いて晝はつぼんで居る。それをとつて木理のあらはに浮いた戸板の上に半紙を當てその上から花でこすつて色模様を出してよく遊んだものだ。古代はこの花の液汁を以て着物地を染めた。衣はすらん　摺り衣をしよう。上代染色術の幼稚な時代には自然の草花を採つてぢかに摺つてなすりそめたもので之を摺衣といふ。この風王朝に入つてもまだ遺つておつた。否今日と雖も紅葉の名所に遊ぶと茶亭の女などが色づいた紅葉をハンカチなどに叩き染めにして客に景品とするなど一寸似た染め方だと思ふ。そしてその摺衣によく使はれたのはこの月草の花などであつた。で後には「月草の」は「うつろふ」の枕詞として用ひるやうになつた。

評 あまり美しいのでこの月草の花に着物を染めよう。（よしやこの花の性來として折角染めた着物の色が朝露に濡れて色が褪めるやうなことがあらうとも（このまあ美しい色を見過すには餘りに惜しい）

評 この歌萬葉卷七譬喩歌寄草一三五一にあるから萬葉より誤つて採つた咏の一つに入るべきものである。（萬葉の方では四句「濡れての後は」と「濡れて後には」と二様の訓みがあるが、原文は「所沾而後者」とあつて萬葉當時は「ぬれて後には」といつたのを今は新調で「ぬれての後は」と變へたものと想ふ。萬葉の原意を推すと

こゝに多情の好女あり、之を見ては戀せずには居れない。よしや一夜を契つて後朝のわかれに朝露わけて歸るとやがて心變りしてあだし男に從ふやうのことがあらうとも

といつた男のひたぶるにはやる戀心を譬へたものと想ふが、今はそれを文字通り月草の美をのみ歌つたものとして採つたものである。實に白露地上に珠と敷けるさへあるに、その又露に艶やかさを増して今を我世と深碧にホゝ笑むこの花艶冶の姿態は「ならうことならこのまゝ摺衣にしたい」とは當時の人としては空想ではなく實際の感じであつたらう。前々からあげた女郎花や藤袴の歌に比べては、雲泥の相違があつて、實に朗々誦すべき好咏である。

仁和のみかど。みこ（三の）を入れて仍に三木奏始　がはゝの家にやどり給へりける時に庭を秋の野につくりておほん物語のついでに咏みて奉りける

僧正遍昭

二四八　里は荒て人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる

注 詞書・作者　元「仁和の帝の……おはしましけるとき……秋の野につくれりけり　僧正遍照」

遍昭集「仁和の帝のまだみこにおはしまし、時布留の瀧御覽ぜむとておはしましける道に遍昭の母の家侍りけるに庭を秋野につくりていとをかしう御物がたりのついでによみてたてまつりし」

三句抄「宿なれば」

結句　清「あきのゝになる」

六帖二やど　同。

注 仁和のみかど　仁和年間の天皇卽ち光孝天皇　みこ　まだ時康親王と申し上げた時　ふるの瀧　大和國山邊郡布留の桃尾山にあつて一に桃尾瀧といふ。木集三九六にこの時に咏んだ雅藝法師の歌がある。猶續拾遺にも

いまは又行ても見ばやいそのかみふるのたきつせあとをたづねて

遍昭がはゝ　即ち遍昭が亡父良岑安世桓武天皇御子の未亡人　里は荒て。「里」とは故里奈良のことだが旨と遍昭が實家を中心にしていつたことば　人はふりにし　「人」は老母をさす。こゝの「は」は特別の用法で同類併列の意の「も」と同じである。里も荒れ人も年とつた　宿れや　宿なればにや　宿でありますせいか　籬　まへがき（前垣）の略つまり垣根のこと　野ら　「ら」は音調を滑らかにする接尾語、清ら　輕ら　の「ら」一類、併し今日「野らに行く」とか「野ら仕事に出る」といふのは山畑のことである

題　光孝天皇がまだ時康の親王と申して居つた時布留の瀧を見そなはさうといふので、御出でになつた途中私が母の家で御泊りになつた時に、私は庭を秋の野に仕立てて……さて應接申してゐる際に次の一首を咏みました。

こゝは屋敷も荒れはて住むあるじも老いぼれた宿でありまして、その故か、庭を見ても全く寂しい秋の野らでございますなあ（この樣に萬事不行屆なり御意に召さぬ勝でありませうが、どうか惡しからず御容しか願ひます）

詳　亭主側の挨拶の辭令にかへて歌つたもので、さそくの謙讓まことに美しくもをかしく調へられたものだ。が彼の遍昭のことだから――又當時の優暢な貴族生活者の常として、恐らくは先づ始めに歌が思ひ浮んで、その歌が役立つ趣向を考へてさて庭を秋の野らに作つたものと想ふ　又さう想ふことが彌々この一首に盛られた生活の情趣の雅致を增さしめるやうにさへとられる。奈良の京は荒れたといつても全くの片田舍でもあるまいし、桓武皇子の尊を以て造りみがかれ、親王御宿泊の邸と選定せられる彼が實家は恐らく善盡し美盡したしつらひでもあつたらうが、それを好笑と謙遜とをこきまぜて詠進したこの一首は上品な中にも彼一流の洒脫がしのばれる　又調の上では上に二個の「は」の疊音あり下に二個の「も」の疊音あり、この上下一對の疊音が、略々均衡をとつて一首の流麗を產んで居る。大抵同じではあるが之を

里も荒れて人もふりにし宿なれや庭は蓬は秋の野らなる

としては少し近代的になつて面白くない。又

里は荒れて人もふりにし庵なれや庭や蓬は秋の野らなる

としては口語の俗調に墮してしまふであらう。

卷第五　秋歌　下

是貞のみこの家の歌合のうた　　文屋やすひで

二四九　吹からに秋の草木のしほるればうべ山風をあらしといふらん

題　詞書・作者　清「ふんやのあさやす」元「惟貞親王の家の歌合の歌　○○康秀」六帖・貫之筆本「文屋朝康」

初句　新萬下「打ふくに」

二句　元本・筋・木集序九品下上「野べの草木の」六帖一嵐「なべて草木の」

五句　新萬上「あらしなるらん」傳貫之筆本「あらしてふらむ」

百ノ二二　同。

作者は康秀の子の「朝康」といふのが正しいとされて居る。始めて此をいひ出したのは契沖である。それは華嚴內部徵證によつたもので八の詞書に「二條の后を東宮の御息所と申したのは貞觀十一年（一五二九）三月廿一日貞明親王立坊から元慶元年（一五三七）一月廿四日同親王御卽位（陽成天皇）までの約八年間であるのにあの歌に「かしらの雪となる」をわびた康秀である。それが陽成天皇が御退位になつて、次の光孝天皇（尤もこの天皇は五十五歲御卽位と大鏡にあるが御立ちになつてその天皇の第二の皇子の是貞のみこの御主催の歌合に列席するまで存命であつたとすれば、殆ど歩行もむつかしい老翁であつたらう。否恐らくは最早物故して居らう。そして一方六帖を見るとこの歌の次の歌の作者を朝康として居る。朝康は康秀の子であるから、つひまちがつて同姓の康秀としたものであらう。よく世間では「親の物は子の物」といふが、此は反對に「子の物が親の物」になつて次の二五〇と共に朝康の作であらうといふので、それが一般に肯定されて居る。

（契沖は今一つ菅家萬葉集の端書を引いて居るがこれは大した理由ではない。尙思ふに自分を老人にいふことは一つの愛嬌なのだか

ら前に康秀が「頭の雪」と詠んだ時も上から雪が降つて來ることを咏み込む爲めにさうした迄のことで、何も文字通の老人ではなくまだ血氣壯な齢であつたらう、清少納言は三十の時「年ふれば齢は老いぬ」の歌の末の文字かかへて答へたし三六の東三條左大臣は四十そこ〳〵で「老かくるやと」と戯れたことを思ふと、どうもそんな氣がする。で一方光孝天皇がお年を召してから御即位になつたことを思ふと、是真親王の御歌合は康秀のまだ五十歳前後の頃と想ふ。加ふるに古今撰集の時代を去ること遠からぬこの歌合の作者をば撰者が誤まる道理もないのだから契沖の説は字面に拘泥し過ぎたもので、矢張本文通りで正しいのではあるまいか？　但しこれは後に思ひついた卑見として加へておく迄である。）

注釈　吹からに　何が吹くのか。それは山風であることは　五句で示して居る。吹くとはやがて、吹くとそれがもとで　しほるれば　凋れるから、俗語で「しぼんでしまふもんだから」といふにあたる　うべ　宜とあて諾ともあてる。諾なふ意から來たもので「なるほど尤もなことだ」といふ意。木によつて「むべ」としたものもあるが同韻の轉訛である。山風　山から吹いて來る風といふことと字喩とを兼ねたもので山と風との合意字は嵐卽ち「あらし」となる意をもかけてゐる。あらし「し」は「風」の古語「ち」の轉　「荒風」「疾風」などの「ち」「て」などと同一語系で「荒い風」といふ意。嵐は秋以外、山以外にも味んだが、この歌などがもとになつて以後は秋の山のよせと定まつたやうである。（無論例外もあらう）

そしてこゝは草木を荒らすといふことにかけてもある　らん　は四句の始めの「うべ」につくので、山風を嵐といふのはなるほど尤もなことであらう……といふその「あらう」といふに當る。

通釋　山風はそれが吹き出すとやがて秋の草木を荒らして草木は皆しほれてしまふから、世の人々が山風をば　「あらし」といつたのはその草木を荒らす點からいつても、山と風との合意字が嵐である點からいつてもなるほど尤もなことであらうと思はれる。

評　秋風一過莖はくず折れ花は散り、萩も桔梗も牽牛花も、さては芒も紅葉ならぬ病葉までも凋れさせる野分のあしたの荒れた有樣は源氏にも枕にもこまかな描寫がある。あるといつても自分は自分だけのことをいふのだと斷つて徒然草にもある。その他代々の國文に色々と寫されて居る。（現代文學には正岡子規の名文もある）そこでその荒らすことを荒風にかけたのは、それだけであの頃の歌としては一節であるのに、更に漢字の桥字の字喩をすら咏み込んだのは巧緻驚くべき手際である。だが併し、之を詩趣の上から見てはホンの一寸「ハハアこれは面白い」といつて座興にする程度のもので、これが若し誰かに「山風をばなぜに嵐といふか？」と問はれたさそくの應答歌ならば、彼の躬恒が「月を弓張とは是れ如何？」と問はれて

照る月を弓張としもいふことは山べをさしていればなりけり

と卽答したのと一般、當意卽妙と評すべきたが、堂々たる何々家歌合で、字練句集の餘に案出した咏としては、餘りに詩味の索然たるものである。但し當時にあつては斯した遊戯文字の技巧も相當喝采を得たものと思しく、三三七にも友則が梅の花を「木毎に花ぞ」と咏んで居る。

全體この字喩といふものは今日では座興程度のものだが、以前は文學者の必技として可なりめい〳〵心掛けてゐたものと思ふ。例へば絶妙の好辭といふに「黄絹幼婦の好辭」といふ黄絹は色糸で糸篇に色は「絶」であり幼婦は少女で女篇に少は「妙」である處からいふ。餘材抄に「宜將愁字作秋心」とあるのもこの類なり、梅を木毎花　松を十八公八十八歳を米字の齢、日光山を晃山、などいふのもこれと似通つた造語である。

贈小琴女史　雷首

二八誰家女　嬋娟可憐　君無王上點　我爲出頭天

これは戯れに贈つたものだが「王」の字の上に點を打つと「主」となるし「天」の字の頭を出すと「夫」となるから、轉結の句は「御身にきまつた主」なくば、我は「夫」となりませうといつた字喩である。

吾々が子供の時

三メヤヤ

として、川が横なりで「横川」さかしにみては三(さん)で、三は名前に「さう」とよむから「さんざう」大の字が倒さで倒大(酒代)横なりの「せ」が二つで「横せ(越せ)横せ(越せ)」といふので、

横川三藏酒代越せ〳〵

といつたり「油」を高いところに書いて「よ」の字の縦線の長いものを書いて

油は高し　夜は長し

次に「人〇小なくなつて」次は小さいまるを二つ「〇〇」とおいて「人は(輪)小さくなつて困る(小まる)困る。などとして笑つたものだが、此も一種の字喩である。

徒然草六十二段には延政門院(後嵯峨天皇皇女愃子内親王)が父帝への御消息歌に

ふたつ文字牛の角文字すくな文字ゆがみ文字とぞ君は覺ゆる

とあつたのは「こいしく思ひます」といふ字喩であつたとか。この興味は謎々の興味と相通じて居る。

さてこの歌は英譯もあり獨譯もあり、新撰萬葉にも左詩もあるが、この様に純形式の興味に中心をおいた歌は譯したり醸案したりするには都合がわるい。これはどうしてもこの詞形に即して味はうべきである。

歌がるたではこの歌を特別札として囃すので川柳子はこれをとつて

うべ山の中へあらしの年始客

として「うべ山」を以て歌がるたを代表せしめた。

尙この秋下は野分に始まつて紅葉・露・菊など凡て中晩秋の景を歌つたものが收められてある。

二五〇　草も木も色かはれどもわたつ海の波の花にぞ秋なかりける

考　作者・清・六帖三濃「文屋朝康」

初句　元「く〇も木も」新萬下「草木みな」

二句　新萬下「うつろひぬれど」

三句　元「わたつうみの」新萬下「大海の」抄「わたつみと四字に書てもわたつうみと五字によむなりつの字にごるべき也」

四句　六帖「波の花こそ」

結句　六帖「秋なかりけれ」

釋　草も木も　四句の「波の花」と對照的においた疊句だから、草の花も木の花も、花といふ花は悉く」の意で、花といふ花云々は二個の「も」の餘情によつてさうとられる。色かはれども　秋風に吹き萎まれて色が褪せ衰へるけれども　わたつ海の「わたつみの」で宜い。「わたつみ」は海神「綿津見命」で祢冊二尊の御子で、その御名がやがて、うしはき給ふ海そのものの名稱となつた。此を「海若」と解くのは不可。又海の白濤の貌摘み綿のやうにある　で綿摘みだとか、綿を積んだやうにあるから綿積みだなどいふのは俗說である。波の花　波が花のやうに見えるから暗喩したもの　秋なかりける　「色はかはらざりける」といふところを二句と重語をさけて「秋」といつたものでこの語は洗煉されたいひ方である。「ける」は咏歎。

考　草の花木の花凡ての花々は秋風に吹かれて色褪せ衰へて行くけれども、大海原に咲く「波の花」はいくら風が吹いても一向に色が衰へない全く「秋知らず」といふものだなあ。

評　これも秋風颯々草木頓に凋落の氣を帶ぶるの時、それに關聯して波の花を想ひついたもので、たゞ波の花を咏むといふだけなら「秋」の歌ではないが、地上の草木の秋色を反映するやう取扱つた波だから矢張この部に入るべきもの、そして草木の變色と白木綿花の波枕とは、同一原因の秋風から起きることだから、陸を吹いては花を散らし海を吹いては

花を咲かせとなつて、一つの波を兩棲動物的に活躍させた手際も平凡でない。尙思ふにこの歌は前の「吹からに」と相俟つて一個聯作の體にもなつて居る。隨つて前を朝康と斷定したごとくこれも朝康作と認める人が多い。（愚考は前にもいつた通りこれなも康秀と推定する。かゝる巧緻な體は實に彼の康秀が得意の境ではあるまいか）水の春とか水の秋とか波の花といつた風のことは此頃から歌人に愛好せられた着想でもあり佳句でもあることは、本集中にも二三類咏がある點からも察せられようこの反對の趣向としては貫之集に左の咏がある。

紅葉々のかげを移して行水は波の花さへうつろひにけり

秋の歌合しける時によめる

紀よしもち

二五一　もみぢせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらむ

考　詞書・作者　元「秋の歌合しける時○よめる　紀淑人」拾遺三秋一八九「題しらず　大中臣能宣」

二句　元「ときはの山を」

小町集・六帖一秋の風・六帖二山・新撰　同。

雜　紀よしもち　紀淑望　從三位長谷雄の男で貫之の猶子となつたといふ。本集漢文序の作者。目錄によると

寛平　八、　二、二二、　文章生
昌泰　三、　正、一一、　備前權掾
延喜　元、　八、一六、　筑、（九月及第）
同　二、　九、一五、　民部丞
同　四、　同大丞
同　六、　正、　七、　從五位下
同　六、　三、　一、　刑部少輔
同　七、　三、二九、　勘解由次官
同　九、　四、二二、　大學頭
同　一〇、一〇、　八、　東宮學士
同　一二、　正、　七、　從五位上（簾勞）
同　一三、　正、二三、　兼信濃權介
同　一九、　？　？　卒

もみぢせぬときはの山　秋が來ても少しも紅葉しないときはの山（山城の國にあるといふが所在不明、或は之を普通名詞に見て、何處であらうと松柏杉などの常磐木の繁茂して居る山とも解く）こゝは「山」そのものを擬人したのでその山に住む人の心になつて謂つたものではない。この次に「眼に見える色では秋と知ることが出來ないから」と補ふ。音にやの「や」は疑問で最後につける。きゝわたる聞きつゝ秋を暮らす、「わたる」は年所時日を經過すること。

雜　（秋が來ても）紅葉もない常磐の山は（眼では秋氣分になれないから）吹く秋風の音を聞いて耳で秋らしい心持にひたることであらうか。

考　前には波の花には秋がないとあつたが、地上にも秋のないときはの山があるといふ趣向でこゝにおかれたものか？　山の擬人は一節面白いけれども、實際の人でもなく又作者が今その景に當面して居る譯でもなく、隨つて現實感の稀薄なのがこの歌の缺點である。

拾遺一九〇には大中臣能宣の

もみぢせぬときはの山にすむ鹿はおのれ啼てや秋を知らん

と鹿が自分の啼き聲で秋を知るといひ、さうかと思ふと、貫之集にはてんで秋知る道がないと歌つて

なべてしも色かはらねばときはなる山には秋もしられざりけり

といひ、本集三六二には風がよその紅葉をもつて來てこの山に見せてやるので秋を知るとある。とりぐ〳〵の趣向にみやびの程が見えて面白い。

題しらず　　よみびとしらず

二五二　霧立てかりぞ鳴くなるかた岡の朝の原はもみぢしぬらん

考　なし

補　かた岡の朝の原　大和北葛城郡　昔の葛下郡）大字王子近傍の山を片岡といひその裾を朝の原若くは葦田の原といつて、紅葉や時鳥の古歌が多い。兩脚の地名で中には片側高くなつた土地の普通名詞だと解いたのもあるが、隨分古くから文献に存して居るから矢張り如上のやうに採つておく。參考の爲めに二三を引用する。

紀　推古天皇二十一年

十二月庚午朝。皇太子遊行於片岡。時飢者臥道ノ垂。仍問姓名。而不言。皇太子視之與飲食。卽脫衣裳。覆飢者臥而言。安臥也。則歌之曰。

斯那提流　箇多烏箇夜摩爾　伊比爾惠豆許夜勢屢諸能　多比等阿波禮　於夜那斯爾　那禮奈理鷄迷夜　佐須陀氣能　枳彌波夜那祇　伊比爾惠豆　許夜勢留諸能　多比等阿波禮

そして飯田武郷氏の通釋のこゝの註（第四、三〇〇七）に

片岡。大和志曰。葛下郡片岡。在片岡莊今泉村。

守部云。行嚢抄南遊第四、大和國葛下郡龍田越條云。追分舟渡の南の岸邊に在。自是左に赴くは達磨寺の路なり。又當麻寺へも行。左藥井村。右大輪田村。堀内村此村に達摩寺あり。此邊を片岡と云。禰名院殿高野紀行云。片岡の志水明王院のあたり朝の原まで云々。今按に、右の飢者を、後の浮屠氏、達摩大師なりけりなど詳て、さる寺を建たるなり。今は只此達磨寺古院となりければ、この地跡の證とはすべきものぞ。

と云へり。

大和志料下卷三一五―三一六に

片岡山　王子村ノ西南一帶ノ山麓ヲ物稱ス、綏靖天皇紀ニ片丘大窪ハ其間ニアルヘキモ址詳カナラズ

葦田原王子村ニアリ、一ニ朝原ニ作ル。姓氏錄（大和未定雜姓）ニ葦田首アリ、蓋コヽニ取レル氏姓ナラン。

小松ノ杜　志都美村大字今泉ニアリト云フ。

六帖　片岡の小松のもりの時鳥ほのかにぞ鳴戀しかるべし

物集高量氏日本名所事彙五七上段に

片岡。北葛城郡王寺村大字王寺近傍の原野をば古へより和歌に詠じたること多し。

津守經國「片岡の裾野のくれに鹿啼きて小萩色づく秋かぜぞ吹く」

（綏靖紀の大窪は渡會延佳の說では二上山の麓から河内國石川郡之路に行くまでを大坂と謂ふ。今も大きな岩窟があつて岩窟越といふ。それが昔のあとである。）

補　秋霧がたつて（大空には）雁が鳴いてゐるナア（此分ではもう）片岡の朝の原あたりは紅葉してゐて（さぞ美しいことで）あらう。

評　朝の原の地名自から朝の秋郊の匂となつて、折柄立ちのぼる霧も一段と濃霧なるを想はせる。折柄行雁高く鳴いて景氣がすつかり秋になつた。そこで聯想は直ちに紅葉に馳せ紅葉で親しみある片岡に馳せたと見れば、素朴味自然味があつて秋の歌の中實感味の多い秀詠の一つである。冬の歌でこれに似たものは新古今の六五六題しらず　人麿

矢田の野に淺茅色づくあらち山峯の沫雪寒くぞあるらし

などだが、着想からいふなら、眼前當面の實景から、曾遊、名勝、未見の古歌の景を思ひ遣ることは、四季風物の鑑賞の定型ともいふべく、その意味に於てならば類咏はざらにある。

さてこの「紅葉」はこの部の主なる題材でこれから三十首といふもの悉く紅葉を題材とした歌ばかりである。一體木の葉は何が原因で黄葉紅葉の美を呈するのか、歌の方では秋の女神の龍田姫の妙業とし、風のせいだ、露のせいだ、霜のせいだ。いや露と時雨の經緯で織つた綾だ、いいやさうではなく、餘り寒くなつたせいだと樣に歌ふが、この大まかな詩人的觀察は、偶然にも今日の科學的研究の結果と一致して居るのも面白い。オーベルトン氏が嘗てとちかゝみの樹につき甘蔗糖液によつて實驗した結果紅葉の原因は

一、糖分が多量に含むこと　二、低溫度に晒されること
三、充分日光を受けること　四、細胞液内に單寧を含むこと

とあるのがそれだ。そこで古今集歌人の紅葉觀はどうかといふに千紫萬紅の美や紅錦繡の美や秋の代表的景物だといふことを、巧みにめでたものは可なりにあるが、まだ現代歌人のやうに幅廣く群衆の美と單一の美の各方面に亘つてその趣を一筆書きに描いたやうなものは少い。即ち

秋の神の黄金の鞭の地に觸れてその夜野山はみな色づきぬ　尾上柴舟
なべて世の靑きは雲と空に榮え紅葉照り照る山かな野かな　鹽田香園
一葉ちりし紅葉拾ひて力なき秋の夕日にすかしてもみつ　千家信子

などはこの集にはない着想だと思ふ。

考　清「こゝに次の二五四の歌がある。」

二五三　神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびの杜

考　筑この一首なし
初句　元「十月」
結句　元・筑「かむなびのもり」
爲「神なべのもり」
新撰　同。

補　神無月　陰暦十月の異名　時雨　秋冬にかけて降る雨後撰八冬、四四五題しらず　讀人しらず

「神無月ふりみふらずみ定めなき時雨ぞ冬の始めなりける」が始め、左の諸咏のやうに十月かさなくば冬のものとして咏んだ歌句が多いが、この頃では必ずしも十月とは限らない。先づは秋冬の雨と看てよろしからう。

いつもなほひまなき袖を神無月ぬらしそふるは時雨なりけり　相模
くれやすき冬の日とてやたび人に道いそがする時雨なるらん　木居宣長
今日よりばかみなし月のしるしにや時雨にほしき傘一本　芦の丸家

鈴の音のふりみふらずみ村時雨高間が原のかみな月とて　良滿

ふちなくに　「なく」は「ぬ」の延音降りもしないのに、かねてうつろふ　醸て移ろふ、時雨に先だつて色づいてそれが早や散りさうになつてゐる。神なびの杜　「神なび」はもと「神のもり」といひ、上代汎神教の思想で多少奇異な地象は凡て神業に歸し、樹立の茂るところ卽ち神ありと信じて神ゐます森ととつたのが、更に轉じて神ゐいつき祭る處は大抵樹立ある森や林や山なので、神を祭つた森の意となり、三轉してその神に附屬した神森、宮山となつた。神のもり　を約して　神のみ　通音によつて　神なみ　通韻によつて神なび　となつたものだといふ。すればこれとても最初は普通名詞であつたものが後には固有名詞となつたのであらう。(醸て神なびの杜といふのは「人力車ぐるま」といつたやうな重言なのだが、それだけ神なびといふ語の成立が古くて慣用久しいことがわかる。

神奈備といふに三ヶ處あつて、一つは山城二つは大和でこゝは大和の方であるこの歌を奈良朝時代のものと想定して）卽ちこゝのは平群郡龍田村大字神南の背後の翠巒高さ約十丈直徑五町近いものをいひ、山といふよりは杜といふがふさはしい。今一つは同郡三郷村大字立野にある神奈備山である。（出雲國造神壽詞の註などに解說がある）

語 神無月の時雨もまだ降りもしないのに、早くも神奈備の杜の木の葉は充分に色づいて最早散り方にもなつて居る

評 秋の歌に神無月といふのがをかしいといふので、色々先輩の論議があるが、上の句は「未だ神無月にもならず、隨て時雨も降らないのに」といふ意で、初句の下に「の」を入れる處を句調上省いものと思ふ。秋だのに神無月から出發するのが拙いといふなら秋霧をいふのに春霞をいふのは猶更拙い。想ふにこの歌は、まだ〳〵紅葉などは念頭にもかけてゐなかつた作者がたまたまこの杜の紅葉に驚異したもので、十月の異名を神無月といふのは一、雷無し月二、神事しげき神の月三、新酒で酒をつくる釀成月、四神が出雲大社に參集するため出雲だけは神有月といつて、他は神無し月といふなど色々あつて、最後のものは、採るに足らぬ俗說だが、作者はむしろ秀句的に

神無し月にでもなつたことなら神なびの杜も主の不在に移ろひもしようが、現に神樣が御出でになるのに早や移らうたと趣向したものとも想ふがどうであらう？

尙　元永本・傳爲相筆本にはこゝの次に左の一首が載せてあり。（傳貫之自筆本にもあるといふ）三代和歌集校本及び傳爲家筆本は前の歌の左註に

「又ハワガカドノワサダモイマダカリアゲヌニ」として、（清輔本にも「又はわかゝとのわさたもいまにあけねは」）

「わが門のわさ田の稻もからなくにまだきうつろふ神なびのもり」とある。

（そこでこの歌が始めあつたものを上句を誤つて前のやうな歌が流布したと觀る人もある。猶後考を俟つ。）

二五四　ちはやふる神なび山の紅葉ばに思ひはかけじうつろふものを

考 元・筋　此一首なし

六帖二社・新撰　同。

語 ちはやぶる　神の枕詞　神なび山　前に解いた。思ひはかけじ　未練はかけまい。愛着はすまい　うつろふものを　散つてしまふものを（何しに深く思ひをかけようぞ）

評 神奈備山の紅葉今し滿丘に燃えてそゞろに里人の目を惹くものがある。作者この景をめづるの餘り、落葉の悲哀を豫感して、この形をとる。下の句のいひまはし語は無關心にして意は熱愛の餘韻あり、戀人に呼びかけて「あなたは可愛くて憎らしい」といつた感情、想ふにこれもこの杜近くの美女に懸想した人の秋の折節假托の述懷であらう。

貞觀御時綾綺殿のまへにむめの木有けりにしのかたにさせりける枝のもみぢはじめたりけるをうへにさぶらふをのこどものよみけるついでによめる

藤原かちをむ

二五五　おなじえをわきて木の葉のうつろふは雨こそ秋のはじめなりける

考 詞書・作者　元「貞觀御時、綾綺殿御前に梅木ありけるが、西方にさせりける枝の、もみぢはじめたりけるをうへにさぶらひけるなとこどもの、うたよむついでによめる、」　藤原勝臣

初句　新撰「おなしえに」傳貫之自筆本「綾綺殿の處弘徽殿とあり」（金子氏）

三句　活「うつろふは」二「うつろふは」元・筋「いろづくは」

三句　元「色づくは」

補 藤原かちなん　目錄に從五位下越後介發生男、元慶七年正月阿波權掾ニ任ズ、貞觀御時　ぢやうくわん　清和天皇天安三年(一五一九)四月十五日「貞觀」と改元、それより陽成天皇貞觀十九年(一五三七)四月十六日「元慶」と改元に至るまでの御代兩帝の中下記の宮殿を御座所とせられたのは清和天皇である。(三代實錄參照)綾綺殿　れうきでん、內裡の御殿の名、仁壽殿の東、宜陽殿の北にあつて東の方は壺庭を隔てゝ溫明殿に對つて居る。おなじえを　同じ株の枝だのに「を」は離接の助辭としたが。之を客語助辭として「同じ枝なれば」としてもさしてちがひはない。わきてうつろふわけ隔てをして西の方だけ紅葉するのをみるとさてはこゝは元永本の「色づくは」の方が優つて居る。西こそ秋のはじめ　支那で秋を西に配合するのに今丁度西の枝が色づいたといふので、さては西の方が秋の始めであつたわい。

講 貞觀の御代綾綺殿の前に梅の木があつたが、その木の西の方にかざした枝が色づきかかつてゐるのを見て殿上人たちがそれを題に歌をよんだ時自分も咏んだものがこれだ。

同じ梅の木の株だのにわけ隔てをして西の方が先づ色づき始めたのは、さては(支那で秋は西方より來るといふが)西こそは秋の始めであるなといふことを、私は耳にきくのみならず今現に眼の前に見た)

評 當時この場で咏んだもの一つとして本集に採られてゐないのに、特に入選の榮を荷つたのは漢才を重んずる頃の風尙である。後年清女が「おい此君」や「草の庵」で喝采を博したことを想へば西こそ秋の始め」は正しく衆人をあつといはせたものに違ひない。

後年新撰萬葉の左詩にも「乘黃葉西初秋」とあり、元輔集にも、

西の京にすみ侍し人のとはぬ心ばへの歌よみて侍し返事に

草わかみ結びし萩はほに出す西なる人や秋をまづしる

とある、それ等の俤を爲したものか？

二五六　秋風の吹にし日よりおとば山みねのこずゑもいろ付にけり

いし山にまうでける時に。おとば山の紅葉をみてよめる　つらゆき

考 詞書　元「よめる」の三字なし

相「いし山のてらにまうでける時……」

作者　三「きのつらゆき」

四句　嘉「峯のこすゑは」

講 いし山。近江の石山觀世音は奈良朝末に開山(良辨僧正)し王朝に入つて平安京の人々がよく參拜した。落窪にも一同が石山詣してゐる留守に落窪の君が近衞少將と逢ふ處があり、源氏にも源氏が石山詣の中途逢坂で昔言ひ寄つた空蟬に邂逅するところがある。これは已に一四二で說いた。秋風の吹にし日　り　次の音の序詞的においた景氣の句である。秋風が吹くと音がするその音を名にもつ音羽山とつゞく。でないと一七三と　じことだと誤解し易い。已に季吟がその區別を注意して

「秋なかば過ゆき、風肌寒く吹し時分より音羽山の梢も色付たると也。」久かたの天の川原に立ぬ日はなしといひし秋風の吹にし

に此歌時節ことなり可分別

と謂つて居る。區別の必要あることは右の通りだが括弧內の句は紅葉を見つけた時の風と解く爲めに時候を合せる爲めに無理な語が補つてある。

講 秋風が吹きそめた日から音にもしるきものがあるその音の名の音羽山　(をば今日石山詣の途すがら通つて見るとアレ)峰の木立の末もあの樣に色づいて(秋は風の音のみか紅葉の色にもしるくなつて來たよなあ)

評 通りすがりに「ハハアあすこいら邊は大分紅葉してゐるな」といつた感じをさながらに咏んだものであるから貫之の作としては輕味を以て優るものだが、尙初二句のいひ方は少し勿體がつき過ぎて居る爲めに一七三の時鳥に一籌を

輸した氣味がある。

これさだのみこの家の歌合によめる　としゆきの朝臣

二五七　白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちゞにそむらん

考　詞書　元「よめる」の三字なし
作者　三「藤原としゆきの朝臣」
初句　元「白露も」
三句　新撰「いかなれば」
四句　相・新萬下「秋の山べを」
六帖一・露　同。

類　ひとつを　一つなるをの意五句の千箇の對照　いかにして　どうして、いかやうにして　千ぢ　千箇一九三に説いた

評　白露の色は唯一つ色だのに、どうして秋の木の葉をいろ〳〵様々と美しく染めるのであらう。（造化の天工眞に驚くの外はない）

評　秋の更けると共に白露夜々に繁く、やがて千紫萬紅の美を呈するより、この美を以て白露のわざとし、白露と紅黄、一つとちゞ、とを上下二段に排列して對照を齊整ならしめたもの、佳咏である。之を人工の技に移すと吾々が麥酒會社を參觀して、始めのもやし場を觀てあとをサツサと端折つて見て行つてさて最後にビール罎につめてレツテルを貼る場を觀せられてオヤと驚く様にも似て居る。否それよりも一個風姿の楚々たる若いソロニストがステージに立つて、やがてテクニツクも鮮やかに高低・緩急・強弱・悲哀・勇壯・快活と表現自在に歌ふのを聽いて、「あのやさしい一本の喉からどうして斯う色々と唱ひわけ自在を極めたものだらう」と驚異する様によく似て居る。二四五にも此に似たのがあり、賴基集にも

白露はわきておかじを秋の山やまのもみぢのうすくこからん

後撰七秋下三一〇にも題しらず、讀人しらず

おくからに千草の色になる物を白露とのみ人のいふらむ

といふがあるが。これ等類咏の中想形共に最もすぐれて居る。

二五八　秋の夜の露をば露とおきながらかりの涙やのべをそむらん　壬生忠岑

考　元永本・此一首なし
詞書　忠岑集：この前に本集一九三の歌をのせその詞書として「秋の夜日のいみじう明かりしに」とし次にこゝの歌の前に「同じ頃ほひに」とある。
三句　忠岑集「思ひ置きて」

類　露なば露と云々　露なば露としてそのまゝそつと措きながら、（別に）この句の主語露ならば置きながらと自動詞でよろしいがそれなら露は露とし置きながら」などあるべきところだ、で措く（さしおく）と他動詞にして、主語は「雁」とか「秋の女神」とかに想定すべきであらう。雁のなみだ　雁は音にたてて啼くので泣くと見て泣けばこぼれる涙を想ひついたもの、しかもこれが紅葉の原因になつてゐると見立てたものだからこの涙は紅涙（血涙）と見たもの。

評　秋の夜におく白露は白露としてそつとして措いて別に大空をないて渡る雁の紅涙が野邊をそめたのであらう。（でなくてはあの白露がこんなに千々の錦を染め出す道理がないではないか）

評　前の歌は「なぜに木の葉が千ぢに染まるか」と問うた歌であつたから、こゝではそれを美的に解決して雁の涙に

歸した、一問一答は例の撰者の意匠が見えて面白い。白露・紅涙の色彩など巧思も見えないではないが、前のやうに歌ひかけた時即興で即答したものならば、折節の興もあつて優れた歌とも謂ひ得ようけれども着想は空疎に失して感味は乏しい。已に二二一に類想の佳詠が出て居る。

題しらず　　よみびとしらず

二五九　秋の露色々ことにおけばこそ山の木のはのちぐさなるらめ

考　二句　寛平歌合秋一六右・元・筋・新萬下「いろことごとに」
六帖一露・頓、色々ごとに」
四句　寛平歌合「山も紅葉も」
元「やまのこの〇〇」
新萬下「山の紅葉も」
爲・相「山のこのはも」
三「山のこのはも」（三本同）
新萬下　秋の露色殊々丹波許曾山之黄葉裳千種成良咩

評　色々ことに　様々異に、色々と別々にの意、「色ことゞに」ならば色殊々にでこれも「色別々に」の意だがそれ以外の形は歌語としても、文語としても雅醇を缺く。

評　秋の露は（一つ色の白でなく）色々色合を異にして置くからこそ山の木の葉が色様々に染められるのである。

評　前々のに「白露の色は一つ」といつたし前のに「紅葉は雁の涙の故」といつたから、こゝはこの二つの埒外に出て否雁の涙でなく矢張露の故だがその露は白の一つではなく色々別々の露が草木において、それによつてあゝした色階を作つたものだと歌つたもので、この三種の排列は實に面白く出來て居る。が三句の止めと五句のとめとは餘りに力が入り過ぎて、誰も論を唱へるものもないのに力みかへつて強硬に主張する處、稚想は詩想とはいへ、少し強調が過ぎて響く、それにまた露に色々ことにの着想は造化の天工をまるで色砂を盛りわけて盆景でも作るやうな、小さい人工に縮小化する氣味もあつて趣向としては珍らしいが稍自然味を缺く嫌もある。

もる山のほとりにてよめる　　つらゆき

二六〇　しら露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色付にけり

考　詞書　元「守山にて」
貫之集「竹生島にまうづる　もる山といふ所にて」
作者　六帖六紅葉「忠岑」
結句　六帖六・貫之集「紅葉しにけり」

評　もる山　守山、近江野洲郡の一驛で傳說によると奥州守山の人がこの町の草分となつたといふ。後世東海道五十三次の一として榮え、今も一小都邑をなして居る。そこの木立を味んだものである。もる山　今は「もり山」といふが當時は「もる山」と謂つたものか？　若くは秀句のためにわざと「もる」と書いたものか？　地名の「もる山」と白露も時雨も「洩る山」とかけたもの

評　しら露もひどく洩れば時雨もひどく洩る守る山では「餘の處はまださうでもないに、上葉は勿論）下葉に至るまでもすつかり色づいて居るなあ。

評　竹生島參詣にしては守山は順路でないと奥沖が疑つたのもさる事ながら、貫之には他にも守山の歌があつて少くとも實景を見ての咏であらう。先づ守山について、そこゝら見渡して見ると秋も漸くたけたとはいへ、音羽山でも中途でも見なかつた（逢阪山は杉の木勝ちだつたといふ）のにこゝは皆黄紅に變つて居る。これを題で何がな一工夫をと思ふと

幸かな地名が守る山――おつとしめたといふもんで「白露も時雨もいたく守山は」詠み下した、已にこゝまで出來ればあとは貫之にとつては何の苦もない。すぐと下の句が浮んで、さてこそ斯くの詩形となつたものであらう。「もる」の「いたくもるの」だから「殘らず色づいた」と語句の承接耳立たずして寸分の隙もなであるから下葉にもはたらくし、

く整へられてある。作者得意の纖巧體のよい意味に於ての一代表作。

後年太平記五俊基朝臣再び東下りの道行に「時雨もいたく守山の木の下露に袖ぬれて」は、この歌をふまへた文である。

秋の歌とてよめる　　ありはらのもとかた

二六一　雨ふれど露ももらじをかさとりの山はいかでかもみぢそめけむ

考　二句　相一霧ももりしを」清「つゆも〻りしを」（諸本）頭に「御本ニモモルヲ直テモリシトカケリ」

結句　元・筋・爲「もみぢそむらむ」

講　霧ももらじを　霧ほど僅かの雨も洩るまいのにといふのを「雨は勿論その雨の霧しぶきも洩るまいのに」とかけた秀句的ないひ方　かさとりの山　笠取山、山城宇治郡笠取村（醍醐の邊）の山、方丈記に「こゝろざし遠くいたる時は、これより峯つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて岩間にまうで」とあつて長明が隱栖の日野山つゞきとある。山の名に笠を取り持つ意をかけた。（笠をとつて脱ぐと誤解しないやうに）笠はがぶり笠で當時は衣笠であつた。（傘はさす、からかさのこと）

講　雨があつても笠を取り持つといふ笠取山のこととて露聊かも洩るまいに、どうして（あんなに早く）紅葉しそめたことであらう。

評　紅葉を以て時雨のせいと思ひ定めて、「笠取山ならば雨もかゝるまい隨つて紅葉もすまいと思つたに此は意外――」といつたもの逸興は認められるが、實感には遠い。金子氏の言に「俳諧歌めいてゐる」とあるのは適評である。

神のやしろのあたりをまかりける時にいがきの紅葉を見てよめる　　つらゆき

二六二　ちはやふる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

考　詞書　元「時」「よめる」の四字なし」

結句　元・筋・六・帖六「くず「色づきにけり」

講　ちはやふる　神の枕詞　いがき　いみがき（忌垣・齋垣）の略、不淨汚穢を忌んで入るを止むる爲めの垣卽ち玉垣又は瑞垣のこと（その構造・種類等を見るには山河鵜市氏神祇辭典五一九――五二〇などが便利だ）くず　葛、又は眞葛ともいつて秋の七草の一つ強靱な蔓草で、その纖維を晒して葛布を織る。花は紅紫色の蝶形で長さ五六寸の總をなして咲く。葛花といつて、羊麗ではないが一種の風情がある。冬期この植物の地下莖を掘り採り搗き爛して精製した食品が卽ち葛粉で、殊に吉野の國栖を名産地とする。葉は三個の裏葉で秋冬の交美しく色づく又聊かの風にもすぐ靡つて葉裏が見える處から「裏見」を「怨み」にかけて歌文につくる。

芦屋道滿大内鑑に老狐が日に筆を咥へて書きおきする處に

戀しくば尋ね來て見よ和泉なるしのだの森のうらみ葛の葉

あへず。堪へずと同義、得堪へずして、立ち合ひ難くて、移ろひ。詞書によるとこゝは唯色づくことをいふ。

講　神の祠の近くを通つた時に、玉垣のうちの紅葉を見てよんだもの、凡ての不淨を忌むといふので埒を限つて居る玉垣に匍ふ葛ですらも秋の力には得堪へずして（あれあのやうに）色づいたこと――、

評　秋の普遍力を巧に强調したもので、秋氣一たび襲來するや物として之に征服せられざるはなく、はてはこの聖なる神域の葛をも秋化して紅葉せしめた。已に忌垣の葛をも征服する程の秋だからその餘の山野草木は推して知るべしとなる。萬葉十秋相聞、譬喩哥二三〇九に

はふりらがいはふ社のもみぢ葉もしめ縄こえてちるとふものを

とあつて此とよく似て居るといふ人もあるが、似て居るのは語句だけのことで、萬葉のは「思て通へば千里が一里」式の戀情をよそへたものでこゝのとは全然別種の着想である。貫之のは詞書にもある通り、實際の嘱目を詩化したもので而かも四五に說いたやうに、貫之には自然の風物推移に對しては人間は眞に不可抗力として之を悲しむより外に途がないといふ觀方をしてゐた歌人で、この種の咏が他にもあることは已に述べた通りである。彼が守山で咏んだ紅葉の歌も二六〇に出てゐたが、別の度に守山を過ぎた時の歌に後撰秋下の

足引の山のやまもりもる山ももみぢせさする秋はきにけり

とあるも同じ型である。

枕草子「神は」の段に

平野はいたづらなる屋ありしを「こゝは何する所ぞ」と問ひしかば、「神輿宿といひしもめでたし。忌垣に蔦などの多くかゝりて紅葉のいろ〳〵ありし、秋にはあへず」と貫之が歌おもひ出でられて、つく〴〵と久しう立たれたりし。

は貫之のこの趣味の繼承である。又夫木抄第十四に昌泰四年八月歌合

いその上ふるのやしろにはふくずも秋にしなれば色かはりけり

とあるも暗合でなければ、模倣であらうが、表現はずつと弱い。

是貞のみこの家の歌合によめる

二六三　雨ふればかさとり山の紅葉ばは行かふ人の袖さへぞてる　たゞみね

考　詞書　忠岑集「惟貞のみこの御歌合に」元「惟貞の親王の家の歌合に○○○」

三句　新萬上「秋の色は」

新撰　同。

語　雨ふれば。雨がふるのでといふ意で、雨が降ると人は笠をかぶる(とる)所から笠取山をいひ出す爲めの序詞として置いたものの、(本によつては枕詞とも冠辭とも序詞とも說いてあるが他に用例がないものだから、有心の序詞的な句とする)かさとり山。二六一に、行かふ。往き交ふ、往き來きする。袖さへ。袖までも、(山は勿論)

講　雨がふると笠をとるものだがその笠取を名に負ふ笠取山の紅葉は、今眞紅に色づいて山は勿論、通りすがりの人人の袖までも照りわたつてをる。

評　滿山の紅葉朱丹に燃えて、指貫姿の王朝人が仰ぎつめでつたゆとふ有樣は好個一幅の土佐畫といひたい。元祿の芭蕉は

卯の花をかざしに關の晴衣かな

といつて白河越をしたといふが、俳聖た卯の花、王朝人と紅葉彼此その配合の宜しきを得たものであらう。けれどもこの歌は「ふる、とる、てる」といふ詞のかけ合ひに興味の中心をおいて、何の降るどころか照りわたつてをるといふのが力點になつてゐる。さては實景はさほどにもないものを詞の都合で「袖さへぞ照る」などいつたものか？　それならば所謂文の爲めに意を害するもので、殘るところは嫌味多い誇張だけである。

寛平御時ききいの宮の歌合のうた

二六四　ちらねどもかねてぞをしき紅葉ばは今はかぎりの色と見つれば　よみ人しらず

考　詞書　元「寛平御時の　后の宮の歌合によめる」

二句　元「かれてぞしるき」

新萬上「不散朝包手曾惜敷黃葉々者今者限之色砥見都例者」

巻下　二六三・二六四・二六五

寛平歌合・秋　〇左　同、　冬一〇左　同。

補 ちられども　今分では何も散つては居ないけれども、かれてぞなしき　散らぬさきから惜しまれてならない。豫てとして前以てあらかじめの意、「兼れて」ではない。今はかざりの色　今が盛りの絶頂の色、これから變るとすれば紅褪せ片やせ葉落ちるより外ない趣。

講 紅葉ばは色が眞盛りの絶頂の色と見えるので(まだ散つた譯ではないけれども)今からその凋落が惜しまれてならない。

評 「今は限りの色」は秋來りて移ろひ行く紅葉は梢の枯れ衰ふる限の色即ち梢そのものの生命の限度と解いたものもあるが、これは「紅葉し得る極限の色」ととらなければ趣がない。歡樂極つて哀情多く、物盛なれば則ち必ず衰ふで燃えの盛りの紅葉ばは、あまりに美しいが爲めに凋落のみじめさが一層痛ましい。そこでこの落葉の悲哀を豫感して歌つたもので、この對手を人に移すと在原滋春の三七二の歌が出來る。非常な秀詠ではないが　亦一節着想の棄て難いものがある。

當時この歌の相手になつた右方の十番は次の詠である。優劣は何ともわからぬが着想に於ては、これまさり技巧に於ては彼優るといひたい。

白波に秋の木葉の浮べるは繰の流せる舟がとぞ見る

二六五　たがための錦なればか秋霧のさほの山べを立かくすらむ

やまとの國にまかりける時さほ山にきりのたてりけるをみてよめる　きのとものり

考 詞書　友則集　大和國にて明けるに佐保山に霧のたちけるを見て」　元「……大和の國へ……霧のたちけるを○○○○○」　躬恒集・新撰　同。

清頭「在家持集但さほの山へのはるゝときなき云々」

講 まかりける時　大和の秋景を探るべく觀風旅行をしたと解いたものがあるが、さう見るとこの歌の情趣も一層ひきたつ譯だが他に何等確證がないから矢張何かの所用を以て大和へ行つた時と語句の示すだけの意をとつておく。さほ山　佐保山續紀には藏寶山とあつて大和添上郡今在家及び東坂以西興福院邊に連亘して居る山彙一帶の總稱で、佐保山とも奈保山とも雍良岑とも古書にあるが當期に入つては佐保山で通り、柿の紅葉は殊によくよまれた(次の歌や二八一)山城から大和へ來る人の必ず通る奈良坂といふのもこの中にある。で、作者はこの奈良坂越なる時にこゝの詩趣を得たものであらう。たがための錦なればか　紅葉を美しく美しく想像したもの、一體誰れに着せようとての錦であるからといふのか、秋霧の「の」は主格を示す「が」と同じで「秋霧が」ととる　たちかくす「たち」は接頭語ではなく實動詞である……と共に錦の緣語の「裁ち」の秀句でもある。

講 一體誰の爲めの錦としてこゝの紅葉を秘藏して居るからといふので、秋霧が佐保の山邊に立ちこめて(折角見たいとあこがれてゐるこの我に見せないやうに)隱してゐるのであらう。(あゝこの霧さへなければ黄纈纈の美を心ゆくばかりめでようものを)

評 季吟は「さほ山」の「さほ」も棹と同音でそれは錦をかけることのよせだと解いて居るが、そこまで斧鑿が入つてゐたかどうかは疑はしい。九四の貫之が三輪山の春霞を詠んだものとよく似て、風流韻事についての好事多し魔の歎きである。

二六六　秋霧はけさはなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん

詞　詞書・作者　友則集「惟貞のみこの歌合に」　元　此一首なし
二句・六帖六紅葉「立たずもあらなん」
三句・新萬上「龍田山」
結句「よそ乍らみむ」

考　秋霧ば。の「は」けさはの「は」共に他と區別して特にその上のものを強く呼び出したもので、「餘るものはともあれ彼の秋霧だけは、その秋霧も外の日はともあれ自分がこゝを通る今日だけは」といふのである。さほ山。二六五にある。はゝそ　柞、櫟とも櫟とも いふ。余が鄕里地方ではほうそがしは(柞櫟)といふ葉は柏に似て稍細長いところから葉細柏をつゞめたものか　勿論濶葉樹で栗の葉と同じ樣に美しく黄葉する　で、自分では櫟といへばいつもこの物と思ひ定めては居るけれども、これは隨分やかましく問題になつてゐる樹であるから左に一通りそれ等考證の概略をあげて取捨は讀者の自由に任せておく。(以下は主として松山亮藏氏の「國文學に現はれたる植物考」により芳賀博士の今昔物語集から補つたものである)

一、屋代弘賢　古今要覽　拔抄

今按するに波々曾は大同類聚方に載るところの波保曾加之波と一物也。其波保曾は、卽細葉の義又本草啓蒙に、大和にては保曾とも云よしみえたり、此の葉頗る櫟葉に似て細小狹長なるを以て波保曾とも波々曾とも名附しなり。其莖葉霜變最紅は之ある故に、源氏物語に、冬のはじめ朝霧のむすぶべき菊のまがきわれはがほなるはゝそ原といへり。古歌にハハソの紅葉を詠ぜしはこれなり。又一種波々曾あり、之は黄葉にして紅葉はせぬものなり

さほ山の柞の色はうすけれど秋は深くもなりにけるかな
柞原うすきならひをわすれつつしぐれにかこつ秋の山かな

と詠めるは皆黄葉のものないへり。又ハハソすると詠める歌殊に多し、この柞は藻藍草にコナラガシハは柞なりといへるものにして後條にのする所のコナラを指といふ　かかれば　撰字鏡に楢を波々曾と訓ぜしも其意味ありといふべし

二、白井光太郎博士植物學雜誌寄書論文　落葉樹・櫟屬を總稱して

山城・大和・近江邊では　ハハソ
關東地方では　ナラ
木曾では　マキ

といふ。又大和吉野邊では、コナラをマホホソ、ナガホホソをドボホソ。ミヅナラをヤマホホソ、カシハナラをカシハハハソ又單にカシハといつてゐる。倘記載例をあげると

1、ガホガシハ Q. dentata, Thunb, var Wrightii, A, D C 一名ガホハハソ此の二名は草木圖說にある。
2、ナラガシハ Q. aliena Bl. 大和吉野山邊ではカシハハハソ又はカシハといふ。
小野蘭山本草啓蒙櫟のところに十種の異名同物を擧げて居る。
櫟・ハハソ・ナラ・ホソ・ホウガシハ・カシハ・モチガシハ・カシハギ・マキ・ゴウゴウシハ
3、ミヅナラ Q. crispula B., 日光・富士・秩父等の山にあつてミヅナラといふ。これは大和の前鬼山ではヤマホホソといふ。
4、ガホナラ Q. Crispula Bl. 草木圖說では又マナラともノイシナラともいふが、滋賀縣下では之をハハソといふ。これには通常「楢」字をあてる。
5、コナラ Q. glandulifera Bl. 遠州秋葉山ではスノキといひ、大和吉野ではマホソ同前鬼ではノホソといふ、漢名「朴」

三、今昔物語卷卅一第卅七　近江國栗太郡大柞語

今昔近江ノ國栗太ノ郡ニ大キナル柞ノ樹生タリケリ、其ノ圍五百尋也然レバ其ノ木ノ高サ枝ヲ差タル程ヲ思ヒ可遣シ其ノ影朝ニハ丹波ノ國ニ差シ、夕ニハ伊勢ノ國ニ差ス。霹靂スル時ニモ不動ズ大風吹ク時ニモ不レ搖ズ、而ル間其ノ國ノ志賀栗太甲賀三郡ノ

百姓此ノ木ノ蔭ニ覆レテ日不」當ザル故ニ田畑ヲ作得ル事无シ此レニ依テ其ノ郡々ノ百姓天皇ニ此ノ由ヲ奏ス　天皇卽チ掃守ノ宿彌等ヲ遣テ百姓ノ申スニ隨テ此ノ樹ヲ伐リ倒シテケリ然レバ其ノ樹伐リ倒シテ後百姓田畠ヲ作ルニ豐饒ナル事ヲ得タリケリ。彼ノ奏シタル百姓ノ子孫于今其ノ郡々ニ有リ昔ハ此ル大キナル木ナム有ケル此レ希有ノ事也トナム語リ傳ヘタルトヤ。

（攻證には大木の例として尙數種あがつて居る。面白い記事だが柞には無關係だから省く）

大體以上のやうなもので結局「はゝそ」は「葉細」の轉であること、その葉が細いといふのは柏を本にしていつた稱呼であることは確かだが、檜・櫟・朴等黃葉するものの汎稱で　何の木と或一つの樹を指したものではないやうだ　自分は大體古今要覽稿の通りであらうと信じて居るが、唯「美しく紅葉する」といふ點が打傾かるゝのであつて柞は黃葉はしても紅葉はしないと想つて居る。したがつて「柞の色はうすけれど」などいふのも稍黃葉しかけたところともとられ、黃葉はしても紅葉しないからさういつたとも解せられる。よそにてもみん　よそながらも見ようから、そばまで行つてちかに翫賞することは出來ないがせめて通りすがりに遠望しようとの心。

評 （今しも自分は佐保山近くを通りつゝあるものだから特にたのむのだが）オイ秋霧よ、今朝は特別を以て立つことを見合はせてくれよ。きすれば自分はあの佐保山の柞の紅葉をばせめて通りすがりに見めでつゝ過ぎようから。

評 大和の秋も漸く闌けてき霧罩めたる山路の風情如何に興多いことであらう。想の開展一七の春日野の草燒と相似て、その風趣も相近く、共に態々打はへての歡賞ではないが、つひこゝに來てそんな心地になつたといふ輕快な雅趣に愛すべきものがある。

秋の歌とてよめる

二六七　さほ山のはゝその色はうすけれど秋はふかくも成にけるかな　坂上これのり

考 作者・清頭「在良文歌合」
二句　清・筋「はゝそのもみち」
三句　是則集「淺けれど」
四句　元・筋「あきのふかくも」
六帖一長月・六帖六はゝそ　同。

考 坂上これのり　？—一五八九　？——延長八　父を定成といひ、彼は五位で加賀介・大內記・清水寺別當などに任ぜられ、又一時大和の國にも在任してゐた。秀咏多く本集以後の多くの勅撰集に採られて居る。家集を坂上是則集といふ。（群二四八、九、五九一—五九三　歌仙歌集第五卷　續國四　一——四四三）

評 佐保山の柞の色はさう濃くはないが、併しこの分ではもう秋は大分と深くなつた趣が見えるわい。

評 柞は色づいた極點がこんなもので、決して眞紅にもえわたる木ではないから、黃落も近くなつて秋色の深きを想はせるものがあるといふ意で、作者のねらひは單に「色は薄いが秋は深い」といふ言語のかけあひにあると想ふから、それなら大した詩境でもないが、家集の「色は淺いが秋は深い」といふ方が稍ましであらう。「秋早くも闌けぬ」と時の過ぐるを惜しんだものだとの評もあるが、一首讀み下してはさうした餘情も味はれない。唯色と秋との淺深の對照だけに興がつたとしか受けとれない。

人のせんざいに菊にむすびつけてうゑける歌

二六八　うゑしうゑば秋なき時やさかざらん花こそちらめねさへかれめや　在原なりひらの朝臣

考 詞書　元「人の家の前栽○菊に結びつけて植ゑける」
相「……菊に結びつけ……」

初句　眞名本伊勢物語「移しうゑば」
　　業平集「うつしうへば」
　　群書類從本業平集「うゑしうへば」
　　密勘「うゑしへば」
二句　嘉「秋なき時ぞ」
　　大和物語百五十八段在中將に后宮より菊召しければ奉りけるついでに、
　　（歌詞　此に同じ）
　と書いつけて奉りける。
　　伊勢物語五十段　昔、男、人の前栽に菊うゑけるに
　　（歌詞　此に同じ）
　　六帖六きく　同。

考　菊。和漢三才圖會には仁德天皇第七十三年に百濟の國から青黄赤白黒各種の菊が渡つて來た。（黒菊とは後世所謂紺菊のことであらう）とあるが、どうも不確かだ。又續古今集賀の部には

　　九月ばかり菊の花を　　聖武天皇

「百しきにうつろひわたる菊の花にほひぞまさる萬葉の秋

とあるが、一首の風調は更に奈良の朝の咏でないことは伴信友が比古婆衣に論じた通りである。で今日の所この花は大體奈良朝末に支那から將來したものであらうといふことに考證されてゐる。信憑すべき文献に徴したものとしては類聚國史第七十五歳時部六旬宴に

　　桓武天皇延暦十六年十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰
　　已乃已呂乃（このごろのしぐれのあめに）　志具禮乃阿米爾（しぐれのあめに）　菊乃波奈（きくのはな）　知利曾之奴倍岐（ちりぞしぬべき）　阿多羅蘇乃香乎（あたらそのかを）

とあるもので、これはもとは日本後紀に掲載されたものなのだが、現存六國史ではこの時の記事が缺本になつてゐるから、先づはこの類聚國史の文が早いものであらう。それ以後は菊花のことはざらに出て居るが、觀賞の普及しない間は名も不定で、からよもぎ・かはらおはぎ・はぎ・くく・などいつたが、本集採歌の頃からは漢字の音をさながらにキクといふことになつた。思ふに「からよもぎ」は「唐蓬」で唐から來た蓬のやうな葉の草といふ稱呼であらう。それは丁度、近頃西洋の草花が輸入されつゝあるのがその葉や花の恰好からダーリヤを天竺葵、スキートピーを甘豌豆と呼んだのと同じ思ひつきである。尤も「野菊」は我邦にも早く自然生としてあつたもので、唯この觀賞用として栽培する菊は支那から渡來したといふのである。然るに宋劉蒙が菊譜には「新羅一名玉梅、一名倭菊」とあつてこれは我國から傳來した白菊をいふとあるのは、所謂逆輸入の一例であらうか。とにかく菊花が渡來したのは奈良の末で詩歌の材となつたのは王朝に入つてからである。後水尾天皇の

　　ならの葉のえらびにもれし菊の花のこれる梅のうらみやはある

と御咏みになつたのは「楚辭に入らないとて梅よ怨むに當らぬぞ、我が萬葉集に一首も歌はれなかつた菊もある」との意で、又六帖に紀貫之の歌

　　古郷をわかれて咲ける菊の花たひらかにこそ匂ふべらなれ

とあるのは古郷寧樂を去つてたひらかに平安の京に咲き匂ふやうだといつたもので、以上の二首は菊花栽培史觀を得るよすがともなるものだ。

菊が一たび都人士觀賞の對象となつてからといふものは、すばらしい勢でもてはやされたものと見えて經國集以下の詩賦にも見え九月九日重陽の宴や十月五日殘菊の宴が宮中の行事に立てられ本集以後歌集秋の部景物の大立物となり、菊合といふ當時にあつては可なり大規模の雅會も催され出した。

尤も當時の菊花栽培法は今日のやうに進んだものではなく、一株に幾つも〳〵の小花を咲かせてそれを悦ぶこと後世所謂一千なり菊」のやうな趣で、一輪咲に盆大の豊麗を誇るのはずつと後世のことであるといふ。で、當時の菊の歌を讀むものはこれを念頭にお

いてかゝらないと、飛んだ勘違ひをすることがある。(余は一向この種の方面の知識はなく、又趣味はあつても享樂するだけの餘裕を有たぬ者だが、同僚先輩知人には隨分園藝の大家があつて前任現任共に菊について色々の話を聽く機會を得たが、今日では懸崖を始め、我一と工夫をこらして約二百種の分派を生じ　變り種の凝つたものも段々出來るやうである。が、猶往時の干なり菊式の栽培法もあるものと見えて大正十四年十月一日發行の國際寫眞畫報を見ると、新宿御苑に咲いたのが二株立派に撮影せられてあつて一つは一株に二百五十今一つは八百三十も花がついて居た)王朝時代は多く白菊をめでて、霜にたとへ、蘆鶴にたとへ又支那の傳說をとり容れて仙人によそへ、健康と壽をよせ、花の容よりも殊にその香が多く歌つた。支那でこの花の愛好者を以て聞えたのは陶淵明で後來周茂叔が「菊花は花の隱逸なるもの也」と評したのもこの淵明などを聯想したものと想ふ。さうした傳說の趣味を離れて菊を見ると　これは實にその色も容も香も姿態も我が庭園の美觀をそふるにふさはしいもので、春より以來の百花千花の散りつくした後を受けて眞に衆葩の殿將たるの觀があり、秋風蕭荒涼たるの時「此花なかつせば」の感は吾人共に一樣であらうと想ふ。(因みに西洋で所謂クリサンセマムは我邦の菊に比べてその範圍がすつと廣く殆ど菊花植物の凡てにわたつてゐるかの觀がある。で日本の菊の歌を譯するのに無條件にクリサンセマムと譯したものは、我國歌人の情調を如實に彼國の人に傳へることにならないと思ふ)(この稿執筆の後、昭和四年五月一日から數回に亘つて東京朝日に連載せられた丹羽鼎三氏の「日本菊の起原」は有益な論文だと思ふ。氏は菊花の渡來を天平勝寶(七四五――七五六)頃と推定して居られる。尙委しくは右寄稿について見られたい)

うゑしうゑば　「し」は强調の助辭で併列の「に」と同じである。「ふりにふる」「てりにてる」「燃えに燃ゆ」などと同じく　「植ゑに植ゆ」で植ゑることの念入なのをいふ。先づ充分に床を割り、適宜の深さに掘り、根毛が直ぐにも土中の養分を吸收し得るやうに土を柔らげ且つこまかくしてそこで、始めて植ゑつけて又上から覆う土も十分鄭寧にあしらつて更に凭れ木をかつて水をかけて、霜よけをつくつてとり外しを便利にして目なたにも出し得るやうにするなど菊の移植については、可なり細心な注意が入ちう。で「念に念を入れて植ゑておきましたからには」といふのである。それを「移植者」などいつてはたゞ「移植したからには」となつて「何だか枯れようもしれぬ」位のことしか句が續けなくなる。又「植ゑし上は」といふと一植ゑた以上は」といふので、調が近代的で且つ俗

語に近い。こゝのまゝでよろしい。秋なき時や咲かざらむ　今後秋のない年が來たならばその時には或は咲かないこともありませうこれは四五句を强く出す豫備である。花こそ散らめ　苟くもさもない以上は、花こそは秋の暮れになつたら散りもしませうが、菊はうつろふことはあつても散るものではない。といつたり、いや菊だつて幾らか散ることがあるといつて漢詩の句を引いたりした註もあるが、こゝはむづかしくいはないで唯他の花と等しなみに「散らめ」といつたもので散るのもあらうし凋み落ちるのもあらうし、それは作意には大した關係はないことだ。

根さへ枯れめや。　根まで枯れることがありませうか、否決してそんなことはありませぬ。

評釋　かうして用意周到に植ゑておきましたならば、此後「秋」といふもののない年が來たなら或は咲かないことがあるかも知れませぬが、苟くも秋ある以上は花そのものは一年切りのもので散りもしませうが、根まで枯れるやうなことがありませうか、否決してそんな氣遣はありません。(しかるに年として秋の來ない年はないのでありますから隨てこの花は此後幾久しくあなたのお庭に咲き榮えることでありませう)

評釋　花を讓るについてその花の前途を祝福し併せてそのあるじに挨拶したもので、餘情は可なりに迂餘して居るに拘らず　うまく卷きつけた孚環のやうに快くほぐれて行くところにこの歌の妙味がある。植ゑられる人にとつてはそれが一日も早く根ざしを固めて我庭の花となりきつてほしいもので

今植ゑた竹からも吹く嵐かな

といつた風の樂しみにひたりたいのである。その意を汲んで大丈夫つきませう。イヤ今年は愚か(宿根草のこととて)かうきへしておけば秋毎に見事な花を咲かせませうといふ。辭令としても巧みであり自分の厚意と趣味とを素直に相手に受け容れさせる歌ひ方がしてある。

寛平御時きくの花をよませ給ふける　としゆきの朝臣

二六九　久かたの雲の上にてみる菊はあまつほしとぞあやまたれぬる

この歌はまだ殿上ゆるされざる時にめしあげられてつかうまつるとなむ　○これ三本共無

考　位置　元・筋・相　「此次の歌と順序顛倒」

詞書　敏行集「菊の花を詠ませ給へるに」

結句　古典本「誤またれけ[イ]ぬる」

左註　清「……めしあげられて……たりけるなり」元「此歌はまだうへゆるされざりける時、めしあげられてつかまつりけるとなむ」

六帖六きく・世六　同。

補　久かたの　こゝでは「雲」の枕詞　雲の上「宮中を」『大空の雲の上』にかけていつたもの。宮城のことを、那で天にたとへて、九天・九重天・雲上・青雲などいふところから、それをとつて國語でも、こゝのへ、雲の上、あまつみやなどいふ。あまつほし　天つ星　大空の星　あやまたれぬる　見まがふばかりであるよ。「ぬる　よりは「ける」の方が咏歎の表し方としては優れてゐる。「ぬる」は單に過去完了時を示すだけである。

講　（今日この立派な宮中の菊を拜觀すると）雲の上といふ處がらとて咲いた菊までもこのよのものならずしてみそらに冴えた星かとばかり見まがはれまする。

評　尊くも美しいこの菊花を拜して光榮の悦喜と感謝の誠心を捧げた餘情がある。　寛平朝廷に菊花をめでさせられたことは二七二以下の菊合の歌によつても察せらるゝ。そしてその菊は星に見えるといふのだから色は白で、數株よく萬朶の芳白をならべてゐたものであらう。この種の着想の早いものは新撰萬葉下

大虚をとりかへすともきかなくに星かと見ゆる秋の菊かな

であらうが、これは普通の庭苑の菊であるのに上の句の出かたが一層御大層に出來てゐるから、少し誇張し過ぎた氣味がある。又この歌の後繼とも見るべきは六帖にある藤原兼輔の

けふひきて雲ゐにうつす菊の花あまつ星とやあすよりは見む

は今まのあたり見ての感じでないから弱い。この三首の中ではこゝのものが詞のつゞけ柄立意構想凡て妥當で優れて居る。左註は誤である。强ひてこの歌に値打つけようとて假構した後人のさがしらであらう。それは一六九の作者敏行の閲歴に徴してみると直ぐわかることである。

これさだのみこの家の歌合のうた　きのとものり

二七〇　露ながら折りてかざさん菊の花おいせぬ秋の久しかるべく

考　位置　元・筋・相　此前の歌と順序顛倒

詞書　友則集「惟貞のみこの歌合に」

作者　元「きのともひら」

六帖四かざし・新撰　同。

補　露ながら　露のついたまゝ　かざさん　上代からある風俗に「かざし」といつて時の花の折枝を頭に挿して飾りにすること　挿頭、髮差など書く。後のかんざし(簪)の原形とも謂ふべきもの、衣冠の制がそなはつてからは冠の巾子のもとに挿むのが普通であつた。王朝童舞の繪などによく見る。おいせぬ秋　老いぬ秋つまりさかりの齡の秋のことだが、この菊の露の效果が不老長壽であることをも歌ひ込めたいひ方である。又「老いぬ」といふにサ變一活を挿んで「老いせぬ」とすることは意を强めるためで、盡きせぬ朽ちせぬ、などと同じいひ方である。

講　この菊の花をば露のおいたまゝにかざしにしよう菊の露は長壽延年の藥ときいてゐるから、いつ〳〵までも老い

すにこのめでたい秋色を幾久しくめで樂しむために。

評　四句「老いせぬ秋」は「まだふけぬ初仲秋」と、とつてあくまで秋景色をめでようとした方が純叙景詩として面白いとも思ふが、併し一首の中心は菊の露が不老長壽によせのあることを歌はうといふにあるのだから「老いせぬ」は矢張「我が」と上におく、さうかといつて「老いせぬ年」とか「老いぬ齢」とかいはないで「秋」としたのは菊が秋の花であるからといふのみならず菊故に秋を愛好する心持が仄見えて居ると想ふから、結局上譯のやうなのが妥當であらう。菊の露のことは支那の傳説から來たもので、

南陽郡　に甘谷園といふがあつて溪流清冽兩溪凡て菊、下流三十戸棲み、人々常にその下流を汲んで飲むと、上壽は百二三十中壽は百餘歳七十八十はこれを夭とす

と様にいはれてある。（風俗通・荆州記・太平寰宇記等書物によつて多少の異同がある）こゝの歌はさうした傳説をふまへたものである。後年謡曲の枕慈童（觀世流では菊慈童）もこの傳説と今一つ彭祖といふ、七百餘歳まで長命した神仙とを融合して脚色したものなり、太平記俊朝の東下りに菊川の驛で、昔承久の役に光親の卿この庭で斬られた時

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡　今東海道菊河　宿西岸而終命

と書きたりし遠き昔の筆の跡哀れやいとゞ身にしみ云々とある。この詩の作者は宗行卿が本當だが、起承の二句は南陽縣の傳説をふまへたものである。

で右のやうに傳説をとり容れた着想は簡單な一語一句で、非常に豐富な内容を歌ひ込む便利はあるが、あまりこれに偏すると、肝腎の花そのものゝ眞の美を沒却する憂がある。この歌などもさうで、そんな傳説は抜きにしても芳麗玉を欺く萬朶の菊が朝露に濡れて艶めいてゐる姿態は見るから齡延ぶる心地するものなのに、さうした趣はてんでいはないで、固いカチ〳〵になつた乾菓子のやうな傳説を唯一のねらひとして高潮したのが、今日から見ては少し物足りない。

（但し當時にあつてはこのことは確かに歌人の一技巧として衆人の賞讃を得たことであつた）

寛平御時のきさいの宮の歌合のうた

二七一　うゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはんとや見し　大江千里

考　詞書・作者　元「おなじ御時に　后宮の歌合に　○○千里」

四、五句　新萬下「うつろふ秋は哀れとぞ見る」

寛平歌合一二右・六帖六きく　同。

釋　うゑし時　菊をうゑた時には　菊は根分けや芽挿や葉挿によつて株を殖すものでその時期は土地により繁殖法によつて一定しないが、秋咲の菊ならば遲くも五六月頃でなくてはならぬ。まちどほ　待遠しい。開花遲しとぢれつたく思ふ。うつろふ　こゝでは枯れしぼむ　あはんとや見し　遇はうと思つたであらうか、かけても思はなかつたことである。「や」は疑問の倒置、「見し」は目で見たといふよりは心に思つたこと。

講　この菊を植ゑた時には花の咲くのはいつのことかと待ち遠しく思つたもので、あの頃はその菊が（つぼんで開いて褪めて）萎んでしまふ秋に遇はうなどと思つたことであらうか……（のにそれに今は早やあの様に枯れ方になつたなあ）

評　菊の半歳に亘る生命を見つむると共に自己の生命をも見つめ、それを回顧的に融合して節物風光の推移の迅速なるに今更の如く喫驚したのが、この一首の歌境である。「花に植ゑられ青葉に育ち、雨露日光の惠みも豐に、千草八千草かれはてた荒涼の秋を我世と咲き出た時こそは菊にとつては青壯年の佳期、やがて襲來する夜な〳〵の露に朝な〳〵の霜に紅黄やゝに褪め銀瓣いつか赤らみかけた時は即ち菊の老年期晩年期とも謂ふべく、今は正しくその時期なのである。殘るは冬枯に入つての「死」あるのみ、といつた有様これは「菊」そのものの一代記である。處で此を栽培した作

者にも半歳の内面生活史があつて之を植ゑた時はいつだつたつけ？　四月の末のたしか下の亥の日であつたなあ、いつになく晴々とした氣持で土いぢりをしてゐると、そこへひよつこり○○氏がやつて來て、「イヤこれがついたら見物だめつたとつくことではない」などひやかしたものだつたが、……と次々にそれ以來の自分と菊とをめぐる生のフィルムが展開されて、そこで感慨は一入となる。そして最後には秋田かる田づくりが田植當時をかへりみて「昨日こそ早苗とりしか」の感ある如く生活の振子の一端秋の暮から他の一端春夏の始めを見て「ナーンと月日のたつのは早いもんだ」とためいきをつくといつた處であらう。

おなじ御時にせられける菊合にすばまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりける歌

ふきあげのはまのかたに菊をうゑたりけるをよめる　すがはらの朝臣

二七二　秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

考　詞書　元　ひどく違つてゐて對照的にあげては却て煩はしいからそのまゝかあげておく、

「おなじ御時、きくあはせに、洲濱にふきあげのはまをつくりて、菊の花を植ゑたりけるに、添へたりける歌」

頓「最後のところ「きく○うゑたりけるをよめる」として「を」の字なし」

三「……ふきあげのはまのかたに……」

初句　清頭「件歌合には五文字きのくにの云々」

四句　清「はなかあらぬか」

寛平歌合（群二二六、八、一二〇二―一二〇三）左八・六帖六きく・新撰　同。

考　菊合　左右をわけて趣向をこらした菊を出品して、それに歌をつけその歌の優劣を爭ふ雅遊で　この時の歌は今群書類從に收まつてゐる。すばま　洲濱、今日所謂島嶼といつて純日本式婚禮の飾りにする蓬萊山の鶴と龜、高砂の蔚と姥などしつらふあれの前身ともいふべきもの、自然の山水・草木・鳥獸を縮小し物の嶼に雛型のやうに巧緻につくつたもの、日本趣味の一つとして面白い趣向だと思ふ。以上はこの菊合の總序で以下三首にもかゝつてゐる詞書で以下が菅公の歌のみの詞書であるといふのが從前の通說で、前記元永本の詞書はこの二つをごつちやにして專ら菅公のこの歌のみの詞書としたものである　愚考この詞書は二七五の大澤の池の菊とのみ共通すべきもので、二七三、二七四は同場合の番外と　て別によんだもので十番の中には入らない。この邊順序が出入してゐる。この次に大澤の池を咏んで二七三、二七四は同じ折の番外であることをつけ加へて出すべきものだと思ふ。吹上　紀州和歌山市の西南から雑賀村にかけての海濱一帶の總稱で、月に千鳥に白雪に、古來有名な歌枕であり、菊にも名高い。小說「うつぼ」にはこゝに一世の風流公子「涼」がゐて都よりのまらうどを待ちつけて色々とみやびをつくしてもてなした記事がある。後年太平記大塔宮熊野落の道行にも「和歌吹上をよそに見て、月に瑩ける玉津島云々」とある。今では古歌古文に見える程立派ではないが、併し相當風光明媚な砂濱であるとのことだ。一體この「吹上」といふのは海そひの渚で、風波に吹きよせられ、打ちよせられた眞砂が堆積して丘阜を爲したものをいふ普通名詞であつたらうが、いつしか、高砂は播磨にとられ、有磯海は越中にとられといふ格で、この吹上は紀州の專有に歸したものであらう。かた　型とも畵とも宛てるが、こゝは洲濱のことだから型の意である。秋風のは「吹上」といはんが爲めの序詞的の句であるが、よく見るとこの秋風は一首凡てを統治して吹上の吹にかゝり、花を波のやうにも搖かし、波を花のやうにも活躍させて居る。吹上は秋風が「吹く」と地名の「吹上」との秀句　あらぬか　漢文ならば花歟非歟といふに當る、それとも花でないのか、すがはらの朝臣　菅原道眞のこと。

考　前と同じ寛平の御代御催しになつた菊合に洲濱を造つて菊の花を植ゑたのにくはへた歌。

左方第八番吹上の濱の型に菊を植ゑたのをよんだもの、

「秋風が吹いて、風の吹くといふ名の吹上に立つて居る白菊は實際菊の花なのか、ヒヨツとそれは花でないのであらう

かとも思はれ、浪が寄せたのかとも訝かられる。

評　上の句に於ては前述べた通り、輕く「秋風の」といつておいて、これを巧に運用して一首の隅隈々までも働かせた點が褒められて居る。秋風颯々海を吹いては濱に白波の花を咲かせ、陸を吹いては渚に薫香馥郁の波を寄せる。その波も唯一秋風の吹き通うて生まれた荒魂和魂とも謂ふべき感がある。又下の句では「花かあらぬか浪のよするか」の三かの脚韻が少なからず偕調を助け、感情にスキートな搖動を與へて居る。契沖はこの句法と等類として伊勢物語の

君やこし我やゆきけむおもほえず夢かうつゝかねてかさめてか

はるゝ夜の星か河邊の螢かもわが住かたのあまのたく火か

などを擧げて居るが、仔細に見るとそれとは一段進んだ修辭である。「か」の上にあげる事物をその都度變へて別々の疑問形で出すのと、「花か、それともさうでないのか」と同じことを裏表に返して左勝手の花活を今一度右勝手に眺めるやうなひまはしは前の勢語の歌には見出されないから、同一系統の技巧ではあるが、勢語よりは一段進んで居る。

（これが今一歩進んだものは清水濱臣の「砧を聞く」の名文に「そもこの音のかなしきか、住む里のわびしきか、打つかりのさびしきか　皆あらず」といつたものである）こゝの歌に似たものが素性法師集にあつて

秋風の吹上にたてる白菊は花の咲けるか波のよするか

とある。結局の意味はこゝのと變りはないが、かう淺くあらはにいつてしまつては何の綾もなくなる。前のと對照すれば正しく韻文と散文の區別が察知せられよう。（素性は恐らくこんな拙い歌は咏まなかつたらう）

さて以上がこの一首の特美であると想ふが、尙考へて見ると菊合といふものはそこへ出品した洲濱の趣向や出來不出來とそれにつけた和歌の優劣と、この二つが聯繫して勝敗を決定せられるべきものであるから、此に咏出する作歌の用意としては恰かも蕭讃の如く、屏風繪の歌の如く出品する洲濱が引き立つやうに立意しなければならない。そこで當時の文化程度から奏するに、この左方八番の出品は洲濱そのものよりはこの歌の方が遙に優つてその爲めに滿座の喝采を博したことゝ想ふ。

尙この日左方の洲濱は

一、山城皆瀨　二、嵯峨大澤　三、紫野　四、大井戸難瀨　五、攝津田簑島

六、奈良樟河　七、和泉吹居　八、紀伊吹上濱　九、紀伊網代濱　一〇、逢坂關

そしてその出陳振は殿上童を活人畫のやうに据ゑて各風流の意匠をこらしたが、右方は餘り凝りすぎて稍劣り氣味であつたとある。（委しくは原本について見られたい。自分も嘗て國文學概說にあらまし解說した）

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　（清ひける）　素性法師

二七三　ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけむ

詞書　元「仙宮に菊み分けて人の入りたりけるを、繪にかけるを見て」

素性集「仙人の（潤ハチヨ）に菊わけて入りたる所繪に書きたるに」

四句　清「いつかちとせを」

素性集「如何でか我は」　六帖六きく「いかで千年を」

結句　素性集「千代を經ぬらん」

新撰　同。

評　仙宮「仙」は山と人との會意文字で「山びと」ともいふ。支那傳說の想像的な超人間で、不老不死・飛行自在・神通力などをその特屬性として居る。二七〇に說いた南陽鄜縣や評に揭げた晉王質の故事などに依據して描いた畫と想はれる。かたこゝは畫の

こと（評参照）初二句は花の雫に袖ぬれて、それを乾かす露のまに、といふ程の心。「ぬれて」何に濡れるかといふに二三句は「菊の露」とあるから「花の雫に」ぬれてととる。何が濡れるか山路を辿り菊を分けて行くといふのだから衣物――殊に袖袂と見て風情がある。（裾や身としては乾かすといふに寄せがうすい）露のまの露は實名詞の「露」と極めて短時間の「露の間」との秀句「露のまに」の「に」は慣言助辭とも見られるが、之を一個の限定助辭として「露の間なるにもかゝはらず」と前件をもどく「に」と見る方趣が深い。いつか何時の間に……であらうと強く疑ひ歎いたいひ方、千年多くの年、三句の「露のま」の對照

評 菊咲く山路を分けて仙宮に入る人の繪をよんだもの、花の雫に袖ぬれて、それを乾かすその露といふ露ほどの間なのに、いつの間に自分は人壽の千年も經過したことであらうか。

評 作者自ら畫中の人物となりすまして、その驚きを歌つたのも面白いし、上の句と下の句とに

仙人　と　俗人　　雅　と　俗
露のま　と　千年　　壽　と　夭
超越界　と　非超越界

を對照させたのもよし、殊に古來賞美の的となつて居るのは語句の聯接極めて緊密にして寸分の隙なく一語の過不足なく一句の順序もこの形を外しては詩が破れるといわた風の點にある。（後成の古來風體抄や景樹の正義には殆ど最大級の評語で激賞してある）尚且加ふるに、支那の古事をふまへたことも一特徴である。人界の千年は即ち仙宮の一瞬といふ對照は早く水經注に見えてこれは王質が童子の彈琴に聽きとれてゐる間に、手にせる斧の柯が朽ちたといふのであるが、もつと一般的になつてゐるのは任昉が述異記による王質のことである。「晉の木こりの王質が石室山に木をとりに行つて偶々仙人の碁を圍んでゐるのを見て之を珍らしみ、傍に見てゐる中に段々飢を覺えた。すると仙人は『これはわが食糧だが分けよう』とて何だか棗の實のやうなものをくれた。質受けて之を喰ふに、味甘美不思議と空腹を忘れることが出來た……とやがて仙人がもうお前さんも歸つてはどうか」といふに、ハツとして手許を見ると、これはいかなこと、商賣道具の斧の柯が朽ちてしまつてをつた。あたふた歸つて見ると、同時代の人は皆物故して世の中がころりと變つてしまつた。」といふ。（我邦には浦島太郎あり、アーヴイングのスケチブクにはリツプバンビンクルあり、よほどよく似た傳說である）本集九九一もこの故事に則つて居るし、つひ二三年前よく新聞廣告に見た「爛柯」といふ雜誌も內容は見ないが多分はこの故事から「烏鷺々々趣味に耽溺しようではないか――」といふ題意で碁の機關雜誌であつたらう。

最後にこの歌の詞書稍曖昧な爲めに從來の諸註之をこの前と同樣、洲濱につけた歌としたり、若くは默々に附して解說を省いてあるやうだが、これは、右歌合の原文を見てもわかる通り十番の中には入つてゐないで後に番外的に出てゐる歌で、この歌の前後は到底洲濱にはなし得べくもあらぬものばかりである點から謂つても、元永本の詞書に徵しても尙家集の詞書に徵しても「繪」を「かた」といつたもので、正しく畫贊の歌と見るべきであらう。

菊の花のもとに（清て清ナシ）人の（清お）人まてるかたを（清みて）よめる　　とものり

二二四　花見つゝ人まつ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

考 詞書・作者　友則集「寬平御時繪に菊の花のもとに人立てる書きたるを見て」

三「作者は前と同樣だが傍注にともの り三本同とある」

元「菊の花のもとにて〇〇人をまちたるかたを〇〇〇　紀友則」

寬平菊合最終の歌・六帖五人をまつ　同」

評 花見つゝ　その花が菊であり、その菊が白菊であることは詞書と三句とに讓つたもの、花を見いゝ、人まつ時は「は」は區

別の助辭、平素ならば花と袖とを見あやまつべくもあられど、特に云々の時は……といふ。白妙の袖の枕詞だがこゝは袖を修飾する實形容詞句としておいたもの、まつしろの　袖かとのみぞ云々　待人の袖かとばかり見誤られることよ。

評　菊の花のそばに立つて人を待つてゐるところを書いた繪を見て、その待つてゐる人の心になつてよんだもの、白菊の花を見い〳〵人を待つてゐると、（餘の時はさうでもないが、思ひなしでその白菊をば待人の）眞白の袖かとばかり見まちがへられることよ。

評　熱心な豫期から生ずる錯覺としてそのものなきにありと感ずることは、ランニングのスタートの號報、プラットへ出迎に立つた時の車窓などにまゝあることだから實感味が無いでもないが、秋の最中に白妙の袖は色合が妙でない。では「白妙の」は單に「袖」の枕詞ととつてはどうか、それにしても「白」といふ匂ひはどうしても菊につきまとふから、色彩の不調和で一首を打破すことになる。處で或説には、「これは陶潛（淵明）の故事をとつたものだ。續晉陽秋や蒙求の中に陶潛が九月九日に酒が無いので東籬の菊を摘んで巵に盈たしてゐると、そこへ白衣の使がやつて來て太守王弘よりといつて酒を贈つて來たといふそれによつた作意だ」とある。成程當時はかうした支那の故事傳説を悦んだ時だからあり得べき臆測だが、支那は黄を正色として貴び（例黄龍の旗）菊も黄菊を第一とし、淵明作るところも黄菊が主であつたといふから白妙の菊では色が違ふ。それに淵明は豫期しない贈物を得たといふのであつて、その贈物を豫期して心に待ちまち菊を摘んだのでもない。連句でよくいふ「俤取り」といつた位の取りやうはしたかも知れぬが、全く此によつて作つたとは受取れない。朗咏雜に白樂天の句「王弘使立二晩花前一」とあつて當時愛誦せられて居たことは事實だが、同じ朗咏の秋に三善清行が「菊散二一叢金一」と題して「陶家兒子不二垂堂一」といつたのは、明に淵明が黄菊を愛したことを示して居る。要するに此歌は左程秀咏ではない

おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる

二七五　ひともとゝ思ひし花をおほさはの池のそこにも誰かうゑけん

考　詞書　友則集「大澤の池のかたを作りて菊を植ゑたるに」

元「よめる」の三字なし。

二句　清・嘉・筋・友則集・六帖六きく・顯「思ひしきくを」

四句　元・筋「池のそこには」友則集「池のそこまで」

寛平歌合左二番・新撰　同。

雜　おほさはの池　後世「廣澤の池」といふ。山城國葛野郡嵯峨村大字上嵯峨にある。在昔寛朝僧正の開鑿する所、周四十二町中に菊島といふがあつて當年菊の名勝の記念となつて居る。後世では專ら月の名所として聞えて居る。平家物語「月見の事」に面々は伏見・廣澤・須磨・明石と月の一地を追うてあくがれ出た記事があるし、近世歌人望月長好は、非常にこゝを愛好し、遂に居をこゝに卜しその姓を廣澤と改めたし、その著に廣澤輯藻といふのもある。ひともと　實數詞の一本ととらず　ホンの少しばかりといふ意、花をこゝを「菊を」としたのは拙い。菊といふことは詞書でもわかるし、大澤の池からでもわかる筈だ。おほさはの　古典木には（多）と入れて上の「おほ」を秀句に見たのもあることを示して居る。それが可い。この頃の好み、洒落の機會さへあつたら、咏み込まうといふのだから上の「一本」に對してはおほ「大（多）」もさは「澤」も澤山といふ語と地名とをかけて對照させたものだと思ふ。池のそこにも「にも」は島や岸には勿論植はつて居るがといふ意、誰かうゑけん　誰が植えたことであらう。

評　ホンの一本だけをと思つた菊の花だのに（意外にも數多くこの）大澤の池の底にも咲いて見えるは、さては誰が植ゑたものであらう。（とばかり見えるこの風情は實に優に覺える）

評　餘り盛心しない。下の句は水底の菊を興じて暗に清潭聊かの濁りなき池水を見せた處は可いにしても、要するに

それが水中の影である事より以上の何物をも咏はれてない。その程度のことなら已に一二四の貫之にもつと動的なのがある。それに「大澤の菊」としての特徴は何も歌はれてない。唯「一もと」と「おほ澤」の秀句的對照が一點題意に觸れてゐるだけである。而かもその爲め本物の岸に咲いたこゝの菊はたつた一本に縮小されてゐるではないか。

世中のはかなき事をおもひける折に菊の花をみてよめる　つらゆき

二七六　秋の菊匂ふかざりはかざしてん花よりさきとしらぬわが身を

考　詞書　清「……よめる」（ヨメリケル）　三「……よみける」（める三本同）

元「世中○はかなき事○おもひけるころ○菊の花を見て○○○」

評　はかなき事　たよりないこと、無常迅速のこと、匂ふかざり　美しく映えることを「匂ふ」といふ。「かざり」はこゝはかざす時を限定したもの、いつまでかざすか「美しく咲きにほうてゐる間だけはずつとかざさう」花よりさきと　「花より」といふところを語の重複をさけたもの「菊の花よりも先へ死んでしまふかも」知らぬ我身を　知らない我身であるものを。

譯　世の無常を思ひつゞけて居る矢先に菊の花を見てよんだもの。

この秋の菊の美しく咲き匂うてゐる間はずつと折りかざさう。（とかく人生は無常だから）花よりも先きに死ぬかも知らずに居る我が身であるものを（どうせはかない人の世だから命のある中に花の咲いてゐる中に、これをかざして慰めよう）

評　生の倏忽を歎いて、現實の享樂に自らを慰めようといふ想は古今東西に見られる。上は古代のエピキューラス一派から下は現代小曲の「戀せよ乙女」に至るまで如何に多くの現世主義の表れのあることか。唯遺憾なのは作者の無常觀は一時の物思ひであり、作者の菊花愛もその折にふれての氣まぐれである爲めに、一首、愚夫愚婦の愚痴に終つて居る。作者に長明程の體驗思索があり、淵明程の菊花愛があるのならこの一首は深刻な述懐ともならう。

白菊の花をよめる　凡河内みつね

二七七　心あてに折らばや折らんはつ霜のおきまどはせる白菊の花

考　詞書・作者　元「白菊の花を見て○○○　○○○躬恒」

二句　元「をらば　をらむ」

百ノ二九・六帖六きく・新撰・仝冬・世六　同。

譯　心あてに　當て推量に　折らばや折らん　「や」は疑問折るならば折られもしようが。ここは古來種々の誤解がある。一「や」を反語として「折るとしても折られようか、否決して折られはしない」二「ばや」を一語と解して「折りたいものだ、あゝ　是非に折りたいものだ」などはその甚しい例である。はつ霜　嚴密に第一番に置く霜とはとらなくても宜しいが、初雪・初花などと同じく早く置きそめた霜と解く可きである。禮記月令には「季秋之月霜始降」とある。これは支那のことだが近畿地方ならばまあ九月十月の交だから大體一致して居る。おきまどはせる　霜を主語にして「おける」とするところを擬人して霜に心あつて態と白菊のやうに思ひ迷はしてゐるといふ語を連語にした面白い句である。

譯　（敷株白々と咲いてゐるあの）白菊の花は、あて推量で折るならば折れもしようか？（到底たしかには手折られさうもない）初霜がおいて紛らせてゐるので（霜か花かのけぢめがつきかねる）

評　契沖の評が簡結だと思ふ。曰はく

きくの花のはじめてさく時、また霜もはじめて降る物なれば、白き色のおなじく出あひてまぎるゝ故、心あてしてをらんといふなり。きくと霜とまことに見まがふまではなけれど、にたる物は、其似たる物をまどはすことわりにてかくはよめり。

然るに故正岡子規が「五たび歌よみに與ふる書」にこの歌を散々にけなしていふには

心あてに折らばや折らむ……

此躬恒の歌百人一首にあれば誰も口ずさみ候へども一文半文のねうちも無之駄歌に御座候。此歌は嘘の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之候。趣向嘘なれば趣も絲瓜も有之不申、蓋しそれはつまらぬ嘘なるが故につまらぬにて上手なる嘘は面白く候。例へば「鵲のわたせる……」は面白く候。躬恒のは瑣細な事を矢鱈に述べたのみなれば無趣味なれども、家持のは全く無いことを空想で現はして見せたる故面白く被感候云々。

と、此は寫生文を主張した子規としてはいひさうなことだと思ふが、當時の白菊は始めにもいつた通り千なりで霜珍しい朝青い葉の裳も覆ひかぶさるまで白衣した白菊の美を遠望して、霜の白と菊の白との類似に比興を覺えたもので、本集序に梅と雪とをたとへて

梅の花それとも見えず久かたの天ぎる雪のなべてふれゝば

と咏んだのと同型である。それをば初霜はそんなに濃くは置かぬから「おき紛はすさ」は嘘だといふのは寫生の物指で詩的誇張を測らうとする誤解である。更に之を歌境そのものから味はへて見ると、白菊は霜を得ていよ〳〵咲き榮えするもので所謂「霜にほこる」「霜におごる」などいふ詩致は斯して味はへ得るものである。例へば等しく「白」といつても手織木綿の白と、紡績木綿の白と、綿モスと木モスと友禪モスと縮緬とはそれ〳〵その白の趣がちがふであらう。同じ「白い手」といつても女學生の合同體操に見る白魚の行列と、錢湯の長湯連で落合ふお婆さんの干し大根の陳列とは、大分趣がちがふものがあらう。白菊の白は豐麗であり和潤であり、生の豐かみを想はせる白さである。彼女が霜さゆる朝、凋落の秋をすら征服して滿株の白朶馥郁たる有樣は、優美とよりは寧ろ崇高美と評したい。後年元祿七年九月二十八日芭蕉は山海の珍味でもてなした女主人園女をほめて

白菊の目にたてゝ見る塵もなし

といつたが、移してこの歌の讃辭にかへても宜いと思ふ。最後に今一つこの歌の踏襲歌をあげておく、

心あてに折ばや折らむ夕附日さすや小倉の嶺の紅葉（壬二集中）

これさだのみこの家の歌合のうた

二七八　色かはる秋の菊をば一とせにふたゝび匂ふ花とこそみれ　　よみびとしらず

考　詞書　元「惟貞の親王の家の歌合に○○」

結句・新撰・抄イ「花かとぞみる」

六帖六きく　同。

通　色かはる白菊が一旦盛りに咲いて、更にうつろひ方になると葩端紅を潮し日と共に紫ばむ趣も亦美しい所からそれを色かはる」といふ。ふたゝび匂ふ　二度美しく咲きはえる、「ふたたび」は三句の「一とせに」と掛合はせて興をとつたもの。

講　移ろひ方になつて又別趣の美觀を呈した白菊をば、（めではやして）一年に二度咲きはえる（珍らしい）花とサ見めでようぞ。

評　菊花特殊の美觀を歌つたのは宜しいが、二句の「秋の」は活きのないことばだ、お負けに誤解を起して、「春の花が散つた後に菊が色變へて秋咲くので」などとつたものもある。風勝の地に遊んで「夜に入つて夜の眺めも亦一興」ともてはやす心地や、蘇東坡が西湖をめでて、

水光瀲灩晴偏好　暗中模索雨也奇

と謂つた、晴好雨奇の心理とも通ずるし、人でいへば白無垢の花嫁が、色直しに柄の着物に替へて出るといつた風の趣とも似通つて居て着想は宜しいが句調はたるんで居る、唯だ「一とせにふたゝび匂ふ」が一節あるのみである。

仁和寺に菊の花めしける時にうたそへて奉れと仰せられければよみてたてまつりける　平さだぶん

二七九　秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば

考　詞書・作者　元「仁和寺に菊めしけるに添へてたてまつりける歌」　平定文」
宮内省頼阿本「うたそへて」の「うた」の二字なし。
作者　六帖六きく「大江千里」
新撰　同。

釋　仁和寺　山城葛野郡花園村にある眞言宗の巨刹で、光孝天皇仁和四年に建てられたので仁和寺といひ、宇多天皇御出家の後ここに堂を設けて御すまひになつてから又大内山、御室等いふ。後代々法親王の御住持にかゝる門跡となつた。徒然草によくこゝの事が書いてあるが、いかさま今行つて見ると雅好の住んでゐたといふ雙が岡とこの寺とはつひ近い、嘗てあの附近に遊んだ時（境内はゆつくり拜まないでその横を通つたことがあつたが、何でも間口の狹い割に大層奥行の深い寺だと記憶して居る）こゝもその宇多法皇をお指し申したものである。秋をおきて　花の盛りの　秋以外又別に、時　盛りの時、見榮えのする時、又一盛り、時の人、時にあふ、時めく人など、「時」とはそのものの得意順境を意味する。うつろふからに　うつろふやうになるとそれが原因で、つまりうつろひ方になるとはやがて。

譯　仁和寺の宇多法皇が菊の花をおめしになつた時に「歌を添へて献上せよ」と仰せられたから、咏進したのがこれだ。
この菊の花は秋の盛り以外又一さかりあるといふことをしみ〴〵感じました。それは最早移ろひ方になつて又一段と花の色が優つて參りまするので、

評　「我が法皇の御榮え亦斯の如し」と譬喩したものだといふのは、殆ど各註解の一致して居ることだ。
尾崎雅嘉はいふ
きみにも世をお治め遊ばしまして又かやうに佛道をおつとめ遊ばしまするが、恐れながら此菊の花と同じ義かと存じ奉りまする
契沖はいふ
下の心は位に世をよくをさめさせたまひ、御讓位の後引かへて更に佛の道をよくつとめおこなはせ給ふを、秋をおきて時ありと菊によそへ奉りたるなり。
金子氏は云ふ
宇多法皇が、踐位の後も、幼帝を後見て、猶世の中を政ち給へる、大稜威の盛りなるを賀し奉れる、譬喩歌なり。抑も歌そへて
と、下命ありたるは、作者平仲は歌よむと世に知られたる男なればなり。卽ち取あへず、移ろひ方の白菊に、これを添へて奉りけむには、いかに興ぜさせ給ひけむな。この諷託寄興あらずんば、殆ど愚作たらまし。（同氏の昭和版も此と同樣の口語文
と、このやうに樂口一致の評解をもどくのは不遜かも知れぬが、愚考は少し之とちがつてをる。
「つまりこゝの作意は「うつろふ」に献上「位置のうつろひ」をかけたもので、この菊は臣貞文の庭の秋をも飾つたものですけれども斯うして御めしに預りますと、御住居柄とて一段と光彩の加はるものがありまして、これは花にとつて無上の幸福でもあり、私にとりましても此上なき光榮に存する次第であります。」
と、召しに應ずる御挨拶をかけたと見れば決して無稽ではないと思ふ。（次の貫之の菊を他から貰ひ受けた歌と對照して益益この感じが強い）
宇多天皇の御めでたいことは勿論だが、纔かに三河權介風情の貞文の口で御たゝへ申すことは寧ろ畏れ多いことではあるまいか。それとも當時の廟堂はそれ程平民的でいらせられたとあるならばとにかくだが？

それから又季吟は

是は殘菊ときこゆ秋部に入るといへども秋の歌にはかやうには詠すべからず

といつたが、これは殘菊でなく奉獻菊花の歌であることは詞書にある通りで、初句「秋」といつたのは菊は秋を己が時とするので、「一盛り」の代理語としておいたまでである。

人の家なりける菊の花をうつしうゑたりけるをよめる　つらゆき

二八〇　さきそめしやどしかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

考　詞書　元「人の許に菊の花植ゑたりけるを見て」

二句　元筋「やどのかはれば」

六帖六きく　同。

類　さきそめし宿　始めて花の紐といた宿、即ち前の家　色さへにこそ　場處の移つたのは勿論、色までも移ろうた（こゝのは事實凋落をわびた口吻でいふ）

講　餘所の家の菊を貰ひ受けて我庭に移し植ゑたのをよんだ。

始めに咲き初めた宿がサ變ると（場處と共に）色までもコレこの様に移ろうたわい。

評　餘情は「いぶかしいことよ」などとつてもよろしいが、寧ろ謙遜と咨嗟とをまぜて、元の贈り主に花だよりとして贈つたものと見たい。植ゑた當座根ざしがかたまらぬ中に病葉でなくて、素枯れた葉が少しばかり出來たのを「こりや困つた。矢張りあるじがらとでも申しませうか、あなたの處ではあの様に元氣で立派でしたのに、こちらへ植ゑてからはションボリとして一向引立ちませぬわい」といふので、正に前の貞文のと正反對の立意で、歌の排列も面白く工夫せられてある。尚詞書元永本のでは不都合である。

題しらず　よみ人しらず

二八一　さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへみよとてらす月影

考　作者　六帖六紅葉「ならのみかどの御歌」

三句　新撰「ちりぬべし」　六帖六「散りぬべき」

家持集　同。

類　さほ山　二六五に説く、はゝそ　二六六に説く、ちりぬべみ　散りぬべくあるが故にの古い句形、簡結で面白い言ひ方である。散つてしまひさうにあるもんだから　よるさへみよと　晝はもとより夜までも見よと、夜を晝についで見よと　てらす月影　月影が照りわたつてゐる。

講　佐保山の柞の紅葉が散つてしまひさうなので、夜を日についで見よとて、アレあの様に月が（さやかに）照つてゐる。

評　一首の特徴は、月影の美的解釋に形を托して佐保山紅葉の美を強調しようといふにある。蟹は甲に似せて穴を掘り人は自己を標準として物事を推測する。一片の飴の棒も孝子は見て以て「病母の口體を養はう」と思ひ、盜跖は之を敷居に延べて忍びの軋り止めに利用しようと思ふ。「半水を呑めば乳となり、蛇水を呑めば毒となる」抑々天上一痕の秋月何の爲めにか皓々たる。讀書子ならば「夜の燈火に代へよ」と照つて居ると想はうし、戀の兒ならば、今宵逢瀬の道あかしともとらうし、田吾作ならば提灯なしで夜の稻掛に宜いとも云はうし、商人ならば「此分では明日の天氣も大丈夫米の相場はマァ居坐り」と高をくくらうといふもんだ。然るに作者はこの月を解釋して、「アレは佐保山の柞の紅

葉を夜も見よ、それにはあかりがなくては不自由だらうから、ドリヤ照らしてやらうぞ」と輝いて居ると見た。以て如何に佐保山を否な佐保山の柞の紅葉を愛惜しつゝある人であるかが知られよう。雅遊夜を以て日に次ぐの想は已に、李太白の「春夜宴桃李園序」に「夫天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客而浮世若レ夢。古人秉レ燭以夜遊。良有レ以哉」といつて居る。この「燭を秉つて夜遊ぶ」底の風流心ある人にして始めて思ひよる着想が、月の大提灯となつたわけで一首朗咏すればそゞろに天平朝廷の縉紳閑雅の面影が浮動する。本集讀人しらず時代の作品中、貴重なる一收獲と謂ふべきだ。類咏としては早く萬葉十秋相聞二二二五に

わがせこがかざしの萩に置露をさやかに見よと月はてるらし

本集二八五にも同趣向があり、六帖一貫之の

ちる紅葉よるもみゝとや月影のこずゑ殘らずてりわたるらん

後撰七秋下四二八題しらず、よみ人しらずの

照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉をよるも見よとか

山家集に

或人世をすてて北山寺にこもりゐたりときゝて尋ねてまかりたりけるに月あかゝりければ

世をすてゝ谷底にすむ人みよとみねの木の間をいづる月影

此等一々品隲の繁を避けるが、要するに、この種の歌ではこれが一等優れて居る。

宮づかへひさしうつかうまつらで山里にこもり侍ける。によめる　藤ノ原關雄

二八二　おく山のいはがきもみぢ散ぬべしてるひの光見る時なくて

考　詞書　三「……山家にこもり……」（是三本同）

元「末の句　待りけるとき○○○」

二句　元・傍記・六帖一本・正義「いはかげ紅葉」

三句　元・筋「ちりぬべみ」

五句　元・筋「みるよしなくて」

六帖六照る日　同。

講　藤原關雄　右大臣内麿の孫、從三位眞夏の第五男文章生より出仕して後年從五位下治部少輔兼齋院に叙任せられたが、性林泉を愛し、一時東山に幽栖してゐたので時の人彼を東山進士と呼んだ。（その跡卽ち後世所謂永觀堂卽禪林寺である）けれどもそれは暫らくのことで後に淳和天皇の優渥なる御徴に已むなく出仕、勘解由判官に補せられた。彼歌の外に琴が上手なので天皇は特に箏曲の秘譜を賜はつた。亦書をよくし就中草體に得意で南池院・雲林院などに揮毫した。不幸短命、仁壽三年二月三十九歳を以て逝く。

おく山　日山を端山外山などいふに對して奥山をいふ。當時とても東山はさう大した山の奥ではないからこれは誇張したいひ方である。

いはがきもみぢ　岩垣紅葉岩垣とは人工で石を積んだ壁（石垣）をいふのだが、こゝは天然の巖牆をいふ、そこに生へた紅葉のこと。但しこの二句は一いはかげ　とある方下句との對照に於て優れて居る。そしてこの紅葉は暗に作者自身を譬へたものである。て

るひの光　赫々と照り輝く天日の光、我大君の御惠みを暗喩したもの。

講　（字面）ながらく朝廷への御奉公もせないで山里に籠居してた時によんだ。

奥山の岩蔭に色づいてをるこの紅葉は天日の光に浴することもなく散つてしまふことであらう。

（裏面）公けづとめから身を退いて隱栖する我身はまるで日蔭者の境遇で、たとへばあの岩蔭紅葉の類であらう。即ち天日の惠みに浴する時もなしに日蔭に燃えて日蔭に褪せて、やがて我身の秋の暮と老い衰へ朽ち果てることであらう。

評　關雄の閲歴を見るに、官位昇叙の次第別に甚しい停滯もない上に、朝廷の恩顧も一般人に比べて洵に優渥である。

にも拘らず、この歌の言外一味不遇陸沈の怨嗟を含むものあるは一見不釣合のやうだが、金子氏の評せられる通り決してさうではなからう。何事も門閥が口きく世の中である。北の藤波のいやに蔓つた世の中である、その家ならぬ家の兒はまるで楷子段でもあがるやうに一楷々々眞面目と勤勉とに多年の年功を經て昇つて行く傍を見ると、唯その家の出であるといふことが唯一の理由で、さして功勞のある譯でもないのに一躍一般人の十年十五年分を飛んで昇叙の恩命に得々として居るのを見ては「力なき蛙骨なき蚯蚓」でない以上人間並の氣慨あるの士、之を顰蹙し之を憤慨せないものがあらうか。東山進士、名のみは優にやさしく憂世離れがしてゐるが、果然この種の憤懣は端なくも一株の岩垣紅葉によつて這乎の不平を詩化したものと看るべきであらう。

題しらず　　よみひとしらず

二八三　龍田川紅葉みだれてながるめりわたらば錦中やたえなん

此歌は或人ならのみかどの御歌なりとなん申す

考　作者　元・筋「なら帝御製」

風「ならの御かど聖武天皇御歌」

二三句　六帖五にしき「もみぢ葉落ちて流るなり」

左註　元　なし。

宮内省頓阿本「この歌〇ある人……ならのみかど（文武天皇）……」

相「……おほみうた也と……」

（「ならのみかど」は普通平城天皇を申すのだが、教長・清輔・俊恵法師等は　聖武天皇を申すといつて居る。それなれば又顯昭がその非を指摘して居るがくだ〳〵しいから掬く）

大和物語一四六・今鏡十・新撰　同。

語　龍田川　「吉野龍田の花紅葉」などいつて古來有名な大和名所の一つだが、その地理については說が區々だといふので單行の龍田考辨・龍田名勝志などいふ書もある。が、今日普通には生駒郡北生駒村字俵口に發源し龍田町を過ぎて大和川に注ぐものをいひ、今の龍田町の西端龍田橋（長さ三十餘間）の附近楓樹の古木多く（と謂つても勿論後世のもので、この歌當時のそれとは受けとれない）今も遊觀の人々で秋毎に賑はして居る。（汽車もあり、奈良大軌電鐵もある）紅葉みだれて云々　紅葉がバラ〳〵と散つて、亂れて流れて居る。「めり」は「と見える」といふのだが、こゝでは唯語調を柔らげただけで、紅葉の流下は想像するまでもなく、作者現前の景色である。わたらば　渡つたならば、橋によらずに徒歩わたりをするか馬に乘つて渡るかするなら　錦「紅葉」とするところを語の重複を避けたとだけ見るのは淺い。だん〳〵見てゐる中に落葉を美しと見る心持が強くなつて、始め單なる「紅葉」といつたものをこゝでは思ひ切つて「錦」とほめたもの、之と反對なのは大鏡の行成の秀句の引合に前讃岐守明正の隨身が、主人の鼓の打ちやうが拙いので競馬に負けたと憤慨して、始めはそれでも主人らしい敬語を交へて批評したものが、しまひに段々腹立たしげに「腐れたる讃岐の古受領云々」と罵る所である。斯うした流動性ある筆觸を味へると歌でも文でも、なか〳〵微妙な興趣がある。中やたえなん中が裁ち斷られるであらう。紅葉を錦と暗喩したので、それの縁語として「たえ」といつたもの。

評　龍田川には紅葉が亂れて流れてゐる。（紅葉流水の美は眞に滿幅の錦とも謂ふべく）若しもあすこを渉らうものなら折角の錦もあたら中から裁たれることであらう。

後に業平が韓紅の纈纈と譬へたのも奇拔だが、このやうにおほらかに錦と見たとて、偶々値ひ得たる這箇天巧の美を愛惜躊躇する風情を咏んだのも、亦古朴都雅の愛すべきものがある。この歌あつて以來襖繪・屏風繪・裾模樣に流水紅葉を描くことの如何に多くなつたことであらう。又、この一首以來自然美の破壞を案ずるたゆたひを詩情にした立意が如何に多かつたことであらう。六帖三、川に

秋風のふくたつた川もみぢばのにしきをみつゝいかゞわたらん

千載二奉下八三に

落花滿二山路一といへる心をよめる　赤染右衛門

ふめばなしふまねばゆかむ方もなし心づくしの山櫻かな

などその好例と見るべく、近世俳人が

行水のすて所なし蟲の聲　鬼貫

朝顔につるべとられて貰ひ水　千代

などいふも亦この範疇に入る。

之を人事に比照するに、明治文化の先輩故福澤諭吉翁の洋行談に、始めて合衆國に渡つてさる會合に招かれた時床にリノリヤムの敷いてあるので、そこを土足の靴でふむことは、何と考へても勿體ないといふので靴を脱がうとすると、先方は早口と仕方で頻りと、それには及ばぬと止めるもんだから、オヅ〳〵として靴穿の儘通つたが、今にして想へば山出しの下女があのリノリヤムの上に跣足で坐つてお辭儀するといつて噴き出すけれども、實は吾々はその愚を旅他國で演じたものなのだ、と樣にあつたがこの始めての洋行一團がリノリヤムを踏む心地――之を對自然に持つて行くと、千代女の朝顔に於ける、鬼貫の蟲聲に於ける、赤女の落花に於ける、この咏作者の紅葉に於ける皆同一歸趣だと思ふ。蓋し如何なる無風流漢と雖も、紅葉錯落して寸又寸、清流點綴して白又青と流れる好景に對しては、一種風雅な痛ましさを覺えぬものはあるまい。着想に不朽の詩美あり、修辭に素朴都雅の妙趣あり。春の舊都の櫻の御歌と對照し來て恐らくは左註所謂平城帝の御口吻であらう。

二八四　龍田川紅葉ばながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすか川もみぢばながる（此歌不レ注二人丸歌一）

考　詞書・作者　元・筋「題シラズ　讀人シラズ」

風・拾遺四冬二一九「人丸」

（拾遺の詞書は「奈良のみかど龍田川に紅葉御覽じに行幸ありける御ともにつかうまつりて」とある）

左註　三「本文の下傍に此歌三本不注人丸歌　三本同」

元「此歌二首なら帝御歌」

筋「此歌二首　ル人ノイハクナラ帝御歌」

六帖六紅葉　大和物語一四六・新撰・金　同。

（清輔本の頭注脚注には委しく考證してあるがその正しい部分は大抵こゝに述べてある）

語　龍田川　二五三に說いた。紅葉ばながる　一本「紅葉ば流る」としたものがあるといふ、（契沖）けれども「紅葉ば」と重語にしての用例は已にこの頃耳に熟して居る筈だから、本文の儘が宜い。神なびのみむろの山　龍田神社の敷地車にその附近を總稱して神奈備山とも三室山ともいふ。「神なび」は二五三にあげたやうに「神のもり」のことで「みむろ」も元「みもり」から轉じたもので又「みもろ」ともいふ。で、この二語は同じ意味なのだが、こゝのやうにつゞけると矢張上は原義のまゝにして「神の森の三室の山」と採る。

語　神の森の三室の山には時雨がふつてゐるらしい……といふものには、この龍田の川に（あれあんなに）紅葉ばが流れてゐる（ではないか）。

評　譯は唯形を順當に直したものだが、實際は先づ何氣なく道を往き〳〵、とど龍田橋にきた。ふと川面を見る、緋の胡蝶のやうな紅葉が鮮やかな色を流して居る。ハツとしてそれに眼をとめることやゝしばらく……その後に水上の時雨を想像したものと想はれる。卽興としての輕さと明るさとに妙味がある。

左註を始め、初二句の地理的考證につき古來諸說があつて金子氏が委しく辨じて居られる。今唯その一例をあげておく。契沖はいふ。

……それにとりてあすか川といへるは不審なし　龍田川といへるは大きに不審なり。其ゆゑは神奈備の三室の山は高市郡なり。

萬葉第十三云

かみなびの三諸の神の帶にせる明日香の河の水をはやみ云々

此歌を見て知べし。此外其證かぞふるにいとまなし。顯に神岡といふも三諸山なり。日本紀の雄略天皇のみまきに故ありて、彼山を雷岡と名を賜りけるによりて、又は神岡とも、　山ともいへり。神とはなる神にて、いかつちなれば、おなじ心なり。委は雄略紀を見るべし。明日香川も同郡なれば、みむろ山の時雨にちれるもみぢの明日香川に流れん事勿論なり。立田川は平群郡に有て高市郡の北に忍海と葛下との二郡を隔て川のながれもつゞかればながるべきことわりなし。はかなき事をよむは歌の習なれどさりとてことわりなき事をよむことなし。此後の歌にみむろ山の紅葉を立田川によめるは、皆此歌よりながれ出たり。源をよくきはめば不審出來る人又有ぬべし。

然るに大和志料下卷三九七高市郡「飛鳥山」の項を見ると

飛鳥村ノ上方ニアリ。飛鳥社當テコヽニ在リ、（後チニ鳥獲山ニ移ス）故ニ神奈備山トモ稱ス、其野ヲ眞神原（一名淺竹原）ト謂フ。崇峻天皇紀ニ所謂　飛鳥眞神原即此。

萬葉　味酒なる神名火山の帶にせる明日香の川の速き瀨に……

同　飛鳥の眞神の原に久方の天津御門を畏くも定め給ひて……

同じく大和志料上卷五四五平群郡三室山の項にいふ。

（名神奈備山○三室岸　龍田神社ノ敷地及ビ近傍ヲ汎稱ス、舊迹幽考ニ本宮より四町許三室は神の社といへり（神樂註抄）三室山は神のいます山なり。（顯註密勘）ト見ユ是ナリ

古今　立田川紅葉ながるゝ神なびの三室の山に時雨ふ〻らし
　　千はやふる神なび山の紅葉々におもひは掛けし移らふものを

拾遺　神なびのみむろの岸やくづるらん立田の川の水の濁れる

「神なび」といひ「みむろ」といひ木普通名詞であつた時代各所にその地名があつたのに、後に高市郡の神なびと山城の神なびとが旨と呼ばれるやうになつた。そこで左註や契沖の疑は、その高市郡の神なびの高揚せられる時代に即して「どうもこれでは合はない、高市郡の川にしなくては可けない。それは飛鳥川が手頃であらう」といふので立てた說であらうと思ふが前に龍田川の紅葉があり、古よりの臆測には前と此とは同時の作で前のはならのみかど此はお供の人丸の作とするものすらある位だから旁、大和志料の記事を信じて本文のまゝを正しとしておく。

但この奈良の帝、人丸說も想ふに古今の序に

秋の夕べ龍田川に流るゝ紅葉なば云々

とある處から、牽强附會した後人のさがしらであらう。

尙又季吟の抄に

家隆卿「三室の山に嵐ふくらし」とよみてんといへるを

定家卿「嵐は心あさかるべし時雨こそ心ふかけれ」といへり。

とある。理窟はさておき誦んでの感じは定家のいふ通り時雨とある方がよくおちつく。殊に二五三のやうに時雨と神なびの森の紅葉を連想することは、あの頃歌人の慣習とも想はれる。（新古今六冬藤原資宗の紅葉浮水の「いかだしよまてこと問はむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ」のやうにきつく思ひ入つた仕立てとちがふのだから）

二八五　戀しくば見てもしのばん紅葉ばを吹なちらしそ山おろしの風

考　作者　筋・六帖一秋の風「藤原關雄」　元・六帖「關雄」

四句　相「吹きなちらしな」

新撰　同。

通　戀しくば　今後紅葉が戀しくなつた時にはといふので、已に今から戀しくなる時があることを豫期したいひ方　見てもしのばむせめて見てなりとなつかしまう。もみぢ葉　この二八一以後は畧ら落葉のもみぢの歌が集めてあるから、こゝも散りしいたもみぢの落葉と解く。山おろしの風　「おろし」は下風だから「おろしのかぜ」は重言だが習慣上、このやうにいふ。山邊を吹きおろす風よ。

通　オイ山おろしよ。私は此後かの紅葉が戀しくなつた時にはせめてこの地上に、散り敷いた落葉なりと見てなつかしまうと思つてゐるから、どうか、吹き散らして（忍ぶよすがのないやうなことはして）くれるな。

評　「落葉階に滿つれども紅掃はず」は楊貴妃去つて玄宗の悲哀を寫した句だが、こゝも霜葉二月の花よりも紅なる美觀をめでて掃くことはをろか山風の他に吹き散らすことすら惜しまれるといふので、幽閑の秋思眞に愛すべきものがある。

二八六　秋風にあへずちりぬるもみぢばの行衛さだめぬ我ぞかなしき

考　作者　筋「藤原關雄」　元「關雄」

二句　元「あへで散りぬる」

通　あへず　「堪へず」と同義「吹くのに得堪へず」の義　上句は下の句の序詞としておいたもの。

通　吹く秋風に得堪へず散つた紅葉ばのやうに、行くへあてなき我が身がつくづく悲しい。

評　流萍飛蓬、零丁孤苦といつたやうな聯想を誘ふ。我國の古へに西歐に見るやうなボヘミヤンの痛切なものは尠いが、晩秋と落葉と王朝式感傷との融合によつて歌はれたこの一首には殆どボヘミヤンの心境に近いものがある。「森の娘」「さすらひ」など折頃小唄の題材にも近い。上句を序詞と見ず三句の終に「如く」を補つても解き得る歌だが矢張この時代の歌態としては上句を有心の序と見た方が宜しからう。で、一首の主想は專ら下句にある。隨て又これは秋の部に入るべきではなく、雜の部に屬する述懷の歌である。けれども秋風一過枯葉を吹いて、翩々としてこゝにかしこに散らばつてあるのを見ると

西ふけば東にたまる落葉かな

で、運命の弱者をはかなむ氣持が自然とわいて來る。

萍や今日はこちらの岸に咲く

で、昨日は今日を知らず、今日は明日を知らず、濫々として一日又一日、一年又一年、一度思をこゝに致すもの、誰か我身のたよりなきを悲しまぬものがあらうか。暮れの秋、紅葉のおちば、我身のゆくへ、その二つをバックとした孤寂の悲歌は決して無意味な序詞をおいたものではない。

二八七　あきはきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし

考　詞書・人名　元・筋「順しらす」　よみびとしらず」　猿丸集「女の許に」

三句　三「ちりしきぬ」（ぶり三本同）

結句　イ本（古典本）爲・猿丸集「問ふ人も無し」

通　あきはきぬ　秋は來るは、こゝの「は」は二四八と同じく同類併列の「も」と同じである。一説に「秋は來ぬ」といふと、何だか初秋のやうな趣になつて、紅葉の落葉と季節が合はぬからこれは「秋はつきぬ」の「つ」を上略したものと見よというが、そんな略

しやうは法にかなはない（かかるが故になかるが故になどはするけれども）又契沖は秋は來ぬでよろしいが、下につゞく詞と相俟つて秋の暮は來ぬと解くべしだといふが、事實は秋の暮の歌であるとしても、この一首の趣意から見ては、そんなことに拘る必要はない。ふりしきぬ「降り敷きぬ」とる。「降り」は盛に散ること「敷き」は地面にひろく散布すること、「降り頻きぬ」でも一應は聞えるが、四句との聯接から見てはどうしても「敷きぬ」の方である。

評 秋は來るは紅葉は庭前一面に散り敷くはでまだそのお負けに、落葉道でも踏み分けて訪ふ人はといへば誰もない（あゝ何たる淋しいことだ。

評 秋の來ること、これ一つで已に淋しさが充分なのに、紅葉が降るやうに散るので一段と淋しい。この二つでもう淋しさは十二分といふ處だのに、然り而して尚且つ之に加ふるにといつた調子で訪づれ客は誰もないといへば層々三段の有無比照（有は秋と落葉無は來訪人）によつて起る餘情、物として寂しからぬはなしと謂ひたい。三個の「は」二個の「ぬ」が一首の中韻・脚韻のやうになつて音調もよく調つてをる。類咏には曾根好忠の次の一首がある。

人はこず風にこのはばちりはててよな〳〵虫の聲よはる也

少々脱線するが、世捨人の庵居へ秋の夜おしかけて行くと庵主が非常に悦んだ描寫の面白いものに長田幹彦氏の「祇園夜話」の中の「時雨の茶屋」といふのがある。

「はあ、おう……」透き徹るやうな聲が慄へながら懸つたかと思ふと、やがて小君は人形のやうに睫毛の長い半眼を掬ゐて、一聲は高く、一聲はひくく、秘曲一調のみだれをしらべはじめた。

老人は達磨のやうな黒影が壁の面に印しながら檜をまるくしてうつとりと聞き入つてゐた。戸外では少しづつ風だつて來て、樹立のなかには栗の木でもあると見え、時折落葉が時雨の音とも紛ふやうに、さらさらと板屋の軒先へ降つてくる。老人はその度ごとに紙燭の光をみつめながら眼を細くして、端に人のゐるのも打忘れたやうににいつと微笑んだが、眞實私にはその時、三昧の境地に悟入した高僧の姿よりも、この時雨茶屋を背景とした一蕩兒の成れの果ての皺だむだ頰に浮ぶ拈華微笑の方が遙かに尊く見えたのであつた。

二八八　ふみ分てさらにやとはん紅葉ばのふりかくしてし道と見ながら

考 初句　六帖二・やど「露分けて」

結句　元・六帖「宿と見ながら」

語 さらにやとはん　解三樣ある。「や」を反語・疑問・咏歎と三つにとつて

一、今更訪うたりなんどしようか決して訪ひはしない。

二、今一度訪うてみようかしら。

三、ことさらに訪れましようよ。

紅葉ばの　前の二句を一の樣に解くと、この句は「ふりかくして」の有心の序のやうになるが、二、三のやうに解くと文字通りにとれば宜しい。ふりかくしてし　前の一の解では「紅葉の」に引出された「ふり」が下の「かくしてし」に對して叉序詞的に働く。見ながら……といふことはよく知つて居ながら。

評 第一、紅葉ばが降りしいて道をかくすやうな處に姿を隱して居られるといふことを知つてゐながら、どうして、今更訪ふ氣になれませうか、どうもそん氣にはなれませぬ。

第二、紅葉ばのふりかくした路をふみ分けねばならぬことは承知づくだが（わたしはさうしたあなたをお慰め申したいのだから）殊更お尋ねしませうか知ら？

第三、紅葉ばのふり埋んだ路とは知つてゐますけれども（わたしは敢てその路をふみわけてでもあなたを）お尋ねしませうよ。

評 三種何れの作意にとつても前のと對偶の意があつて排列はよろしいが、かう色々にとられる詩形は何とか詞書な

しには不都合である。隨てとかくの評を下すことを避けておく。

二八九　秋の月山べさやかにてらせるはおつる紅葉のかずを見よとか

考　二句　元「山路ばやかに」筋「山路さやかに」
　四句　元・筋「ちるもみぢばの」

類　なし

語　秋の月が（あの樣に）山べをさやかに照らして居るのは、散る紅葉の數をよめとの心であらうか。

評　「山べ」は遠景となつて落葉を假定しての着想となるからこゝは「山路」として「山路を行けば折ふし月がさえて、落葉がよく見透かされた」と近景の實感とするのもわるくはない。何れにしても、作者の紅葉の落葉に對する愛情が主想で、秋の月のさやかなことを咏ふのが主ではない。隨て一九一のと對照すれば主副その着想の正反對なことがわかる。「數をみよ」を文字通りにとると算數的な冷やかな餘情に墮するが、これは一片落ちるとは「アレ又一葉――惜しいなア」と思ふ、その度毎の愛惜の情趣を味はへよと樣に解けば詩興がある。惜しい哉已に二八一にけおされて折角の佳咏いとゞ見ばえがしない。月がなければ星も輝かうし、星がなければ螢も夜の偉大な輝きであらうに惜しいものだ

尙後撰七秋下四三四はこれよりも更に拙い。

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける
秋の月光さやけみ紅葉ばのおつる影さへ見えわたるかな

二九〇　吹風の色のちくさにみえつるは秋のこのはのちればなりけり

考　二句　元「ちぐさの色に」

類　なし

語　吹く風の色がいろ〳〵に見えたのは（ありや）木の葉が散つたからであつたわい。

評　上句に幼く自ら疑つて下句に自ら快く解いたもの、餘情は落葉翩々の美を髣髴させて、歌境はなか〳〵面白い。が唯一つ「風にも色ある」といふことは、むしろ現代的ないひ方である上に「風の色が――」といふと「風そのものは元來色をもつてゐるものだがその風の色が、今は色々に見えるのは」と樣にもとれて誤解の憂もあり、旁こゝは元永本の樣に「ちぐさの色に」とした方が穩當だと思ふ。（賀茂眞・香川景樹・金子氏も同じ意見）

二九一　霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦の織ればかつちるせきを

考　詞書　元・筋「題しらず」
　三句　元・筋・六帖五にしき「もろからし」
　四句　イ本（古典本）「織れど且つ散る」
　　新撰　同。

語　霜のたて　紅葉を織機に譬へ霜を經絲（たていと）に暗喩したもの。露のぬき　露の緯絲（ぬきいと）、露の横絲　よわからし　弱くあるらしい。この句は初　句共にかゝつて、經も緯も弱いそのことがサ云々の有力な原因になつてゐるわい。山の錦　山の美しい紅葉を直ぐに「山の錦」と暗喩したもの　織ればかつ散る　織る片つ端から散つて行く。

評　山の錦と美しく織りはえてゐる紅葉は、秋姫が織る程づつ片ツ端から散つて行くのは、その錦を織る機の經絲や緯絲が弱いからであるらしい。

評　霜露日毎にしげくおいて、木々はいよ〳〵美しく色づくところから紅葉を以て霜露の故に歸することは從來とても、類想があるし、その紅葉の美を錦とたとへその霜露を機絲と見立てることも

懷風藻七言。述懷志　大津皇子

天紙風筆畫雲鶴　山機霜杼織葉錦

などに早い例もあるが今此を活かせて散り方の紅葉に對して、凋落の原因を之に歸し、尙加ふるに霜露の脆く弱いのが原因して紅葉の散り易いのは或意味に於ては遺傳性から來て居ると樣に立意した點は、從來に無い着想でそこには纖巧な擬人的聯想が味はへられる。又「山の錦」といひ「織る」といふまでの暗喩を徹底させるには「織れば亂れつ」「織れば綻ぶ」などすべきを、こゝに至つて本の立木にかへして「散る」としたのはわざと單調をさけて參差錯落の妙を極めたものとして景樹がほめてをる。

うりんゐんの木のかげにたゞずみてよみける

二九二　わび人の分て立よるこのもとはたのむかげなく紅葉散けり　僧正遍昭

考　詞書　遍昭集「雲林院の木かげにたゞずみありきて」元「よみける」の四字なし。

釋　わび人　世に住みわびた人、つまり不しあはせな人、こゝでは自分をへりくだり　はかなみていふ詞、分て立よる　よりによつて立よる木の下　たのむかげなく　木蔭と庇蔭とを思ひよそへること、たのもしい木蔭もないまでに、美しい葉を見て樂しむ見込もない程に

評　世に住みわびた私がよりによつて立よる木の下は（又よりによつて）たのむかげさへないやうに（とてかアレあの樣に）紅葉が散ることかな。（矢張紅葉も立よる人柄次第のものですナア）

評　木の下蔭を庇護の蔭に譬へることは一〇九五などにもあり、後世藤原藤房「いかにせんたのむかげとて」の歌もあり、俗諺に「立ち寄れば大木の下」ともある。雲林院の境内木立美しい下をば、折節來訪の親しき誰彼と逍遙しつゝたま〳〵作者のたゞずむ上の方からヒラ〳〵とその剃頭にか裂裟……にか散りかゝる紅葉を興じ、性來の好謔「これも人がら次第ですわい」とをどけて悲觀したものと想ふのはまちがひであらうか？　字面に拘はつて「顯昭が大分悲觀してをつた時の述懷であらう」「何か法務について意見の衝突でもあつたものであらう」「彼に賴むべき身寄のないことを歎いたものだ」（季吟）「遍昭にはさるわびしさはないが、木の蔭にたゞずむとその折ふし丁度風なんかが吹いて紅葉が名殘なく散るのを見て、世間なべての人の身の上をよんだものであらう」（契沖）「この木の下はわび人のいかにも立よりさうな所」など色々先輩の解があるから、充分味讀せられたい。余は此僧正の一般の咏み口から推して始めにあげた通りだと想つてをる。遍昭の一代に於てしみ〴〵悲しかつたのは仁明天皇崩御の出家遁世に伴ふ哀別離苦で、それを除いてはこゝにいふやうな心から悲觀するやうな逆境には立つてゐなかつたと想ふ

二條の后の東宮のみやす所と申ける時に御屏風に龍田川に紅葉ながれたるかたをかけりけるを題にてよめる

二九三　紅葉ばのながれてとまるみなとには紅ふかき浪やたつらん　そせい

考　詞書　素性集「二條の后の御息所と聞えさせ給ひける時の御屏風の繪に立田河の紅葉ながれたるかた書きたるに」元・筋「二條〇后宮の東宮の御息所とまし〻時〇、〇屏風の繪に、龍田河に、紅葉みだれたるかた〇かけるを見て〇〇〇」相「……春宮の女御と申しける時に……」

二句　元「みだれてとまる」

秋下　二九二・二九三・二九四

三句　相「みなもとは」
結句　六帖三みなと「涙ぞ立ちける」　三「涙やたつらん」

新撰　同。

考　二條の后の云々　八參照　ながれてとまる　こゝを「みだれて」としたものは、「とまる」との聯接を考へないものでい。「みだれて」といへばとまるどころか流れ漂ひウカ〳〵ヒラ〳〵とした有樣が浮ぶ。紅ふかき　紅葉の色で眞紅の色に、「紅色濃き」といふところを湊の水が深くて隨てたつ波も深いことをかけて「紅深き」といつたのは巧みな修辭だ。涙や立らん　六帖のやうに「涙ぞ立ちける」としては今現に波の立つてゐる所が屏風畫に描かれてなくてはならぬ。すると龍田川即ち湊となつて一首の趣向が破れてしまふ「涙がたつことであらう」といつて今眼前の紅深い紅葉から、湊の樣な想像してこそ面白いのだから本文の方が優れて居る。

講　二條の后をば「東宮御息所」と申し上げて居た時、その御殿の御屏風に龍田川に紅葉の流れてゐる畫を書いたものがあつて、それを題にして御詠み申した歌である。

この紅葉の流れ下つてとまる（最後の）湊には（定めし）紅色濃き波が深くたつことであらう。（あの通り眞紅の紅葉が流れてゐるのだから）

評　主想は今眼前に見る屏風繪で、それは眼さめるばかり鮮やかな紅葉が龍田の清流に浮いて流れつゝある處實に言語に絶する美觀なることを歌はうとするにある。それを直叙をさけて流れてとまる有樣といつたのは例の婉曲な修辭である。即ちこの歌の特美は一語も繪のことをいはずして讀者に「白波鮮紅」の美を現出せしめる點にある。

なりひらの朝臣

二九四　ちはやぶる神代もきかず立田川から紅に水くゝるとは

考　詞書　元・筋「惟喜親王の家の歌合に」
二句　元・筋「神代も知らず」　嘉平「神代も知らじ」

百ノ一七・業平集　同。

勢語一〇五段・昔、男、親王たちの遊遠し給ふ所にまうでて、立田川のほとりにて、ちはやぶる……
清脚「宮瀧遊覽時在原友于歌云々　しくれにたつたの山もそみにけりからくれなゐにこのはくゝれり」

講　ちはやぶる　神の枕詞　神代もきかず　あの岩根木根まで口をきいたり、畫はさばへなすみなわき夜はほべなす妖神のあらぶるなど種々の神秘奇怪を現じた神代ですらもそんな例は聞えない。から紅　「紅」は「吳の藍」の約、吳から將來したから、くれなゐといつたといふが、王朝の頃は何でも韓渡りの品を上等としたので、美しい紅といふ代りに韓紅といつたもの　水くゝる　「水絞る」として纈纈をいふ。古註多く「潛る」と解き近刊の外國譯もそれを信じて紅葉の下を水が潛るといふことは……と樣に解いたものがあるがそれは可けない。落葉の下を水が潛ることに何の不思議があらう、神代は勿論いつの代いかなる場合にも見られる。

講　立田川一帶に韓紅を流して水の纈纈にしたこの奇觀は、色々不可思議があつたといふ）神代ですらもその例を聞かない。（返すゞゝも此は珍しい美しさである）

評　此は矢張前の素性と同じ場合の贊歌であらう。さう見れば面白い。元永本の詞書は次の敏行のと紛れたものか？紅葉が流れて美しいといふことは一語もあげないで居て充分その趣が味はれる。前の素性のは唯「紅深き浪」であつたが、こちらはその紅を韓紅とし尙も光彩の陸離をたくんで纈纈とし技巧に於て遙かに優れて居る。錦を川にさらすといふことは當時輸入の漢籍にも

蜀時濯錦於流江中則鮮明也。（華陽國志）
成都織錦成濯於江水其文分明勝於初成他水濯之不如江水也。（益州志）

などあるのででもわかる。「これは珍しい」といふ所を「千早振神代もきかず」と云つたのは業平獨自の警句で古來賞美の語となつて居る。「それはこの龍田河附近に龍田神社もあり、一帶の光景何となく神さびてゐるから思ひついた」と解くのも道理はあるが、寧ろそんな緣もゆかりも考へないで、ポツンと一見突飛なことを云ひ始めて最後に妥當な落ちをとるといふこの天才歌人の他の咏と同じ行き方と見た方が正しくもあり面白くもあらう。今日吾々が「康熙字典にも無いやうな變妙な漢字」といひ、「センチユリイにもウエブスターにもない手製の英語」などいふのと同一筆法である。

この歌當時も以後も人々にもてはやされたものと見て、踏襲模倣の咏が可なりにあるが不幸にして出藍の秀咏はないやうだ。

後撰　七　秋下四一五　讀人しらず

もみぢ葉のながるゝ秋は川ごとに錦洗ふと人や見るらむ

折角立田川といふ紅葉の個想を「川ごとに」とあらゆる川にボヤケさせた點が拙い。

六帖　一　霜　たゞふさ

木の葉皆唐紅にくゝるとて霜の跡にも置きまさる哉

は一首の餘情霜が強くきいて寒威凜烈の冴えがあつて白霜紅葉の色彩は鮮やかでない。（それにこの歌大江千里集には「木の葉唐紅にしぐるとて」とある。

尙季吟の抄に

又寛平宮瀧の御幸に在原友于歌に

時雨には立田の川もそみにけりからくれなゐに木葉くゝりて

此歌は時雨に立田川を染させ、落葉をくゝるとよめり只同事也。友于は行平卿息也舅が歌を掠よめり。

とあるが構想は遙かに落ちる。時雨がふつて立田川が時雨色にそまつて、その時雨色がからくれなゐでと四句までに主題の紅葉を暗示する語が出て來ない。

更に「神代もきかず」をまねたものには

新古今　十六　雜上一四八三

四月祭の日まで花ちり殘りて侍りける年その花を使の少將のかざしにたまふ葉にかきつけ侍りける　紫式部

神代にはありもやしけむ櫻花けふのかざしになれる例は

吉野拾遺下卷に女院（新待賢門院）の御庭に櫻の花吹雪をよせて高さ五尺ばかりの花の山をつくり嵐山と名づけて、明日は主上へ御案内申して面白い集ひをと折角樂しんでゐられたならその夜の風に散りぐゝになつたといふので、次のやうに咏まれたとある。

千早振神代もきかず夜の程に山をあらしの吹きちらすとは

是貞のみこの家の歌合のうた

二九五　我きつるかたもしられずくらぶ山木々の木の葉の散とまがふに　としゆきの朝臣

考　詞書　敏行集「これさだのみこの家の歌合に」　元・筋「おなじ人の家の歌合に」

二句　イ本（古典本）「路も知られず」

三句　敏行集「鞍馬山」

四句　敏行集「山の木の葉の」

秋下　二九四・二九五・二九六

結句　三「ちるとまかふに」
　　新撰　同。

考 暗部山　三九に説いた、木々の木の葉「木々の」といへば「木の葉」といはずともわかつて居る筈だが口調上重れたもの若し重言を避けようとならば「木々の紅葉の」とするか、家集のやうに「鞍馬山山の木の」葉とすれば宜しい。散とまがふに　散りと散りてまがるゝにの略、ひどく散つて道を紛らすので、この「に」は原因を示して居る「塵と紛がふに」と秀句にしたとも解かれるが、それでは趣が淺いし繁雑にもなる。

講 （これからさきの途は勿論）我がこれまでに辿つて來た途すらもわからない。名もくらぶ山の木といふ木悉く落ち葉して紛らすので、

評 あゝ偖ても散つたる紅葉かなで餘情は落葉の多きを興じたものとすれば一節ある、丁度吾々が雪の路を歩いて一歩々々足跡を埋める降雪の夥しさを見て驚きつゝもわびつゝも打興じるといつた趣と似て居る　けれどもわざ〳〵くらぶ山にかけていふところを見ると作者はむしろ不知案内の山路のわびしさを主にして着想したもので、あらう。さうなつては徒らに尖巧誇衒何のとりえもない駄作である。

二九六　神なびのみむろの山を秋行ば錦たちきる心ちこそすれ

考 三句・六帖六にしき　忠岑集「分け行けば」
　　新萬上　甘南備之御室之山紅秋往者錦裁服許々知許曾爲禮
　　新撰　同。

講 神なびのみむろの山　二五三參照。

たちきる　「裁ち著る」をとる、「立ち剪る」「裁ち剪る」とも聞えるがさういつては紅葉が活かない（評にいはう）

講 秋（の暮）に神なびのみむろの山を行くと（紅葉が盛んに散つてまるで）錦を裁つて着るやうな心地がして（實に面白い）

評 梢頭滿面の紅葉ならば、錦のトンネルとも謂ふべく地上滿紅の落葉ならば錦の褥とも謂ふべく、今し梢を離れて翩々飜々の最中ならば風に色ありとも謂ふべきを「裁ち著る」といふたつた四音で、こゝの紅葉は地上にも梢にも今ちりつゝあるそれも共にすばらしい夥しさであることを表して非常な力ある歌ひ方になつて居る。吾人はこの一首を讀むとき、作者が有頂天になつて旅の疲れもさらぬげに輕い足どりで、とみかうみして山路行く姿を幻想する。又之と對照的に雨あがりの弘前の町に出ると名うての惡路のこととて泥濘さながら、とろろの海を渡る心地するわびしさも想ひ出される。尙「分け行けば」といふ家集六帖の句はわるくはないが、さうすると詞書拔にしては紅葉を歌つたものだといふことがはつきりしないから、矢張本集の「秋」とあるが宜しい。

北山に紅葉をらんとてまかりける時よめる　貫之

二九七　みる人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

考 詞書　三「…　もみちからん……」　元「北山に紅葉をしむとて」
　　初句　新撰「見る人の」
　　金・世六　同。

講 北山　京の北手の山卽ち山城國葛野郡衣笠山あたりから鞍馬山へかけての汎稱　紅葉をらん　後世の紅葉狩といふに當るが、これは「惜しむ」とある元永本や三代集本がよろしい。もと「をしむ」とあつたのを「し」を少し曲げて「ら」に近い字體に寫したので、し

まひに「ならむ」となり「ならん」と轉じたのであらう。「紅葉をしむ」とは紅葉の散り方になつた名殘惜しさに觀に行くといふのである。つまり紅葉觀といふことである。（尙愚考「ならん」は「なミん」の轉化であると見れば一層簡單に解けはしなからうか「紅葉をミんとて」の「ミ」が「ら」に紛れることは隨分ありさうな字形だと想ふ）。みる人　見愛でる人、見嘸す人　散りぬる　「ぬる」は現在完了とすると散つてしまつたとなるが、こゝの「ぬる」は尙「散り往ぬる」と原動詞にとつて現在は枝にあつても「散つて往くところの」との心。おく山　當時にあつては北山はおく山と云はれた、朱雀の大路や東山にむかへてのいひ方　よるの錦　俗に「實の持腐り」といふに同じく折角美しくても引きたたないこと。夜錦の早いものは史記項羽本紀に「項羽が富貴ニシテ故郷ニ歸ラズンバ繡ヲ衣テ夜行クガ如シ。誰カ之ヲ知ル者ゾ」と謂つたとある。これなどが早いもので、今一つ有名なのは前漢書朱買臣の傳に、武帝が彼を會稽の太守にして、一度歸省するが宜いと勸める處に「上謂テ言フ。富貴ニシテ故郷ニ歸ラザルハ錦ヲ衣テ夜行クガ如シ　今子如何、買臣頓首シテ謝ス。」とあるもの。

譯　北山へ紅葉ををしむとて行つた時によんだもの、見めでる人もなくて散つて行くこの北山の紅葉は、あつたら夜の錦といふもんだなあ、（此が都大路か、さらでも、せめて日山にあらうものなら定めて多くの人々にもてはやされることであらうのに）

評　「あはれ、汝、不遇の紅葉よ」と紅葉を惜んだ歌で「夜の錦」といふ僅々一語に上述支那の故事を苦もなく咏み込んだ手際は、いかさま凡手の及ぶところではない。併しこの一首に「天才不遇の歎」を寓したと見るのはどんなものか？　愚考、貫之の地位は成程文學史的地位に比しては遙に卑かつたが、さりとて彼は決して不遇であつたとは謂へない。又貫之自身の性格もさうした世にすねる氣味はあまりなかつた。で、此は唯字面通り北山の紅葉を愛惜した歌とする。唯若し之を人事に比照するならば、右の天才不遇の怨みなどが最もふさはしからう。

この歌以來「夜の錦」の模倣が如何に多かつたかは次の諸咏を見てもわかる。

新拾遺　二十雜下一八八二の長歌　花山院御製

題　しらず

千はやぶる　神の御代より　木綿だすき　萬代かけて　いひいだす　千々の言の葉　なかりせば　天つそらなる
しらくもの　知らずも空に　たゝよひて　花にまがひし　いろ〳〵は　木々の紅葉と　うつろひて　よるの錦に
ことならず　物思ふやどの　ことぐさを　何によそへて　なぐさめむ

後撰十戀二の六二四　讀人しらず

男に遣はしける
思へども綾なしとのみいはるれば夜の錦の心地こそすれ

新拾遺五秋下の五九三　祐子親王家紀伊

（橘俊綱朝臣への）返し
君見れば朝日の山のもみぢ葉もよるの錦の心地こそすれ

（祐子內親王家紀伊集には「君みれば朝日の山ももみぢ葉も夜の錦の心地せし哉」

元眞集に「紅葉」として
立田山ふかき紅葉も君こずば夜の錦と猶ぞくれまし

惟宗廣言集に「終日見紅花　白河の會」として
朝まだきけさ立出て紅葉を夜の錦となるまでぞみる

慈鎭の拾玉集五に
「文治五年九月寂蓮入道の許へ無動寺より遣はすなり」として十首あるその八首目に
初時雨人もきて見ぬ山陰に夜の錦をおり初めてける

奥儀抄に麗花集を引いて

くれぬまにいそぎてゆかんもみちはゝよるの錦になりもこそすれ

倘清輔本頭註にも「陽成院一宮歌合歌云」

ひさかたの月なかりせばさほ山のもみちはよるのにしきならまし

和泉式部

秋のうた

かね見の王（おほきみ）

二九八　立田姫たむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさと散らめ

考　詞書　元・筋・餘材抄「秋歌とてよめる」

五句　爲「ぬさとなるらめ」

補　立田姫　本來は龍田神社（今日の大和國生駒郡三郷村立野の龍野神社の摂社の新宮といつて縣社）の祭神龍田彦（級長津彦命）に擬せられる女神龍田姫（級長戸邊命）をいふ。すれば元々風の神なのが、奈良朝に入つてから紅葉の名所として有名となり、春の佐保姫に對して秋の女神卽ち龍田姫と想像するやうになつた。で龍田の紅葉をばこの女神の御手わざと言ひなすことも歌人文人の常であり、染色の筆に堪能なことを立田姫に比べることは源氏帚木雨夜の品定めにもあり、色を赤くそめることをこの女神に祈つては赤

赤かれと西瓜祈らん龍田姫　　也有

の句などもあり、その他この類の歌句は隨分多い。たむくる　神佛に物を捧げること供へること　ぬさ　れぎふさ（願帛）の約、神に物を祈るために供へる布帛ないし絹・麻・木綿の白を用ひたが王朝の旅には五色の絹をこまかに剪つたものを幣袋に入れて道々道祖神に手向けたといふ。

補　立田姫は元來女神なのがまだその上に手向物をせられる神様がおありなさるに違ひない、さうならこそ、その御手わざになつた紅葉の木々がぬさのやうに散るのであらう。

評　紅葉の散るのを幣を手向けちらすことに譬へることは以下その類の多い着想だが、秋の暮れるにつれて女神の立田姫も歸途につくものと見立て、それを恰かも普通人の歸國の旅かのやうに首途の幸を道祖神に折られるものと譬へたのは折節の趣向目新しくもあり氣がきいても居る。たゞ初二句はちと力み過ぎたいひ方で、誰か反對に「立田姫には手向ける神はない、絶對にそんなものはない」といふものがあつて、それに競うて云ひ募つたやうに響くのが宜しくない「立田姫も手向くる神のありとてか」と樣の意を含めた語調の流暢なものに仕立てれば秀咏にならう。

をのといふ所に住侍ける時紅葉をみてよめる　　つらゆき

二九九　秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする

考　詞書　元・筋「よめる」の三字なし。頓「……すみ侍ける時に……」　古本（金子氏）「紅葉を見て」の五文字なし。紅葉のことは歌詞にあるのだから此形が宜しい。

初句　元・筋「秋山の」

四句　抄「すむ我さへに」

補　小野　古への小野の庄今の山城國葛野郡元杉坂村　秋の山　下に「が」を入れて秋の山が幣を手向けると樣に秋の山を擬人して主語にしたもの住むわれさへ旅ならず住所として住みついてゐる、（山がそんなだからこの）我までも

評　小野といふところに住んでゐた時よんだもの、こゝの小野の秋の山はおのが木立の紅葉をぬさとして手向け顏にこき散らしてゐるので旅ならぬ居住人の我までも何となく旅心地がするよ。

評　落葉軒近く紅扇を飜して宛たる幣帛と打見て興じたる詩境、そを大袈裟に我が心地までも旅のやうだといつたのも宜しい　貫之の小野居住はどれ程の間であつたか、今詳にする由もないが、この歌詞の範圍内では「こゝを居住としておちついてゐる我までも」として秋の山に對せしめた作意であることには搖きはない。芭蕉が「旅人と我名呼ばれん初時雨」といつた程の旅行愛はないまでも

旅人と我名呼ばれん幣紅葉

位の輕いユーモラスは見られよう。

神なびの山をすぎてたつた川をわたりける時に紅葉のながれけるを見て

きよはらのふかやぶ

三〇〇　神なびの山を過行秋なれば龍田川にぞぬさはたむくる

考　詞書　作者・元「かみなびの山を過ぎて、立田川を渡りける○にもみぢの流れければ○○○深養父」

貫之本（金子氏）「神なびの山を越え過ぎて……」

考　神なび山　二五三を參照。

評　神なび山を通つてたつた川をわたつた時紅葉をみてよんだもの（丁度自分と行き違ひに）これから神なびの山を通り過ぎて行く秋のこととて道理でこの龍田川に紅葉のぬさを手向けて居るのだなあ、

評　作者は今神南備の山に幣を捧げてこゝまで降りて來て紅葉を見たので、きては自分と正反對にこれから神南備越をするといふので、その門出に當つてこの川に紅葉を以て幣として旅のさいさきを祈つて居ると見たもので、その刹那の逸趣が詩となつて居る。これはうつかりすると誤解し易い（嘗て文部省檢定試驗に出題されて案の定穿きちがへた解答が澤山あつたといふ）「秋は自分と同樣今神南備山を越えて行く旅路だから云々」とし易いが、それではラインが同一方向になつて一向詩趣がない。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかぜ

三〇一　白浪に秋のこの葉のうかべるをあまのながせる舟かとぞ見る

考　詞書　作者・元・筋「寛平御時、中宮歌合に○○興風」・六帖三舟「深養父」

三句　新萬下・興風集「浮べるは」

五句　元・筋・六帖三「舟かとぞおもふ」

新萬下「船にざりける」

寛平歌合　一〇右　同。

考　白浪に　色彩の上では紅葉の紅に對照させたもので、語句聯接の上では今一つ三句の「浮べる」にかゝつて、水面波穩やかならぬ樣を匂はす　あま　蜑とも海人とも白水郎とも色々に書くが、要するに「賤山がつ」を海岸に持つて行つた樣なもので、海邊で布織り鹽燒き貝拾ひ、漁りなどして身過ぎ世過ぎをしてゐる賤の男、賤の女の總稱である。

評　流水激して白浪を立てその）白波に松の木の葉が（プカリ〳〵と）浮いて居るのを見ると、まるであまの流した蜑小舟のやうに思はれることよ。

評　紅葉白波の對照は例によつて鮮やかな感じはするが、譬喩が逆用されて却つて作意を殺いだ嫌がある　舟を一葉舟などいふのは如何にもはかなげな感じを增すが、葉を一艘の船にたとへては、よしや難船の船であつても一片の落葉よりは重厚な聯想があつてちつともはかないとは想はれない。かの菅根が「秋風に聲をほにあげて來る雁」を「天のと

わたる舟」といつたのは着想に少しの無理も覺えないが、潺湲たる溪流、たぎつて急瀬となり、そこに白泡を飛ばせてゐるあたりに鮮紅幾片波のまに〳〵搖蕩してゐるものを大海原にたゞよふ蜑小舟と見るのは大分無理があつて、難船のまゝごと見たいな心地がする。但しこれは余一個の感じで、餘り獨斷に失するかも知れぬから左に古人や先輩の評を加へておく。（これ等多くはほめてある）

一、山川の岩瀨などに落散たる木葉のとさまかくさまに浮漂へるを海上に漕出し蜑舟の難風などに吹流されてよるべなくさすらふさまにみたてて興じたるなり。（香川景樹）

二、舟は木の葉の水に浮るを見てつくれるといへり。されば木の葉のうけるを舟かとみるといへり。此集伊せが七條后におくれ奉る短歌に「いせのあまも舟ながしたる心ちして」といへり禁忌なり心得べきなり。

眞木くたす丹生の川瀨に秋更て一葉ながるゝ赤のそほ舟　（北村季吟）

（舟の起源は格致鏡原に「古者觀二落葉一以造レ舟」とある。眞木くたす云々の歌はこゝの歌よりもずつと優れて居る）

三、或抄に紅葉の波に映しておもしろきなみて、秋の思ひ世の愁をも忘るゝに、山水のおしなかして行は心をなくさむ便を失ふ事、あまは舟をもて世をわたるに、なかしたるにたとふるなりといへるは、下卷の伊勢が長歌に、おきつなみ、あれのみまさる宮のうちは年へてすみしいせのあまも、舟なかしたる心ちしてといへるとおなし心に見たるなり。此歌はしからず。只眼前の心をよめり。大井川の序に秋の水にうかひてながるゝ木の葉とあやまたれ云々。土佐日記にみな人々の舟いづこれをみれば、春の海に秋の木の葉の散やうにそれける　是らとおなじく見るべし。（契沖）

たつた川のほとりにてよめる

三〇二　もみぢばのながれざりせば立田川水の秋をばたれかしらまし　坂上是則

考　詞書作者　元「たつた川の邊にて○○○　○○是則」

五句　元「たれかしるべき」

是則集・六帖六紅葉　同。

評　ながれざりせば　流れずありせば、流れなかつたならば、水の秋　水は四季不斷に澄んで流れるから春も秋も同じ色であるが、その無色の水に秋色を帶びさせるものはあの紅葉であると面白く見立てたもの　たれかしらまし　誰が知らうか誰も知るものはない。「誰が知るべき」としても聞えるが、語調が稍きつくきこえるから矢張このまゝゝ方が宜い。

評　この立田川に若しもあの紅葉ばが、流れなかつたならば、水にも秋が來たといふことを誰が知らうぞ誰知るものもあるまい。

評　して見れば紅葉こそは立田の川水を秋裝する唯一の景物だとなる。秋の立田の川岸にたつて、秋と感ぜしむる何ぞ必ずしも一紅葉に限らう。岸邊の一草一木も、川床の淺く澄んだ趣も、偖は、藥塚のそこここゝに立つた山里の畦を右往し左往する光景も皆是れ川の秋と思はせるよすがである。けれどもこゝの歌のやうにいふと、それ等あらゆる景物の中特に紅葉を以て秋色の中心と看做すことになつてこれが無くては秋らしくはないといふ　そこにこの歌の詩趣がこもつて居る。又「水の秋」は四五九の伊勢の「水の春」と同樣、この頃の歌人の好んだ趣向である。これ等の新しい表現といひ、紅葉を技巧的に強調する手際といひ、一帶が當時の新調とも謂ふべきであらう。

しがの山ごえにてよめる

三〇三　山河に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり　はるみちのつらき

考　作者　元「春道貫木」

百ノ三一六帖三しがらみ・新撰　同。

類 しがの山ごえ　一一五参照、はるみちのつらき　春道列樹？――一五八〇　？――延喜二〇、目録に主税頭新名宿彌一男、延喜一〇、五、一九、文章生

延喜？　太宰大典

延喜二〇、正、三〇、壹岐守に任じ發向せずして卒す。

或人百人一首中の作者名を一聯に仕立てていふ。

春道列樹山　大江千里流

そしてこの二人は共に漢學の素養で歌をよんだことも相似てゐる。山河　やまがはと濁る。溪流のこと。風のかけたる　風が架けた、風を擬人して人が柵を設ける樣に風は紅葉を散らして柵をつくるといつたもの　しがらみ　二一七参照　ながれもあへぬ　流れさうにして敢て流れないといふ心持、

評 （この志賀山を越えくれば）白河の溪流に風が架設した柵といふのは、あの流れもやらでたまつてゐる紅葉であつたわい、

評 逸興眞に愛すべき好詠である。實境は志賀の山越にふと谷川をのぞくと、そこに一寸した淀があつて紅葉の落葉が紅蝶のやうに數片停滯してゐる。……といつただけであつたらう。これを作者が美しい自然の柵と見立てること已に詩であるのに、更に之を自然としないで何物かの作爲に出たと考へて「風」を拉致して二重に詩趣を產み出したものである。

池のほとりにてもみぢの散をよめる

みつね

三〇四 風吹ばおつる紅葉は水きよみちらぬかげさへ底に見えつゝ

考 詞書　元「よめる」の三字なし。

六帖六紅葉　同。

類 水きよみ　水が清く澄んで居るので、散らぬ影　この句晦渋だが、まだ散らないで梢に殘つて居る紅葉の影と解く可きで、ちつた紅葉は水面に浮びその浮んだ紅葉の影が水底に見えてともとられるが、それでは歌興が淺い。下の「さへ」の聯接から見てもよくない。

語 風が吹くと紅葉が池の面に散る。（處でその池の）水がよく澄んでゐるので（散つて浮いてゐる落葉の影は勿論）散らないで梢に殘つて居る影さへ底に映つて（得もいはず）面白い見物である。

評 池畔に逍遙の折柄、秋風一陣、作者の視線先づ梢を見、ついで落葉を見、落葉の線を追うて水の面に及び、水の面より清澄の水底に及んだもの、一見無雜作なやうで實は驚くべき技巧がこもつて居る。但し一首の主想は水底の美にあつてその爲め紅葉は飾り屋として儆はれた氣味があつて詞書のさまにあはない

亭子院の御屏風のゐに川わたらんとする人の、紅葉のちる木のもとに、うまをひかへて（清ナシ）（清ナシ）（清ナシ）

たてるをよませ給ひければつかうまつりける

三〇五 たちとまりみてをわたらん紅葉ばは雨と降とも水はまさらじ

考 詞書　元「亭子院の御屏風の絵に、川渡らむとする人○、もみぢ○散る木のもとに、馬をとゞめてたてるをよませたまへる○○○○○○○○○」

作者　筋「躬恒」

秋　下　三〇四・三〇五

二句　古興本「見てぞ渡らん」

躬恒集上初の秋・六帖六紅葉・毋六・九品中上　同。

語　亭子院　宇多上皇の御所　うまなびかへて　馬を控へて、馬の手綱を控へて乘り据ゑて、よませ給ひ　「せ」は使役。躬恒をしておよませになつた。たちとまり　中途で立つたまゝとまること、「たち」は殆ど接頭語といつてもよささうだが、矢張實動詞であるみてをわたらん　見て渡らうよ。

評　亭子院の御屏風繪に川をわたらうとする人が紅葉の散る木の下に馬を控へて立つてゐる處が描いてある、それを題で歌をおよませになつたので咏進したものである

立ち留り、見てから渡らうよ。紅葉はよしや雨と降らうともそれがために水嵩がまさるやうなことはあるまいから。

評　屏風繪の歌に、畫中の人物になりすましてその心持を歌ふことはこれまでとてもあつた趣向である。この歌は雨と紅葉とを對照して落葉の多いことは雨のやうだと一つの「同」をあげ、雨は多く降ると水かさまさる心配があるが、紅葉はいくら降つても美しいばかりで、そんな氣遣ひはないと一つの「異」をもあげ、この一同も一異も凡て行人の足をとどむる原因であると見たもので立意の巧、凡手の及ぶべからざるものがある。但し公任の九品和歌にこの歌を中品上において「心ことばとゝこほらずしておもしろきなり」とある評は如何はしい。愚考、心は滯らないが、ことばは大いに滯つて、充分に心を表してゐない。上の句に「立ちとまり見てをわたらむ」といへば下の句は必らずそこの景色のめでたいことをいはなければならない。丁度木下幸文の

橋はあれどかちわたりせんいさゝ川いさごも清し月もさやけし

とやうに云つてこそ上の句の理りが肯づかれるのである。然るにこゝのは單に「水かさが增らない危險の憂へがない」といつただけである。それではたちとまる理由が、唯生命の保障といふ一點に止まつて落葉流水の興趣は表れてないことになる。で、下の句は今一段の工夫を要するものだと想ふ。

これさだのみこの家の歌合のうた

三〇六　山田もる秋のかりいほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり　たゞみね

考　位置　清「この次のと前後」

詞書　元「……歌合に○○」

二句　元「あきのかり○ほに」

三「秋のかりいほに」

五句　新萬上「涙なるべし」

語　山田もる　山里近い田を山田といひ、その山田を雀や烏や猪鹿の類の荒らさないやうに、鳴子や、引板や鹿垣を築き、猶わざわざ人が詰め切つて見張をすることをいふ。かりいほ　「かりほ」　としたものもある。音を延ばして格別效果のない所だからむしろ「かりほ」の方口調が宜い。假に設けた庵といふことで秋山田の番をするために設けた臨時の假小屋をいふ。處で、この弘前附近の百姓は家から田畑まで遠い故か畑の一隅に粗末な小屋をかけてそこに簑笠鋤鍬の類を置き、時によつては寢泊りもする。そしてこれは冬の降雪期をのけて始終に使つてゐるが、此も矢張「かりほ」といつてよささうだ。讀者諸君の耳にすぐ思ひ出されるのは「天智天皇秋の田のかりほのいほの苫を荒み」といふのであらうが、あの「かりほ」もこゝと同樣である。いなおほせ鳥　二〇八參照。涙なりけり　涙であつたわい、となるが、これでは本當にその鳥の涙を見つけたやうになつて可けない。新撰萬葉のやうに「涙なるべし」とするか「涙なるらむ」などありたい處だ

語　秋山田の番をする假庵のあたりにおく露は（たゞの露ではなく）稻負春鳥の涙であらう。

評　いなおほせ鳥の正體不明につき何とも評しかねるが、この歌のみについてその鳥を想像すると、大さうよく啼く

鳥であるから啼くかと泣く、泣くから涙と想像してその涙即ち假庵の露と歌つたものでその點は二二一と同一着想である。又秋の山田の假庵によせあるといへば、一種の候鳥のやうにも想はれるが、何といつても肝腎の本尊を見ずには有がたみがうすい。隨てとかくの評は下す譯にゆかぬ。

よみびとしらず

三〇七　ほにも出ぬ山田をもると藤衣いなばの露にぬれぬ日はなし

考　位置　清「この前のと前後」
詞書　猿丸集「忍びたる女に秋のころほひ」
初句　元・筋「ほにし出でぬ」　抄・イ本(古典本)「ほに出ぬ」
三句　元・筋・猿丸集・六帖「から衣」
清「ふちころも(カリテコソホノマヽ)」
結句　元・筋「ぬれぬ夜そなき」

評　ほにも出ぬ　穂も出ない　藤衣　葛布で仕立てた着物とも、藤の纖維をさらして織つた着物ともいふ。今日勞働者の着る「あつし」の類で、古へ賤民の着用したもの、後に喪服のことを藤衣といふのは、必ずしも同一物ではないが、忌中は萬事質素にしてきらびやかなのを嫌ふところから來た稱呼である。こゝを一本「から衣」とある。から衣は韓渡りの着物又は上等の着物といふことで契沖は「いかで田などもる民のから衣をきるべき。誤也」といつて居るが、若し猿丸集の詞書に注意するならさうは否定されぬ所だ(譯にいふ)

評　まだ穂も出ない山田を番するとて、百姓たちはあの仕事着の藤衣を稲葉のつゆに濡らさない日とてはたゞの一日だつてない

(若し猿丸集のやうならばその女が山田近くに住むものと假定して)
まだ世間へ知れてないあなたに馴れそめ通ひそめしてからといふもの、この一帳羅の晴衣をばたゞの一日だつて稲葉の露にぬらさぬことはない。(と裏面の意をかけたもの)

評　從來の普通の解に從ふなら、始めの字面通りのもので、農民生活に同情して粒々辛苦の程を憫れんだ歌で當時の歌壇に珍しくも生彩あるプロレタリアート階級に左袒した着想となる。けれども當時の有閑階級・知識階級にさうした告白の歌文はめつたと見られないから、むしろ猿丸集の詞書を信じて、秋田の夜露にぬれ〳〵のぼりつめ通ひつめる公達の情痴愚痴と解した方が、一層作意によく合ふのではなからうか。又それならば「日」よりも「夜」の方が宜いとも思ふが、どうであらう？

三〇八　かれる田におふるひつぢのほに出ぬはよを今更に秋はてぬとか

考　詞書作者　元・筋・相「題シラズ　讀人シラズ」
五句　イ本(抄)「秋はてぬとや」

評　ひつぢ　秋稲の刈株から出る新芽をいふ　つまり稲のひこばえのこと。熱帶地方ではこの稲更に寸延びて開花結實して年に二回の收穫があるといふが　温帶地方では　そんなことはないから「ほに出ぬ」といふ。秋はてぬ　「秋も果ててしまつた」と「飽き果てた」とを秀句にしたもの

評　一旦稲を刈り收めた田に生へた孫生が穂を出さないのは、世の秋ももう暮れてしまつて實のるべき季節ではないし、この世も今更のごと物憂く思ふからといふのであらうか

評　歌境が不明だから何とも評することが出來ぬが、排列の上から見ては前のに答へた戀歌か若くは丁度あれに對す

る解答のやうな心ばへある歌だといふのでおかれたものと想ふ。さすれば前の歌のやうに言ひ寄られた女が、「私は前に戀で手を焼いたもので、あの苦い經驗を思ひ出すと今更あなたの御心に從つてなまじひ一時の歡びの爲めに生涯の苦の種を蒔くまいと思ひます」と様にもとられるし、さうした關係なしに突然この歌を讀むと躬恒が「てる月を弓張としも」の歌のやうに、或人が作者に向つて「なぜにひつぢは穂に出ぬか」と問ひをかけた時に即興で答へたものとも解せられもする。尙又契沖の左記の寓意なども強ち無理ではない

且はもし讒言などによりて、罪なきに勅勘をかうふれる人の、後に恩赦にあひてまぬかれたれど、世をうむじて出てつかへなどもせずこもり居たるをたとへてよめるにや。

北山に僧正遍昭とたけがりにまかりけるによめる　素性法し

三〇九　紅葉ばは袖にこき入てもていでなん秋はかぎりと見む人のため

考　この一首爲になし。

詞書作者　元「遍照がまつたけとりに北山にまかれりけるによめる　素性」

素性集「北山に松だけとりにまかりたりけるに」

初句　新撰和歌・六帖一秋のはて・新撰「もみち葉を」

三句　打聽・抄イ本（古典本）持て往なん」

四句　六帖一イ本（古典本）新撰「秋を限と」

釋　たげがり　茸狩、遊散をかねて南をとりに行くこと。職業的に行くのとは別、茸狩といへば關西地方では大抵松茸狩を指していふが、語義は茸狩で意味がもつと廣い。「僧正遍昭と」の五字はない方が宜い。詞書の態多くは作者になり代つてその歌境を斷つてあるのに、此だけ特に連の名をこんな風にあげるのはをかしい　僧正遍昭といへば作者素性の實父ではないか。それを「僧正遍昭と」などは決して云はない。「父と」とか「父遍昭と」といふのが普通である。（僧正をつけるのは一種の尊稱でもあるからいよ〳〵押い）紅葉ばは「紅葉ばを」の方が優れて居るとの說もあるが、こゝは實は茸狩に行つたのだから、とつた茸は兼て用意の笊とか籠とかに入れて不用意に見つけたこの好景物は袖に入れ　うと、茸に對して區別した心持であらう。こき入て　すごき入れて、俗にしごいて入れてといふに當る。今も桑の葉を摘むことを「桑をこく」といふ隨つて「搔き」の轉の接頭語としての「柳櫻をこきまぜて」の「こき」と同語と解くのは可けない。こゝのは實動詞である。もていでなん　この奥山から京の町へ家づととして持ち歸らうよ　秋はかぎりと見む人のため　大抵の知人は秋はもうおしまひだと思つてゐよう。その人たちに見せるために「見む」とは目で見ることでなく心にさう思つてゐるであらうといふのである。

評　北山へ父遍昭と一緒に茸狩に行つた時によんだ。この紅葉ばは袖にすごいて入れて町への家土産に持つて歸らうよ。（わたしの知るべは大抵もう秋はおしまひと思つてゐよう。それ等の人々に見せて（いや山にはこれこの通りまだ秋は殘つてゐましたよと）知らせる爲めに。

評　茸はどれ程とれたことか、察する處あまり大した收穫ではなかつたらう。（丁度近頃の銃獵ファンが中途で鴨をわけて貰つて家へはこれを射とめたなんかいつて得意さうに自慢して歸る底の茸狩であつたらうと想ふ）けれども意外にも見つけ得た紅葉は素敵に美しいものだつたらう。隨てその前に立つて作者が、「これは意外のもうけもの」といつた顏でやゝしばらく立ちつくして驚喜した有様もよく浮き出て居る。さて歸來「どうでした、澤山茸はありましたか」などからかひ顏に聞く誰彼に「茸はともかく、あの紅葉に實に美事なものでした論より證據これこゝに」と袖にこき入れようといふに至つてはその逸趣如何にも春の櫻に對して「手毎に折りて家苞にせめ」といつた彼素性の思ひつきさうな趣向である。そして又「袖にこきいれる」といふ雅興は單に着想としてのみならず、作者はその文字通りを實行したものと想はれる

早く萬葉冬雜歌一六四四に

三好連石守梅歌一首

引きよぢて折らば散るべし梅の花袖にこき入れつ染まば染むとも

とあるそれにもまして實行し易い風流事でもあり、彼の閲歴そのものが風雅第一で、交友會談の雅友といへば上は宇多法皇より下は行路の人に至るまで幅廣く、京は北山東山、近江の石山奈良の石上と足跡を印せない迄に風勝を追うて自然美の懐に懐を遺つた人である點から推しても事がその幾片かを持つて歸つたものと推せられる。それは丁度一介武辯の將校が異國の旅先から、その近くの草花木花を手紙に封じ込んで故郷に送るといふ風流韻事にも相通じた趣向で、生活即藝術の立場から眺めて本集出色の好詠だと思ふ。

寛平御時。ふるき哥たてまつれとおほせられければ、立田川に紅葉ばながるといふ哥。かきてその同じ心をよめりける

三一〇　深山よりおちくる水の色見てぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

考　詞書　興風集「同じ御時にふる歌奉れと仰せごとありければ立田川もみぢ葉流るといふ歌に書きて同じ心に」元「寛平御時古〇歌たてまつれとおほせ事ありけるに「たつた川〇もみぢばながる」といふ和歌どもよみて、その〇〇心をよめる〇」

二句　六帖一秋のほて「落ち來る瀧の」

釋　寛平御時　宇多天皇の御代　ふるき歌　古歌この時代では本集中「よみ入しらず」としたもの及びそれ以前卽ち王朝初期以前の歌をいふ。立田川に紅葉ばながるといふ歌　金子氏は二八四の歌であるといはれた（それは富樫廣蔭の註に據ての說と思ふ）ので今暫らく此に據つておくが、瀧田川の紅葉と咏んだ古歌は澤山あるのだから、何とかしてその中の二八四がさうだといふ確證がほしい。その同じ心　その古歌と同樣の題で　深山より　龍田の深山から、「深」は接頭語ではあるが文字からの聯想で山奥をひゞかせてゐる。おちくる水　流下する水、流れ落ちる水　かぎり　最終、おしまひ、もうこれきり、思ひしりぬる　つくゞくさう思つた。

釋　寛平の御代、「古歌を奉るやうに」と仰せられたので「立田川に紅葉流る」といふ（二八四の歌）を書いて（奉ると共に）それと同じ心ばへをよんだもの。龍田の山の山奥から流れ落ちる水に（紅葉の落葉が見える）あれによつて、もう秋はおしまひになつたとつくゞく思ひ知つた。

評　若し二八四の古歌に添へた歌とするならこゝは「同じ心」とは云ひ條、古歌は初落葉を歌ひ、此は最後の落葉を歌つたもので、この點に於ては着想に一つの新し味が加つて居る。併しその根柢には紅葉を以て秋を象徴した慣用的な趣向の上に立つて居るのが飽き足りない。秋そのものの暮れて行く行列次第を見て始めには花を流し、次には木の家を流し、最後に紅葉を流す、あの紅葉を流すやうになつたら天下はなべて暮の秋と見るのなら多年龍田川のほとりに住み慣れた里人の心になりきつてゐて面白いのだが、こゝはさうではなく秋の中心生命は紅葉にあつて、苟くも紅葉ある所卽ち秋あり、紅葉のなき所卽ち秋なし、然るに今や龍田の川には深山より紅深き流れを下して彼女（紅葉）は今方に此山里を去りつゝある。それによつて最早秋もこれまでなりとの感を表白したもので、かういふ風に紋切型の聯想の上に立つた歌ひ振は（近頃觀念的な歌など謂つて排斥して居るが）作歌の上では好ましくないものと思ふ。

秋のはつる心を龍田川に思ひやりてよめる　つらゆき

三一一　としごとに紅葉ばながるたつた川みなとや秋のとまりなるらん

考　詞書　筋「秋のはつるこゝろを、立田川な思ひやりて〇〇〇」

二句　元「もみぢながるゝ」
清・鄙言・イ本（抄　古典本・餘村抄その他諸本「もみぢば流す」
三「もみぢばながる」

語釈　秋のはつる心を云々　秋の暮といふ心を龍田川につけて味んだもの、つまり「龍田川に寄する暮秋の心」といふ意。紅葉ばなかる　紅葉の落葉の流れる。ここは元永本のが一等勝れて居る「流る」と咏歎的にとめるべき所ではない。「もみぢば流す」といふのは立田川を擬人したもので、これも面白いがさうなると一首の中心が川や河口に移つて紅葉はそつちのけになる嫌がある。とまり泊り宿泊處舟繋りする場所。

評釈　龍田川に寄せて秋盡くるの思ひを咏んだもの、毎年々々紅葉の流れる龍田川の湊がとりも直さず秋の泊りといふものであらう。

評　秋は紅葉と共に暮れ行くといふ想を本にふまへたもので、こゝでも紅葉を以て天下の秋はこの紅葉に凝集してゐると看做したものである。その見方も格別悪くはないが、「年毎に」といふ初句は一首の想を冷却してこれは毎年お定まりだとなつて、逝く秋に對して何の愛着もなく、血も涙もない冷やかな傍觀の人を想はせるものがあつて、その爲めに此一首は打破はしになつてゐる。俳句ではあるが　乙由の

行く秋を道々こぼす紅葉かな

の方が毎年通觀の理知を出さないで、現前當面の情趣を歌つただけでも優れて居る。後世寂蓮が宇治の逝く春を咏じて「暮れて行く春のみなとはしらねども」といつた方が遙かに優れて居る。單なる數的統計的打算では歌にはならない。六帖の左の歌の如きさのみ秀咏ではないが年毎をいはぬだけでもいくらかはましである。

紅葉々のながれてよどむみなとをぞ暮行秋のとまりとはする

ながつきのつごもりの日大井にてよめる

三一二　夕月夜をぐらの山に鳴鹿の聲のうちにや秋はくるらむ

考　詞書・作者　元「九月〇つごもり〇に、大井にて〇〇〇同人」　筋「つらゆき」
四句六帖一秋のはて一聲の内より」
結句　元「秋の暮るらむ」
朗「秋を知るらん」
新撰　同

語釈　なが月　陰暦九月の異名、この頃より冬至まで次第に夜が長くなるので夜長月を上略して長月といふ。大井　嵐山の麓、桂川を大井川といふ沿岸一帯の村落、古へこゝに大きな堰があつたので大堰の里といつたのが名の起りだといふ。夕月夜　小倉の枕詞「夕づく夜」の「夕づく」は夕方になゝといふ意で「夕方の月」といふのでないともいふが、「夕方になつて夜色を帶びて」としても「夕方にでる月のやうに」としてもどちらも「小暗き」とか「おぼつかなき」に寄せのある句意があるからどちらを正しいとは斷じにくい。併し「夕づく夜」をそのまゝ實名詞とすると宵に東に出る月は新月だから晦に出るとしてはをかしい。このことについて顯註や密勘に、こまゝゝと詮議があるがつまり枕詞を實名詞とまちがつたものである。さて「夕づく夜小倉の山」とつゞけたもの萬葉時代には大和の小倉山であつたのを、この期に入つて、同名の關係から山城のそれに轉用したもので、同じ貫之の作に係る「大堰河行幸和歌序」に「月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜をぐら山のほとり、行水のおほゐの川へにみゆきしたまへば」ともある。をぐらの山　小倉山、大井の里の北方にあつて眺望佳麗後來中院入道蓮性の山莊（小倉百人一首の色紙をはつた）もこゝに設けられた。聲のうちに　一方で鹿の音が響いてゐると一方ではその間に秋が刻々に暮れて行くといふ處だが、それを尙緊密に聲と共に、聲の中に姿を托してといふ程の心持、貫之集に

くれぬとてなかすなりぬる鶯の聲のうちにや春のへぬらん

とある附點の句と同じ云ひ廻しである。

【補】九月の晦日大井の里で咏んだ、夕づく夜小闇を名に負ふ小倉の山に啼く鹿の聲もろともに秋は暮れて逝くことであらう。

【評】呦々又呦々、秋の挽歌か薤露行か、見渡す山河秋老いて、千草八千草の影もなく、草葉にすだく蟲の音も響かない。寂寞そのものの様な小倉の山の山奥から死の秋の行進曲して、ひゞくこの鹿の音は哀れにも感深いものがある。契沖の所謂「秋の惜みもあへず疾く暮行く心」がしんみりと滲出して居る。

おなじつごもりの日よめる　躬恒

三一三　道しらばたづねもゆかむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり

【考】詞書　元「おなじ日」

二句　清・相・イ本（古典本）「尋れも往なむ」

四句　清・六帖一「幣に手向けて」

五句　六帖一「秋はいぬとも」

相・イ本（古典本）「秋はいぬめり」

新撰　同。

【補】道しらば　以下の句によつて暮れ行く秋の返りみちをわたしが知つて居るならの意。たづねもゆかむ　尋ねても行かう。ぬさ　幣、秋が歸りの旅路の幸を道祖神に祈るぬさ。

【評】同じ長月の晦の日によんだもの、（あゝあの名殘惜しの）秋は紅葉をぬさとそなへて最早や立つてしまつたわい。（えゝ惜しいことをした）若しもその途が知れてあるのなら（あとからわざ〳〵　尋ねても行かうものを。

【評】秋を擬人して、その名殘を惜しむこと、さながら本當の人に對するが如き熱意が宜しい。脚本朝顔日記宿屋の段に戀し〳〵に目を泣きつぶした可憐の深雪が、戀人宮城阿蘇二郎の行方を慕つて途中大井川の川止めに地團駄ふんでくやしがる激情――、あれ程にはないが、あれと同類型の熱愛を秋によせたもの、而かも語安らかにして技巧字面に浮動せず老手と謂ふべし――。之を左の朗咏の九月盡の句に比して益々さう想はれる。

九月盡

縱以二崎嶇一爲レ固、雖レ留二蹔惡一於雲衢一。
縱令二孟賁一而追レ何遮二爽籟一於風境一。

（山寺惜秋序。順）

巻第六　冬　歌

題しらず　よみびとしらず

三一四　龍田川錦おりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして

考　初句　清・相・顕・新撰和歌・六帖一神無月「龍田山」　三「たつた山」（河三本同）　家持集「さほ山に」　新撰　同。

類　錦おりかく　錦を織つて懸けわたしてある、川の面を織機と看做しての謂ひ方、錦はいふまでもなく、紅葉の落葉の流れて來る有様を美しと見ての暗喩である。しぐれの雨　時雨の雨と重言だが慣用久しいいひ方である。たてぬき　經緯、經絲や横絲にして、

評　龍田川は（紅葉の）錦を織つて懸けてゐる。それはこの十月の時雨の雨を經緯にして織つた錦をさ。

評　初句「さほ山」としたものは棹を秀句にして棹に衣をかけるやうに佐穂山に錦をかけると洒落れたものだといふが、洒落にしても拙いし假名もさほ（佐穂）とさを（竿）とは違ふ。又「龍田山」としたものは織りかくといふにふさはしいが、季節が違ふ。上來暮秋の紅葉丸て落葉と詠んで來て冬に入つたのだから、まだ山に紅葉があるといふのは少くとも本集の排列としては季節錯誤である。（但し實際は現に十一月の中旬過ぎ頃奈良近くの――例へば瀧坂の紅葉なぞは丁度見頃であるから、この排列を放れていふなら山としても季節外れではない

次に作者と家持を推定したものは更に信ぜられない。萬葉にも紅葉の錦の經緯を思ひついた歌もあるけれども、もつと大まかであるし、家持の他の歌の咏み口とも一致しない。家持集はしどけないもので、一向あてにならない。又或本に延喜の帝の御製としたものがあるといふが、その或本とは何本か知らぬけれども、本集には當代の御製は載せなかつた筈だからこれも信ぜられない。

次に古今集讀人不知考には聖武帝の歌とあるが、この歌はどうも王朝初期の終りの古今集時代直前頃の某の作と想はれるからそれをも否定する。（前の關雄の二九一と比べて同系の着想である）

初冬の龍田の川の川の面に鮮彩八汐の紅を流してゐるのを見て、何の錦と呼びかけたことは宜しいが、唯一つの時雨の雨を經にも緯にもするといふこと　線の上にも色彩の上にも感情を強ひる氣味がある。時雨ならば上から降るものだから之を經絲に思ひよそへることはふさはしいが、それを又横絲にもするとなつては横なりに降る時雨でもあるかのやうに聞えて宜しくない。季吟は「時雨は一方に降定めずふればたてぬきに思ひよそへたり」と評して居るが、自分はどうも首肯しかねる。又唯一つ色の時雨が經緯に織られて錦になるとよりは「霜のたて露のぬき」など天象をかへて交錯させた方がふさはしい。するとこゝは「霜と時雨をたてぬきにして」とか「雨のたていと露のぬきいと」など纖細に墮する嫌があるが、それでも上句との聯接はその方が自然であり、讀んでの感じもこの方がよくおちつく。

冬の歌とてよめる

三一五　やまざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば　源宗于朝臣

考　詞書　宗于集「歌合に」　二句　元・筋・相「冬そわびしき」　卅六人・百ノ二八・六帖二山里・六帖六冬の草　同。

考 人め　人の目、つまりは往訪の人々の意。草も　人めが主で草もは口調上添へたといふも一つの見方である（草の枯れるのは山里でなくても見られる寂しさで人目のかれるのこそは山里特有の淋しさであるから）が、こゝに草といふのは廣義の草木で、この草木故に山里の生活にも飽かず、尙又この草木故に三季の遊散客を惹きつけ爲めに寂しさを免れ得たものと觀て寧ろこの二つは密接不離何れとも輕重なしと觀たい。かれぬとおもへば　草も枯れ人目も離れの秀句。

評 冬の歌を咏まうといふので、山里は（いつも淋しいがとりわけ）冬が一番淋しさがまさつて覺えるよ、それは人目も離れ草も枯れ（何一つ慰むよすがもない）と思はれるから。

評 春の山里は花見や蕨狩の人々に賑はひ、夏の山里は、人は來ずとも青葉若葉の蔭もよくしば啼く時鳥にも慰められるし、秋は葦狩紅葉狩と此亦相當の人出があるが、冬の山里と來ては何等さうした無聊を遣るたよりとてはなく、普なふものは木枯嵐・枯葉・雪に霙に霰に吹雪と唯寂しいわびしい一方の景物である。で四季の中冬が一番淋しいといふ感じは、別に內容をあげずとも肯づかれるが、下の句にその理由づけをして山里の生命とも謂ふべき草木の凋落と、此に關聯して遊客の絕無とを以てしたもの「人目も草も」の句法簡結にして、この後幾多の人々によつて踏襲せられた。結句「かれぬと思へば」の「と思へば」は餘り活きがないとの評がある（宣長）が、余思ふにこの歌は作者が山里の實生活を歌つたものでなく、唯「冬の歌とて」趣向して山里の冬こそは淋しからうそれは……と樣に想像されてと机上題咏の用意でよんだいひ方で、詞書の態にもよく適つて居る。作者の閱歷は前にもあげたやうに丹波・三河・相模・攝津・信濃・伊勢の地方官として轉々してその間時に山里近い住居もあつたらうが、要するに昔の國郡にも相當し後の城下町にも相當する邸宅住まひであつたらうから、關雄の歌と等しなみに生活表現の歌と解いてはまちがふ。前に二一四に忠岑の「山里は秋こそことにわびしけれ」といふがあつたが、作者の心々で何れも尤もとは思ふがどちらかといへば冬が淋しいといつたこゝの歌の方が實感味が多い。

題しらず　よみびとしらず

三一六　おほぞらの月のひかりしきよければ影みし水ぞ先こほりける

考 三句　清・元・筋・新萬上・朝「さむければ」
結句　朝「まづは氷れる」
六帖一冬の月　同。

評 月のひかり　月光、月を陰氣の精として味んだといふ古註（季吟・契沖）は採らず、唯月の光といふだけで寒威凜烈の氣分は充分であらう。きよければ　こゝは「さむければ」でなくては聞えない。月の光がさむいので　影みし水　月の影に面した水が　先こほりける　初一發に凍つたとなる。

評 大空の月の光が寒いので、その月の影を見た水が一番がけに凍つたなあ。

評 空に寒月地に氷、冬夜凄愴の氣堵表に溢れて佳咏である。冬夜の沉寒固より月の故ならず、地上凍結するもの必ずしも水のみに限らないけれども、作者當面の水の凍てを見更に仰いで月を眺めては、この俯仰の間に一脉因果のあとを眺めて寒さを月の故に歸し、凍てを影を見た故に歸して水面に當座の解決を與へた即咏であらう。

三一七　夕されば衣手さむしみよし野の吉野の山にみ雪ふるらし

考 初句　六帖一雪「夕ぐれは」
四句　崇德院御本（顯）「タカキノ山ニ」
清輔本（顯）「フカキノ山ニ」嘉・古典本「よしのの山に」　六帖一「たかきみやまに」　家持集「高まの山に」
結句　元・筋「みゆき降りつゝ」

六帖一雪「夕されば衣手寒し高圓の山の木ごとに雪ぞふるらし」

釋 夕されば　「夕にしなれば」の「しな」を約めて「さ」として「に」を省いた形か？　通常は「夕にしあれば」の約だといふそれでも聞えるが、嚴密に譯すると後の方は「夕夜であるから」で前句は「夕方になる　となる。こゝは後の譯の意である。衣手さむし　袖のあたりが寒い　吉野の山に　こゝが色々になつてゐるが本文のまゝで差支はないと思ふ。みよしのに限つて疊句にして音調の借和を保つた例は澤山ある。但しこの歌の作者が若し吉野の里住みの人であるとしたならば、崇德院御本にある「高城の山に」といふが妥當であらう。これは萬葉三雜歌三五三釋通觀の歌に

みよしぬの高城の山に白雲は行き憚りて棚引ける見ゆ

などあつて吉野山奥の千本千守神社の左手にある俗に城山といふので、吉野山に近い人の心持としては、たゞ吉野の山といふより以上に地理に精しく吉野山の中でも奥山の高城の山を想像したと見て妥當なものである。その他の紛々たる諸說は一つも採り所がない。高まの山は河内の國なり、「ふかきの山」などは「深き野山」といふのか……固有名詞としてはみよしのにはない地名だ。

譯 夕方になると袖のあたりが(ゾク〳〵)寒い(此分ではこみよし野の吉野の山のあたりは(モウ)雪が降つてゐるらしいな。

評 初秋の感觸も朝寒・夜寒から次第にその寒冷が晝間に延長するものだが、初冬の感觸も亦朝夕の寒冷が際立つてそれから次第に寒さの寸延びて晝間に及ぶものだ。この歌は奈良の京などに起臥する身の初冬の一夕寒冷頓に增し加はる處から故郷吉野の山を想ひやつたものであらう。聯想自然にして句のつゞけがらも亦すなほである。それは丁度十月十一月の交、この弘前人が「急に冷えかけました。これではもうおつつけ、お岩木さんの上が白くなりませう」などいふのと同じ趣である。

偖「雪」は我邦に在つては月花と共に自然美の大立物なり、古今東西共に雪によせた詩歌は枚擧に暇ない程ある。本集に於ても冬の歌の大部分はこの雪を咏じたもので、それの多くは花に譬へ、白梅に譬へ、初雪を珍らしみ、深雪をわびたもので、それ以外雪を興じたものも幾らかはあるが大體以上の範疇を出でない。現代歌人は形式に於てはとにかく着想に於てはもつと幅廣く或は行旅の難に結合して、

雪にあけて雪にくれたる廣野原さびしや今日も人に逢はざりき川合長流

といひ、崇高美を讃へては

雪の原涅槃の樣の寂寞か黃金ひとすぢあけぼのの空松永清亂

といひ、若くは優艶の致を咏んでは

うすぐもる睦月のそらの朝寒や化粧窓ごしぬか小雪して原田輝子

などいふが、斯うした立意のものは本集には一首も認められない。蓋し古今集歌人とても、これ等の美に氣のつかない譯はなかつたらうが、一種の類型に煩はされて、一步も埒外に想を馳せまいとしたかのやうな嫌がある。

三一八　今よりはつぎてふらなん我宿のすゝきおしなみふれる白雪

釋 二句　清「つきてふらなん」（式本きえてあらなん）　三「つきてふるらん」（ちなミ本同）

今よりは　今からは、今とは初冬と推定する。つぎてふらなん　引き續き降つてほしい。おしなみ　押し靡かせて

譯 我宿の薄を押し靡かせて降つた白雪の景(が得もいはず面白いから)今後引續き降れば宜いと思ふ。

評 庭前數株の枯薄、暮秋には何の見處もなき敗殘の姿して、しよんぼり立つて居たものが、はからず降り積んだ白雪に意外の興趣を添へたのでこれは面白いと悅んだもの、けれども初雪の處はだらにうつすらとかゝつたこととてしば

らくたてばすぐ溶けて、折角の羅衣が臺無しになつてしまふそれを取越苦勞して、「何とか今後は引つきりなしに降つて貰ひたい」といふ懇囑雅懷より出でて、如何にも風流人の冬籠らしい感興である。雪の歌中珍しくも輕快なる興趣を捉へたもの。

三一九　ふる雪はかつぞけぬらし足曳の山の瀧津瀬音まさるなり

考　二句　元「かつも消ぬらし」　頓「かつぞきぬらし」　イ本（古典本）「かつぞ消ぬらん」
五句　元「落ちまさるなり」
六帖一雪「聲增さるなり」

語　ふる雪　今現に降りつゝある雪をいふ。かつぞけぬらし　一方このやうに降りつゝその片方では消えてしまふらしいわい。かつ　はいつも一方に於ては云々他の一方に於ては云々と同時併存の事象を云ふ副詞句　けぬ　はきえぬ（消えぬ）の約、「ぬ」は過去の助動詞三活、「らし」は事實の根據ある想像の助動詞　足曳の　山の枕詞。瀧津瀬は名詞的な書き方であるが元は瀧つ瀬で「瀧つ」は激して流れる意のタ行四段の古格の動詞の第四活連體形で、瀧ち流れる所の瀬といふのが原意である。その「たぎつ」は「沸る」などと同一語系で、今はその語根「たぎ」に「の」と同意の「つ」といふ體言助詞をおいて瀬に連れたもの即ち瀧の瀬といふこと。（若し原意通りの句として用ひるならば、瀧津瀬の文字も可けないし「山にたぎつ瀬」と「に」の字に改める必要がある）音まさるなり　「なり」は咏歎で、水音が以前よりも高くなつたわいとの意。

評　今降つてゐる雪は、（山ではかうして降りながらも）一方から消えて行くらしい。……といふもんにはアレあの様に山の瀧の瀬の水音が高くなつてゐるぞ。

評　作者の附近四季常住のせゝらぎあり、作者の境遇他に紛るゝ所作なき閑散にして、いつもこの水音に耳を傾けつつあることも、今初冬にそろ〳〵雪が降り出して來たことも、その水音が稍耳について、調子高くなつたことも皆この一首によく描かれ、今や主人公は眼には降る雪を眺めつゝ耳には瀬の音の高きを聽き、心にはその原因を推して雪消の水に歸するなど、暇にまかせての推想至らぬ隈なき幽棲振がよく發揮されて居る。初冬山里閑居の高士自然の畫く冬の畫中の人となりつゝ又自然の調べる冬の譜に聞き惚れた趣まことにいひ知れぬ雅興がある。之を晩冬初春の山里としてもどうにか詞書面は釣合ふが尚山里の冬に入つて日淺く一寸した雪をも珍らしみ觀る頃の閑適と見る方趣が深い。撰者も亦之を初冬の咏として冬の部六首目に配したものであらう。

三二〇　この川にもみぢばながるおく山の雪げの水ぞいまさるらし

考　五句　元・筋「はやまさるらし」

語　この川に　谷川に面と向つていふ詞。おく山の　必ずしも一番奥の山ととらず山里からさして漠然とその水上の上流をいふ。雪げゝ水　雪消えの水の約、雪解の水。とても同じ道理だが音訓混用でもあり、語の成立とも違ふ。又雪氣といふもある。これは雪の降る前兆といふこと。「雪げの風」「雪げの空」などはこの雪氣で別である。

語　この川べりに（立つて見ると）アレあの様に紅葉ばが流れてをる。（定めて石のはざまや岸の芝に滯つてゐたものであらうが　あれが流れることを思ふとさては）奥山の雪どけの水は、今しも水かさまして流れてゐるらしいわい。

評　「さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとゞまりて霜いと白う置ける朝、遣水より煙のたつこそをかしけれ」と兼好がいつた通り、冬枯の紅葉も亦一種の風情があつて決して季節おくれといひおとすべきではない。山里閑居の人、立つて谿流の岸をそゞろ行く折柄流葉昔の秋を語り顏に漂搖するところ「これは」と小さい驚喜に始めて川面に目をとめて暫らくこの小さい漂流者の小さい運命について想像して見る「なぜにもつと早く

流れて來なかつたか？　秋の淺川で流れるたづきがなかつたものだらう。それがなぜ今この樣に流れるか、雪が消えたので水嵩增した故であらう」と閑人の閑想が面白い。

三二一　古郷は吉野の山しちかければひとひもみ雪ふらぬ日はなし

考　初句　清頭「本ノ説ヲカヤトハトモ」
　二句　元・筋「吉野のやまの」　顯「ヨシノノヤマモ」
　　新撰和歌「奈良の都の」
　五句　新撰和歌「降ちぬ日ぞ無き」
　六帖二みゆき・　新撰　同。

輯　古郷　吉野の里をいふ。以前から離宮のあつた處だから歌にはふるさとと咏むこと早くからの慣用である。應神天皇紀に
　十九年冬十月戊戌朔。幸二吉野宮一。時國栖人來朝之。因以二醴酒一獻二于天皇一。而歌之曰。
　伽辭能輔珥　豫區周塢苑區利　豫區周珥　伽綿盧淤朋瀰枳　宇摩羅珥　枳虛之茂知塢勢　磨呂俄智
と、此が史上に見えた始めで、爾後雄略天皇の二年冬十月、同四年秋八月、齊明天皇の二年、天武天皇の八年五月朔、持統天皇四年二月等に行幸の記事がある。吉野の山し　吉野を以て奥山とし、寒冷雪多き山と思ひ定めた云ひ方「し」は強意。

輯　ふるさとはあの（雪に名高い）吉野の山がサ近い處なので、たゞの一日だつて雪の降らぬ日とてはない。

評　日にち毎日雪が降るがそれも道理でこゝは吉野山近くだからといつたもので、その雪に對して悅んだものか、わびたものか、その點がはつきり出てないのが缺點である。一六には野邊近い家の一德で鶯だけは毎朝聽かれるといつたこれは明らかに鶯を悅んだ歌である。けれども、ここの歌で毎日雪見が出來ると悅んだ餘情は少しもない、と謂つて、何等價値感情を寄せることなしに詩といふものは成立たない。歌は測候所の晴雨計ではない筈だから唯「故郷雪多し」といひその原因を説いて「吉野山近きが故に」といふのでは單なる説明に陷る。で、强ひて推測すれば、行幸跡絶えて幾十年ましてや今は霜枯れのいとど淋しい山里――それが古郷の趣で、かてて加へて吉野山近くのこととて繽紛たる六花が昨日も降り今日も降り廢都の冬枯といつた風の滿々たる氣分の滲出であらうか、何にしても表現晦澁といふのがこの歌の難點である。

三二二　わが宿は雪ふりしきて道もなしふみ分てとふ人しなければ

考　六帖二やど　同。

輯　わが宿は　わたしの家は、富貴權榮にして人の出入しげき家とは事變りと他と區別したいひ方、雪ふりしきて　下句との聯接上雪が降り敷いてと解く、雪が降り頻つてとしても意味は聞えるが、「道もなし」とのつゞきがよくない。ふみ分てとふ　雪をふみわけて訪問する。必要か誠意かがあればよしや雪が降り埋んでも態々その中を踏み分けて訪ふ筈だがとの意を含めていふ。人しなければ　人がさ無いからとひどくその往訪の人無きを詫びたいひ方。

輯　我宿は雪が降り敷いて　軒端一面を埋めたので）道も（ろくに）無い（やうになつた）（それも來訪の客でもあればだが態々）雪道をふみわけて訪ふ人もサ（誰も）無いのだから。

評　冬が來て雪が軒の四周を降り埋めることは敢て我宿とは限らないが、家にはその雪をかき掃ふだけの人手もなく身づから下りたつには懶いしといつた有樣――それも絶えず出入の客でもあれば軒自ら徑をなすのだが、世にわびしれたこの宿を態々訪づれる人もないものだから愈々以つて雪の島流しといふ格である。但し作者の境遇は必ずしも逆境と固定せず山里閑居の人の人なつかしの述懷と見ても聞える。新撰萬葉集下に

わが宿は雪降りこめて道もなしいつこはかとか人のとひこむ

は、これと形の相似たものだが、主想こゝのは往訪の人無しと詫びたのが力點なのに對して「いつこはかと云々」は專ら雪の降りこめたといふに力が入つて居る。又寛平御時后宮歌合冬三番の右に

我宿は雪ふる野邊に道もなし何處はかとか人のとめこむ

もよく似て居るが、矢張力點は上の句にある上に往訪の客を豫想さへして居る。冬籠特有の氣分季節の倦怠と生活の幽寂とはどうしても木集の形でなくてはならない。さては以上三首共同人改作で次第に推敲精煉を經て出來たものかとも思ふが、又當時にあつてはポピュラーな咏歌は撰者や中繼者の頭で自分の好ましい口調に一部改作することもまゝあるから　その點は今遽に斷言し難い。

冬のうたとてよめる

三二三　雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲ける　紀貫之

考　作者　元「〇貫之」

六帖一雪　同。

雪ふれば　二句にも四句にもかゝるといふが、二句にはかけなくとも理りが響くからこれは四句だけにかゝると見たい。雪が降ると、冬ごもり　越年すること、冬になつて草木でも人でも内に引き籠ること、精氣を内に藏して春になると芽を張り活氣を呈して來るところから「冬ごもり春さりくれば」と樣に「春」の枕詞にも使ふ。春に知られぬ花　この一首の點睛となつた名句で春は大抵の花なれば關り知るものだがこの雪の花ばかりは知るまいと樣に雪の暗喩春の擬人（而かもユーモラスな）をこめた作者得意の修辭である。

冬ごもりしてゐる草も木も雪がふると（おしなべて美しく）春にも知られない（秘密不可思議）の花が咲いたなあ。

評　霏々として散り、繽紛として飛び、枯木に花を咲かせ、枯草に花を咲かせ、睡るが如き冬枯のあらゆる物象に生彩光華を帶ばしめるもの、雪の美はこの數句に盡きるものだが、何處で見てもいつ見ても見飽きのしないのはこの景致である。さりとてこの種の形容は已に和漢の詩歌にことふりて居る。この歌「春に知られぬ花」の佳句によつて好諧の暗喩とし、作者が小供のやうな無邪氣さで雪を悅び眺めて居る有樣を巧みに表して居る。

もと〳〵この種の着想は貫之が得意の壇場とも謂ふべく、已に春の九に

霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける

と反覆句によつて佳調をなし、拾遺一六四亭子院の歌合には

櫻ちる木の　風は寒かちで空にしられぬゆきぞ降りける

と逆に花を雪に譬へて此も秀咏と謂はれて居る。尙も雪を花に譬へて三六三の屏風繪の歌に

白雪のふりしく時はみよし野の山した風に花ぞちりける

ともいひ、家集には「延喜十七年八月宣旨によりて」と詞書して

梅が枝に降懸りてぞ白雪も花の便に折らるべらなり

ともいひ、何れも個の生命を吹き込んで別趣の歌に仕立てた手際もよし、その底に流れて居る自然美の相似感の深さ强さをも示して居る。

志賀の山ごえにてよめる

三二四　白雪の所もわかずふりしけばいはほにもさく花とこそみれ　紀あきみね

考　五句　六帖一雪「花かとぞ見る」

評　所もわかず　場處のわけ隔てもなく、どこもかしこもおしなべて　ふりしけば　降り敷いたもんだから　いはほにも　花に緣の疎い岩にまでも　咲く花　花咲くを倒裝したのは上の「ふりしく」に導かれて「咲く」を早くいはう爲めである。

釋　白雪が場處の差別もなく一面に降り敷いたもんだから（滅多と花の咲くことのない）巖にまでも（時ならぬ又場處ならぬ）花が咲いたかと思はれる。

評　志賀の山越は岩石磊砢として溪流處々に激し花に名高く紅葉に名高いことは、此迄の歌にあつた通りだが、これは珍らしくも岩を採つてをどけた雪の美を咏んだものである。一首の佳處は無論下の句にあるのだが、この種の着想は必ずしも作者の創意ではない。天平勝寶三年正月二日積雪四尺にも及び大伴家持の館で賀宴を催したが、翌三日内藏忌寸繩麿の宅の賀宴には益々大雪で、

于レ時積雪彫成二重巖之起一、奇巧綵發二草樹之花一、屬レ此據乘朝臣廣縄作歌一首

と詞書して四二三一に

なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巖にさけりけるかも

といふがあり、之に唱和して蒲生娘子が

雪島の巖にたてるなでしこは千世に咲かぬか君がかざしに

と歌つたのも直ぐ次に出て居る。これ等が這般の着想の早いものであらう。

三二五　ならの京にまかり（誤れ）ける時にやどれり（抄ナシ）ける所にてよめる　坂上是則

みよし野の山の白雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり

考　詞書・作者　元「よめる」の三字なし○○是則。　是則集「奈良の京にまかりて宿る所に」　六帖一雪師走・金・世六　同。

釋　ならの京　新京平安の都に對して舊都奈良を區別していつたもの。故郷　こゝでは奈良をいふ。實は宿泊した夜寒の感じから旅れの宿を奈良一圓の時候におしひろげて故郷といつたもの。

釋　みよしのの山の白雪も積つてゐるらしいわい、……といふもんには舊都の奈良もこの通り寒さがきつくなつてゐるので、（どうもさう想はれる）

評　作者は吉野の雪について三三二の秀咏ある人でもあり後來大和權少掾・大和權掾などに任ぜられてこの國に緣もある人なのだから、舊京奈良に宿泊する機會はそれまでとてもあつたものと想はれる。（但しそれが何の時何の要件でといふことは明瞭でない）

先づ舊都の宿について夕食をしたためて、しばらく休むとどうもぞく〳〵寒い、何となく底冷えがする。冬といへば雪、雪といへばみよしのはこの節歌人の常套なのだから、モウこの分では奥山の歌境として名高い吉野山も雪が積んで居らうと想つたまゝを歌にしたものであらう。

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　ふぢはらのおきかぜ

三二六　浦ちかくふりくる雪は白浪のするのまつ山こすかとぞみる

考　詞書・作者　元「……歌合に○○　○○興風」　拾遺四・冬二三九「題しらず　人麿」　二句　新撰「降り敷く雪を」

冬　三二一九・三二六・三二七

五句　嘉「こすかとぞみゆ」

興風集・六帖一雪・寛平歌合左一三　同。

類 浦ちかく　湖海に近い水郷をおしなべて浦といふ。　こゝは單に或浦ととれば可い。下の句にかゝはつて末の松山近くの浦などとつてはまちがひだ。すゑのまつ山　問題の歌枕である。一〇九三で説かう。

鑑 浦近く降る白雪は（處柄とて古歌に波がこえぬためしに歌はれた末の松山に波が越えつゝあるのかと）ふと見あやまられる。

評 一〇九三を本歌にふまへ浦の雪を輕く打興じたもの、稍俳諧歌めいたをかしみである。後撰六秋中二七三　讀人しらず

浦ちかくたつ秋霧は藻汐やく煙とのみぞ見えわたりける

は秋霧と煙と物はちがふが聯想形式はこの歌から暗示されたものと想ふ。作者を「人麿」などしたのは、歌の格調を考へない無稽の妄測である。

三二七　みよし野の山の白雪ふみ分ていりにし人のおとづれもせぬ

壬生忠岑

考 作者　清「にふのたゝみね」

五句　元「音づれもせず」

新萬上　三吉野々山之白雪踏別手入西人之音都禮裳勢沼

忠岑集・寛平歌合左六・六帖一雪　同。

類 いりにし人の　山入をした人が、當分か永久かとにかく山住をするつもりで山に入つた人のといふこと　おとづれもせぬ　本入がちかに歸ることは愚か、消息一つも起さない。

鑑 み吉野の山の白雪をふみ分けて山入をした〇〇の君は（てんで歸つても來ないのみか）たより一つもせない。（ああその人は健在なか否か？　時柄、處柄、人柄によつて無がかりなことよ）

評 「言傳は愚か手紙一つも起きぬ」といへば、今ならば大抵相手の無沙汰を責める氣味があるが、こゝはそれとは違つて親交ある仲の相手が思ひ入つて山住をしたもので、その人の安否を時處にかけて氣づかつたものであらう。若しもこれが二月三月の頃であつたならば、その人定めて花よりあくるみよし野の景を心ゆくまでに觀賞してもゐよう羨しきの極みよとなるが、雪深き冬の山入であるから沍寒指をおとす苦しみが想像せられる。又これが東山とか西山とか北山・石山位の處なら、此亦悠々閑日月に親しむ友を想うて欽羨するだけであるが、當時奥山といへば代表のやうになつて居る吉野山だから案じられる譯で、又若しその人さほど親交ある中でもなく、ホンの一寸した面識程度の者ならばさう深くも心配しないが、此迄刎勁の交りをつゞけ花晨月夕の觀をも共にした親友だから氣にかゝるとなつて、つまり時と處と人とにかけて相手の生活境遇をきづかつたものと想ふ。但しこれは事實の歌か空想の歌かといふに、當時の人々はいくら思ひ入ると謂つても高々關雄の東山少し延長しては義懷の横川位のもので、多武峰少將の多武峰は中で出色の深山住まひだが、先祖鎌足の廟といつたゆかりがあつてのことである。何のいはれなくして吉野まで出入る物好きは先づは無かつたらう。若し事實あつたとすれば確に特筆に値するといふので詞書に特筆大書される處であらうから、此は机上題咏と看られた金子氏の眼が高いと思ふ。（物語の上ではうつぼの高陽縣の后母君が吉野に行ひすましてゐて、吉野の尼君といはれたのがある）

後年鎌倉鶴岡八幡宮の廣前で靜が白拍子を奏でた時

吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき

としたのは意膚浅にして餘情乏しといふが、これは舞詞として舞の動作と同時にその情趣を觀衆に訴へるものとしては已むを得ないし、この次更に

吉野山峯の白雪ふみわけて入りにし人のあと絶えにけり

と絶望悲痛の姿態を以て舞ひ納めたとあるから、いはば二首聯作で、二つを關聯して味へればなか〳〵に悲痛哀感の深いものがある。況んやその人の事實愛人思慕の切なるものあるに於ては、その點確かにこの歌よりも強く讀者に迫るものがある。尚追加しておくこの歌契沖の一解に、「雪ふみ分て心つよくいる人と思ふもしるくやがて音づれもせぬとよめる歟」とある。成程新撰萬葉上の左詩「遊人絶跡入二幽山一泥レ雪踏レ霜獨蔑レ寒」などはこの氣味もあるが矢張前述の解が正しい　尚これと補角的な次の歌についてみても同様に感ぜられる。

三二八　白雪の降てつもれる山里はすむ人さへや思ひ消ゆらん

考　詞書・作者　元・筋「題しらず　同人」

三句　忠岑集・新萬上「故里は」　新撰「古郷に」

評　降てつもれる　一時に降り積るのでなく昨日も今日も降りつゞいて連日の雪が山と堆く積つて居るといふ程の語感がある。すむ人さへや　雪は日にとけて消えるものだが、雪のみならずそんな寂しい山里に住んでゐる人さへもマア、思ひきゆらん　氣がめいつてしまふことであらう。といふことを雪の縁語で「消ゆ」といつたもの。

講　（毎日）白雪が降つて〳〵降り積つた山里では（雪のみならず）住む人までも（寂しさに）消えるやうな思ひのすることであらう。

評　想は前のと關聯して山住の人の寂しさを思ひやつた歌である。技巧は下句に一節あるが力は前ほどに強くはない。

雪のふるを見てよめる　凡河内みつね

三二九　雪降て人もかよはぬ道なれや跡はかもなく思ひきゆらん

考　詞書・作者　元「よめる」の三字なし　〇〇〇躬恒」　六帖一雪　同。

講　道なれや　道にあればや、道だからさてこそ（愚考別にあるが後にいふ）　跡はかもなく　跡はこれ〳〵としかとした目當もなく「はか」は「計」などあてて「はかり」から來たものそれと推測つて云々する根據といふ程の心、めあて・あてど・限りなどいふに當る「はかなし」「淺はか」などの「はか」にもこの意味が結びついてゐる。

寛平御時后宮歌合の歌の「いづこは　とか」（前にあげた）なども同じ用例なり後撰戀六四一の

今日過ぎば死なましものを夢にてもいづこをはかと君がとはまし

も同類である。

講　（雪のふるのを見てゐると瞬くうちにあたり一面を埋めてしまふ。あゝこの我が今の思ひも丁度あの樣に）雪が降つて人も通はぬ道同樣であるかして何といふ物とはなしに消え入る思ひのすることよ噫。

評　暫らく在來の註のやうに解いておいたが、愚考では、前の忠岑と同樣山住の人の淋しさを思ひ遣つたものと思ふ「丁度御住まひになつてゐる處が跡はかもなく道消ゆる如く御身も行人絶え、積雪鎖す此節の籠居に定めて消入るばかりの淋しい思ひしてゐられませう」と樣に……けれどもそれにしては詞書が不充分である。さりとて從前の解では最後の「らむ」の附けどこが變なものだ　自己豫定として「マアこの調子でしまひには思ひ消えることであらう」と對未來のらむとするより外ない。

ゆきのふりけるをよみける　　七五〇　きよはらのふかやぶ

三三〇　冬ながら空より花の散くるは雲のあなたは春にや有らん

考　詞書　元「雪のふるをみて」
　六帖一雪　同。

語　冬ながら　まだ冬にありながら、まだ冬であるにも拘らず　空より花の散くる　大空から花が散つて來るのは、花のやうな雪」といふ直喩に一歩を進めれば「花の雪」となるがこゝは雪のことは詞書に讓り、更に一歩を進めて直ちに雪としたのが面白い。雲のあなた　雲を隔てた彼方の里、暗雲の低迷を想はせる句　春にや有らん　春なのだらうか。

評　今はまだ冬であるにも拘らず、大空からこのやうに花が散つて來るのを見ると(偖は)雲の向ふの里にはもう春が來たのであらう。

春にあこがれ花にあこがれしてゐる情趣が、忍びやかに一首の裏を這ひまはつた趣が見えるのもよろしい。綿のやうな雪雲が低くさまようてゐる暮一重向ふには最早我待つ春が忍び寄つて居るけはひを感じてゐる、折柄その大空から降るものはたとひ鹽でも綿でも紙屑でも作者の花を熱望する心持では「花」といひ切りたさうなところを、似も似た六花の翩翩と來たものだから、思ひ切つて花といつたその心持から味へては決して突飛ではない。一首稚想と熱望とで詩趣を釀して居る。貫之集に、これとよく似て

春ちかくなりぬる冬の大空は花をかれてぞ雪もふりける

とあるのは常識的な妥當感はあるが、情熱に缺けて居る。

雪の木に降かゝれりけるをよめる　　つらゆき

三三一　冬ごもり思ひかけぬをこのまより花とみるまで雪ぞ降ける

考　詞書　元「雪の木に降りかゝりたるを見て○○○」
　二句　清「おもひかけぬを」
　五句　六帖一雪「雪は降りつつ」

語　冬ごもり　季節の汎稱とも、草木そのものの冬籠りとも解いたものがあるが、他の同句の續き柄を考へこの句の下のつゞきを推しては作者自らが冬籠りをしてと謂つたものと採るべきである。思ひかけぬを　(花を見ようなどとは)かけても豫想してゐないものを　このまより　樹の間から、韓退之の詩に「故穿三庭樹一作二飛花一」と春雪を味じた句があつて、木の間の雪を花と見たてたものは彼我古今共に多い。花とみるまで　花かとばかり、花と見まがふ程　雪ぞ降ける　雪がサ降つたわい。

評　これは奇觀と暫らくその雪に見惚れた歌境である。冬木の雪を花と譬へることは已に、萬葉九冬雜歌一六四五に

巨勢宿奈麿の
　吾宿の冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも

同一六四七忌部黒麻呂の
　梅の花枝にか散ると見るまでに風に亂れて雪ぞちり來る

とあるし、新撰萬葉下にも
　このまより吹くる風にちるときは雪も花とぞ見えまがひける

とあり、六帖にも

木のまより花にまがひてふる雪は春くるまでは花かとぞ見る

とあり、敢て斬新を誇るに足らぬものだが、初二句の輕い出方は以上の類咏の何れにも見られない。實際單調な矢先には一寸した變化でもそれを大袈裟に取はやしたい氣持のするものだから、冬籠中に於ける意外の發見として木の間の雪の花と散るまでに飛散するのを珍らしんだのは實感としても肯づかれる。又修辭の上から見ても、前揭四首の拙劣さに比べて一等を擢んでて居る。

やまとのくににまかれりける時に、雪のふりけるを見てよめる

坂上これのり

三三二　朝ぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪

考　詞書　筋「……時○雪……見て○○○」元永本は「時」もなし。

是則集「大和の國に罷りける時雪の降りければ」

二句　頓「在曙の月と」

四句　元・筋・是則集「よしのゝやまに」

六帖一雪・百ノ三一　同。

語　朝ぼらけ　朝期明の約、晴れたる日の夜明け方をいふ。一說朝開きの轉ともいふが、これは朝船か漕ぎ出すことにのみいふやうだ。「朝ぼらけ」は雨天などの夜明には云はない。古くは凌晨とも當てた。有明の月　夜明けて猶天に在る月の義、陰曆十六日以後晦日までの月。詩に殘月、曉月などいふもこれ。萬葉十に

白露を玉になしたるながつきの有明の月夜見れど厭かぬかも

みるまでに　見紛ふばかり、吉野の里にふれる白雪　吉野の村里に降つた白雪の儘でも興多きかなや。

語　ほの〴〵と明けわたる夜のしら〳〵あけに（見渡すと）有明の月かとばかり吉野の里に白雪が降つて居る。（これは珍しくも興ある雪の眺めかな）

評　「思ふにその雪積んで尺餘に及んだものであらう」と様に解くのは眞淵、「有明月が山の端に傾いて後も尙月があるかと思ふとそれは雪であつた」と様に說くのは契沖・宣長「雪の夜色は何も多く積らなくとも地上の物象を覆ふ程度で澤山だ。否なこゝの雪は薄雪としてこそ趣がある。若し始めから雪の衾なす樣ならば、前夜宿につく時已に雪だと見たのだから朝になつて有明の月かとはいくら寢惚けても誤認しない筈だ。」と樣に說くのは金子氏。先覺の解釋何れも一見識あるものながら、愚考を以てするに作者が珍らしみ見たといふのは、多年都市の雪のみを見て村里の雪を見馴れないといふ意味であつて、冬淺くして都はまだ雪のけはひもない。否吉野とても夜前この宿についた時はカラリと晴れて明日も多分に天氣だらうと思ひ込んで寢たものが、朝になつてヒョツコリ雪を見たので、珍しいと限る必要はなからう又前の晩已に雪が積つて居つたからとて、何も雪のことばかり思ひ詰めては居ないのだから、ふと忘れて月かと見紛ふ位のことはあらうし、雪だと知りつゝ之を一首の詩興にまで高揚して「月と見るまでに」といふのも無理はない。あまり宇面を克銘に辿ると琴柱に膠するやうなことに陷らう。けれども積雪膝を沒するまでの大雪では、地上の物象は痛く變容されて目に映るのだから矢張り金子氏の謂はれるやうに地上の物象はその原形を崩さない程度に、有明染めにした薄雪と見た方がこの歌境の實際に近からう。前の三二五の歌を咏んだ翌朝同じ宿で咏んだかと思つたものもあるが、前のは奈良で山川幾重を隔てた吉野の里は千里眼ならでは見渡されない。では想像で咏んだかともいはれようが、この歌ひ樣はどうしても實景に面接した咏み振だからさうもとれない。では三二五でならの宿で吉野の雪を想像し、だん〴〵嘗が乘つて翌日實地踏査に出かけての咏かといふに、これは何とも謂はれない。作者が若し歡風の旅行でもして居るのなら知らぬこと、大和の目といつた風の國廳の屬官であつたならばさる閑日月はありさうにも想はれない。けれども季

節の點では三二五と同時としても無理ではない。又有明月の頃月の入りの後も尙月あるかと想ふのも面白いが、それはそれとして別種の表し方、例へば「あさぼらけ有明の月の後も尙面影見ゆるみよし野の雪」とか何とか工夫がつきさうだから、態々有明月の頃と限る必要はなからう。こゝに「有明の月と見」たのはそれが「朝ぼらけ」だからなのでそのことは初句にちやんと斷られてある。（事實有明月があらうがなからうがそれはこゝの歌境にはあまり影響はない）

それ等細部の穿鑿を止めてこの一首を朗誦すると曉曉玉の如き、和偕の裡雪より明くる三吉野に驚異する作者是則の心にくい歌膝姿が髣髴して想詞音調倶に備はつた秀咏であることがわかる。

題しらず　よみ人しらず

三三三　けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそみめ

考　四句　元・筋「たちなばゆきを」
六帖一雪・新撰　同。

講　けぬがうへに　消えぬが上にの約、消えずにまだあるその上へ　ふりしけ　降りしきれの約、降り敷けともとれるがこゝはある上に尙も降り重ねよといふので、つまり降ること頻りなれの方がよく適ふ。春霞　春も立ち霞も立つて雪に取つて代るやうになることで、唯、春だけでも聞えるところを、景物の霞をとつて「立つ」た秀句的に匂はせ、冬と春、雪と霞と樣に對照感を歌ひ込んだものである。まれにこそみめ　めつたと見るやうなことはあるまい。たまにしか見られまいから。

講　（雪よ、雪よ、み空の雪よ）地上の雪が消えずに在る上に又も降り重ねよやがて春が立つて霞が立つやうになつたならば、もうお前を見ることはめつたとなからうぞよ。（だから、今の間に心ゆくまで賞翫しようぞ）

評　寒いとは云ひ條京や奈良の冬は北の國に比べては微温的な冬で、五寸降つても雪見酒なんかとはしやゞのが上方人の常だから、實際雪に對する未練もかうした至囑を表す位のものである。技巧も練れてあり感味もあり、愛雪の執着も初二句に活躍してさながら今日のスキーフアンの口吻であるのも面白い好咏である。

さて本集雪を主想にしたもの、始めに三一八に「今よりはつぎてふらなん」をおきこゝに「けぬがうへに又もふりしけ」をおき雪を愛好する歌を以て始終した編輯振もなか〳〵上出來である。

三三四　梅の花それともみえず久堅のあまぎる雪のなべてふれれば

このうたはある人のいはくかきのもとの　人丸が歌なり

考　詞書・作者　元「人丸」　筋「柿下人丸」　拾遺一・春一二「題しらず　柿本人丸」　卅六　人丸
柿本集下・道濟十體　第七器量の歌・卅六　同。
六帖一雪「梅花共とも見えず降雪のいちじろけむな眞使やらば」

講　それともみえず　上に「梅の花」とおいたから「それ」はその梅の花を指したもの、梅が梅とも見られない。久方の「あま」の枕詞　あまきる　天霧る、愚考「天に霧り合ふ」の約と思ふ「きり」は遮る意で上代ラ行四段に活いた動詞だからその第四活「きる」の上に「天」を置いたものと見れば簡單な樣だが、「なべて降る」といひ「梅を雪と紛らす」といふのだから單なる靜的な「きる」でなく入り亂れて「きりあふ」といふ方が精密である。きりあふの約「きらふ」その約「きる」である。大空にかき曇つて飛び散つて居る雪、かう譯しても「天霧る」の「天」は接頭語と見ては可けない「大空に」といふ「天に」の「に」をとつたものと見るべきである。なべてふれれば　おし並べて降るもんだから、滿天風雪といつた趣をいふ。

講　梅の花はどれが花とも見別けがつかない（何分にも）大空一面にきりわたる雪が（そこら一面）おしなべて降るもんだから。